

わっかない

子ども 若者 2016・2017

稚内市子どもの貧困対策プロジェクト会議 研究紀要



稚内市教育連携会議
稚内市子どもの貧困対策プロジェクト会議
稚内北星学園大学

この街だからできることII



稚内市教育長 表純一

このたび本市における「子どもの貧困対策」の研究紀要第二集ができあがりました。当初から2年間分を1冊にまとめて発刊したいという計画でしたが、稚内北星学園大学の若原先生が稚内を離れたことから編集作業の大幅な変更を余儀なくされました。

先生が稚内を離れることは非常に残念でしたが、先生の学者としてのキャリアの問題でもありますので気持ち良く送り出し、研究紀要の発行は別途方法を考えていました。

にもかかわらず、若原先生からは「今後も稚内の子どもの貧困対策に関わり続けたい」とのお話をいただき、多忙なスケジュールの中、執筆作業から編集作業まで力を注いでくれました。大変ありがたく思っています。

この2年間、「子どもの貧困対策」を通して多くの方と新たななかかわりを持つことができました。

昨年8月に「稚内市子どもの貧困対策コーディネーター」養成講座として、子どもの貧困連鎖 STOP 講習会を開催しました。

結果として64名の方がコーディネーターとしての資格証書を授与されました。

これも新たな出会いだと思っています。

各中学校区のなかで、主体的に子どもの貧困と向かい合っただけの方を養成しようとした、このコーディネーター養成講座にこのように多くの人に参加いただけたこと自体、この街の持っているポテンシャルを改めて感じる出会いでした。

この取り組みを通して得心したのは、これこそが「住民自治」ではないかということです。

地方自治は、選挙で選ばれた首長と議員とで自治体の課題に対応するのですが、そこに住む住民自らが、主体的に課題解決に向けて取り組むことが、本来の自治の姿＝住民自治であると言われていました。

コーディネーター養成講座の受講者はまさにこのこと、住民自治を体現していると感じました。

今年度も新たな仲間と共に、子どもの貧困対策に取り組むことができるのは、この街の力だと思います。

いつも申し上げているのですが、「子供の貧困対策」について、一自治体ができることに限界があるのは言うまでもありませんが、教育に携わる者として看過できる問題でもありません。

子育て運動の街「わっかない」だからできることがあると信じて、皆様と共に一步一步確実に前進させていきたいと思っています。

改めて、皆様のご協力をお願いいたします。

わっかないの子ども 若者 2016・2017 目次

巻頭言 この街だからできること

…………… 稚内市教育長 表 純一 iii

目次 …………… iv

第Ⅰ部

平成 28 年度

稚内市子どもの貧困対策プロジェクト記録

1. 第 2 回稚内市子どもの貧困対策市民シンポジウム

(1) プログラム …………… 2

(2) 【発言録】子どもの貧困の連鎖を断ち切る『幼・保・小・中・高・大』の連携の輪を広げよう！！
…………… 6

(3) 当日資料 …………… 22

(4) 参加者アンケート集計 …………… 30

2. 稚内市教育連携会議・子どもの貧困対策プロジェクト会議記録

(1) 議事録 …………… 50

(2) 資料集 …………… 56

第Ⅱ部

平成 29 年度

稚内市子どもの貧困対策プロジェクト記録

1. 子どもの貧困連鎖 STOP 講習会

(1) 当日資料 …………… 64

(2) 受講者感想 …………… 101

2. 第 3 回稚内市子どもの貧困対策市民シンポジウム

(1) ポスター …………… 107

(2) 潮見が丘地区チーム報告 …………… 108

(3) 北地区チーム報告 …………… 111

(4) 東地区チーム報告 …………… 112

(5) 南地区チーム報告 …………… 115

(6) 参加者アンケート集計 …………… 118

3. 稚内市教育連携会議・子どもの貧困対策プロジェクト会議記録

(1) 議事録 …………… 133

(2) 資料集 …………… 142

第Ⅲ部

稚内市子どもの貧困対策関連調査報告

…………… 稚内北星学園大学 若原 幸範 150

編集後記 …………… 158

《表紙の写真について》



オオワシは、日本で一番大きなワシで、両翼を広げると 2m 以上になります。夏にロシアのアムール川やカムチャッカ半島などで繁殖して、冬になると稚内や知床などにやって来ます。大空を悠々とばたく姿はとても力強く、見ているとすごく勇気が伝わってきます。12 月から 3 月の間、稚内港や宗谷の海岸、増幌川沿いでバードウォッチングできます。

2018 年 斉藤マサヨシ

第 1 部

平成 28 年度 稚内市子どもの貧困対策プロジェクト会議記録

稚内市子どもの貧困対策講演・シンポジウム

子どもの貧困の連鎖を 断ち切る 『幼・保・小・中・高・大』 の連携の輪を広げよう！！



- 日 時 平成28年11月22日(火)18時半～
- 場 所 稚内総合文化センター 小ホール

- 主催者挨拶 稚内市長工藤広
- 講 演 松本伊智朗
- シンポジウム

シンポジスト 松本伊智朗（北海道大学大学院教授）
鎌田 正之（稚内東小学校校長）
若林 利行（稚内高等学校校長）
山下 優（稚内大谷高等学校校長）
斉藤 吉広（稚内北星学園大学学長）
表 純一（稚内市教育委員会教育長）

コーディネーター 加藤 良平（稚内市教育相談所長）

- 謝 辞 井上 幹雄（稚内市教育委員会教育委員長）

■主 催■稚内市 / 稚内市教育委員会

（稚内市教育連携会議・稚内市子どもの貧困対策プロジェクト会議）

ごあいさつ

稚内市長 工藤 広



子どもの将来がその生まれ育った環境に左右されないよう、また、貧困が世代を超えて連鎖することのないよう、必要な環境整備と教育の機会均等を図る子ども貧困対策は極めて重要です。

国においては、平成26年1月に「子どもの貧困対策の推進に関する法律」が施行し、同年8月には「子どもの貧困対策に対する大綱」が閣議決定されました。

本市においても、平成27年度から子どもの貧困問題プロジェクトにおいて、本市の子どもの貧困の現状を教育的な視点から調査・研究等を進めてきたところです。

本年度からは、幼稚園・保育所、小中学校、高等学校、大学、PTA、社会福祉協議会による教育連携会議を立

ち上げ、継続して取り組んでおります。

本日の講演・シンポジウムを通して、市民全体で現状を共通理解し、市民ぐるみの支援の連鎖と力合わせで、子どもの貧困とその連鎖を断ち切り、豊かな街づくりを進めましょう。

◆シンポジスト



松本 伊智朗 氏

【北海道大学大学院教授】

北海道大学での研究テーマは、福祉教育です。子どもの貧困がもたらす社会的不利や困難の解決や緩和のためにできることは何かを追求しています。全国的にも活躍している方で、稚内市での取り組みに多くの示唆を与えるくれるものと考えています。

主な著書

○「子どもの虐待と家族―「重なり合う不利」と社会的支援」明石書店（2013年）

○「子どもの虐待と貧困―「忘れられた子ども」のいない社会をめざして―」明石書店（2010年）



ほか多数



鎌 田 正 之 氏

【稚内市校長会会長・稚内東小学校校長】

稚内東小学校の校長であり、稚内市の校長会会長も務めています。東小学校には一般教諭として、教頭としても勤務しています。稚内市校長会会長として、稚内市の子どもと教育のために日夜奮闘している先生たちの先頭に立っています。



若 林 利 行 氏

【北海道稚内高等学校校長】

北海道稚内高等学校の校長になって2年目を迎えています。バイタリティーのある校長先生で、先生たちをグイグイ引っ張ってくれる校長です。ラグビーをやっていた体育の教師です。現在も高体連のラグビー専門委員長を務めています。



山 下 優 氏

【稚内大谷高等学校校長】

大谷高等学校の野球部の基盤を作った校長先生です。民間企業に3年間務めた後は、大谷高校一筋に勤務し、平成20年からは校長として、学園の理事として稚内の私学振興のために子どもたちのために頑張っている校長先生です。



斉 藤 吉 広 氏

【稚内北星学園大学学長】

メディア論が専門の社会学者です。稚内北星学園大学へ赴任して16年目で、学長になって1年です。これまでもPTA等で子どもとメディアの望ましい付き合い方等について、お話をされてきています。



表 純 一

【稚内市教育委員会教育長】

現在、教育長になって2期目に入りました。それまでも長い間教育行政に携わってきています。その時の経験が子どもの貧困問題に取り組むきっかけになっています。いつも精力的な、パワフルな教育長です。

◆コーディネーター



加藤 良平

【稚内市教育相談所長】

日常の教育相談活動から、子どもの貧困の問題は切実で緊急な課題です。このシンポジウムが、みんなで一緒に考える機会になればと思っています。

この取り組みに期待します。



◆和田 浩 稚内市校長会事務局長

「幼・保・小・中・高・大」の教育連携会議が誕生しました。この連携の輪を広げていくことが今後の私たちの大きな課題です。

◆大内 寿晃 稚内市公立学校教頭会長

毎日の子どもの様子を見ていて、貧困問題の切実さを強く感じていました。このような取り組みに教師として、学校として関わっていきたいと思います。

◆竹田 一美 稚内私立保育園協会会長

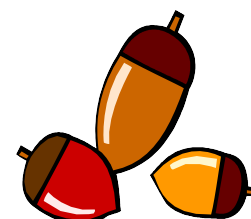
子どもの生活を考えると、親の生活の安定は欠かせません。この取り組みが子どもたちの笑顔につながることを願っています。

◆山田 仁樹 北海道稚内高等学校教頭

定時制に通う生徒を見ていると、切実で緊急な課題であることを日々感じています。連携の輪を広げるための力になりたいと考えています。

◆藤本 英文 稚内市民生児童委員連絡協議会児童福祉部会長

主任児童委員として、貧困問題は避けて通れない課題です。稚内市全体での取り組みに期待していますし、私の立場で一生懸命頑張りたいと思います。



子どもの貧困の連鎖を断ち切る 『幼・保・小・中・高・大』の連携の輪を広げよう！！

熱海早苗（司会）

子どもの貧困対策講演・シンポジウムを開催いたします。一日の仕事が終わってお疲れの中、また寒さが厳しい中、お集まりいただき誠にありがとうございます。私は、この講演・シンポジウムの全体司会を務めさせていただき稚内市教育相談所でスクールソーシャルワーカーをしています熱海と申します。よろしく願いいたします。

子どもの貧困問題について、松本先生に講演をいただき、それを受けて5人の方にそれぞれの立場からご発言をいただき、みんなで考えていきたいと思っています。

最初に、主催者を代表して、市長が公務出張で不在のため、副市長青山滋よりご挨拶いたします。

青山滋副市長

皆さん、こんばんは。ただ今紹介をいただきました副市長の青山でございます。本来であれば、市長の工藤がご挨拶を申し上げますところですが、生憎、出張でありますので、市長は今日は旭川医大の方へ行っておりますので、失礼とは存じますが、私の方で代わって一言挨拶をさせていただきます。

まずは、こうして多くの方々がお出でいただき本日のシンポジウムが開催できますことを嬉しく思っております。また、このように参加していただきお礼を申し上げます。

さて、子どもの貧困問題についてであります。本市においては昨年度、子どもの貧困の現状を教育的な視点から調査・研究をするため小中学校、高校、大学、それから社会福祉協議会、教育委員会などによる

子どもの貧困対策本部会議、またプロジェクト会議を設置いたしました。

また、昨年11月には、市民シンポジウムを開催いたしました。本日もお出でいただきました北海道大学大学院教授の松本伊智朗先生に講演をいただき、全国的な貧困の現状や本市においては子どもの貧困問題が市民ぐるみの街づくりの一つと捕らえているのが特徴であるというお話をいただきました。また、シンポジストの方々からは、教育、医療、労働環境などそれぞれの立場から、貧困の現状について正に今の声を伝えていただき、市民の方々からも貧困問題を街づくりの問題として捕らえることが幸せに暮らせる社会につながる、またお金のあるなしではなく、しっかり時間をかけて子育てをすることが求められているなど、様々な意見が出されました。シンポジウムには200名の市民の参加をいただき、我が街にも子どもの貧困問題が市民レベルの問題なったことを感じたところです。

さらには、12月には子どもの将来が生まれ育った環境で左右されないよう貧困が世代を超えて連鎖しないように、どのような取り組みが必要か、また求められているかという18項目による提言をいただき、本市としても真摯に受け止めさせていただいたところでもあります。中でも提言の冒頭にありました教育の機会均等をはかり子どもの貧困対策を進めること、また子ども貧困連鎖を防ぐこと、協働の努力に基づく取り組みは関係者が連携することによってすぐにも可能なことであることから、さっそく本年度から教育連携会議を設置いたしました。教育連携会議は、3回開催されたところでもあります。関係者による

さらに充実した議論が進められ、本市がこれまで実現してきた各相談窓口の充実や学校給食費の是正、医療費の無料化の中学生までの拡充など、各支援施策に加えて、さらに相乗効果がえられるよう取り組みを展開していきたいと考えています。

本年は、本市が子育て平和都市宣言をして30年目となります。我が街とそして子どもたちの明るい未来を保障するためにも、子どもの貧困対策を推し進めることは、今大人である我々の責務であると考えています。子どもの貧困の連鎖を断ち切るために市民ぐるみの支援でオール稚内で進んでいけるよう、本日のシンポジウムが充実したものになるようお願いしています。

松本先生、シンポジストの皆様どうぞよろしくお願いいたします。最後になりますがお集まりいただきました皆様には今後とも子どもの貧困対策の推進についてご理解とご協力をいただきますよう重ねてお願いを申し上げて皆様のご健勝を申し上げて、簡単ではありますが、私からのご挨拶とさせていただきます。本日は誠にありがとうございます。

熱海早苗（司会）

副市長は、公務のために退席させていただきます。

それでは早速講演に入っていただきます。昨年も来ていただいた、子どもの幸せのため全国を駆けめぐっている北海道大学の松本伊智朗先生、よろしくお願いいたします。

松本伊智朗先生

どうも皆さんこんばんは。ご紹介いただきました北海道大学の松本と申します。お寒い中、こんなにたくさんの方々がお見えになっているのは素晴らしいなあと思います。ご紹介にありましたように昨年もこの時期でした。11月の後半の時期、お伺いをしました。昨年、お話が十分でなかったのか、再履修をしろということで落第をしました。再履修に来なさいと

いうことをおっしゃっていただいて、再履修に来るのであれば、ありがたいと思って来ました。どうぞよろしくお願いいたします。昨年は飛行機が飛ばなかったんですね。JRのサロベツで何とか滑り込んで、ちょうど稚内に着く直前にシカに当たりまして。遅れてということをお記憶しています。今日は、やきもきたんですが何とか札幌は雪でしたが、稚内はどうだろうかと思いながら来ました。何とかたどり着くことができました。夏にはプライベートで利尻・礼文に家族でしたが、その時は台風の最中で、ここには秋に何うんだなあ、と思いました。この後、シンポジウムが予定されていますので、1時間ということですので、1時間で終わるということで進めたいと思います。

昨年もここにおじゃまをしています。昨年もお出でいただいた方がいらっしゃるんだろうと思います。はじめましてというかたもいらっしゃると思います。私はあちらこちらでお話をさせていただくことがありますが、話のネタが限られていまして、同じ事をしゃべってしまうことがあるかもしれません。昨年の記録を読み直して復習をしました。昨年、話をさせていただいたことを、お手元に関係者の方に渡っているかは分からないのですが、「2015 わっかないの子ども・若者」という研究紀要が発行されています。素晴らしいなあと思いました。何が素晴らしいかということ、昨年のシンポジウムがきちんと記されているだけでなく、後半、稚内の各関係者の方がそれぞれ子どもの問題、身近な問題で子どもの貧困、取り組みをまとめておられるということです。これだけのことを編集されることは凄いエネルギーだろうと思いますし、また、これだけのことが街でできるんだということが素晴らしい。先ほど、副市長さんがオール稚内という言葉を出しておられましたが、本当にそうだなあと思いました。これはお世辞でも何でもなく思っています。巻頭のところで稚内北星学園大学の若原先生が、き

ちんと全体の成果をまとめていっちゃうので、これを読んで、私がわざわざ言わなくてもいいながら。昨年も申し上げたんですが、子どもの貧困の問題を、先ほど副市長さんがおっしゃっていたように街づくりの問題として考えておらるというのが、私がここに来て、一番勉強になることであります。昨年申し上げましたが、子どもの貧困対策、子どもの虐待対策もそうですけれど、渦中にいるかわいそうな子どもはだれだという、その子にどうやって支援をするかという、そのことはとても大事なことです。問題が個別化されて、街づくりの問題として見えなくなる。広い教育、子育てという問題は、地域がどうなっているか、街の人がどう関わっていくのか、街づくりの観点がないとバラバラになってしまう。意識的なのか意識せずなのか分かりませんが、やっておられるのだと感じました。もう一つは、貧困という言葉について申し上げました。貧困率という観点から見たときに再分配、政策の再分配効果ということについてもお話をしました。もう一つは子育てが家族に集中するという構造、単に経済がお金回りがきつくなってきた、経済のパフォーマンスが悪くなってきたというのではなく、子育て、子どもの世話を家族に集中するという構造の問題を。

昨年もお話をしましたが、一つだけ復習、振り返りをしたいと思います。貧困という言葉は様々な定義が可能ですが、人間が生きて行くためには必要なものがあって、必要なものを欠いている状態を貧困と考えましょう、ということですので、古い、新しいということも無いですし、子どもも大人も無いですし、人間が社会生活をしていくうえで必要です。昨年は、アダム・スミスの例を引きながら靴の話をしたけれども。たとえば、私も靴を履くとか、上着を着るとか、飢え死にするとかという訳ではありませんが、社会習慣、恥ずかしい思いをしないように社会の一員として暮らしていくためには、何が必要だろうかという観点で貧困を考えていくことが必要ですね。

これが昨年のお話の一つでした。

もう一つは貧困率という道具を使って日本の特徴をみて見ると、上昇傾向にあるというだけでなく、子どもの貧困について政策介入効果が低いというお話をしました。貧困率とは何かということは、ここでは申し上げる余裕はないのですが、貧困率は、ある一定の所得以下の生活をしている人口比で、統計ですが年々あがっている。もう一点ですが、所得で測った貧困ですが、再分配前と再分配後で測ってみると、高齢者層で見ると年金の効果で貧困率は下がっている。下がっていても高いことに注意が必要です。二十歳未満で見ると、再分配前と再分配後であまり変動がない。社会保障制度は子どもの貧困率の削減に大きな効果を持っていない、ということが分かるという話もしました。これは国際的にみると、これは少数派で、だいたい場合は社会保障制度の介入効果で貧困率を下げるのが多い。まだ、日本は打つ手を持っているということが言える。こうした中で貧困率を考えましょう。

もう一つお話をしたことは、家族の話をしました。子育てにお金がかかるようになってくるし、家族そのものが変動してくる、孤立化してくる。核家族化、少子化が進むと親族網が縮小します。おじさん、おばさんが少なくなる。私の例でいうと父親と母親は7人と4人の兄弟の末っ子ですから、おじさん、おばさんは1ダース、従兄弟は2ダースあまりいる。父親、母親の兄弟・姉妹が少なくなると、おじ、おばが少なくなる。親族網が急速に縮小します。ゆえに家族の方に負担が多くなるという構造になっている。お金がかかって、世話をするということが家族に集中する。

もう一つは、子育てというのは、終わりが見えない。子どもを持つということがコントロール出来るようになってきている。子どもというのは計画的に育てるものになっている。これは人類の歴史の中で、最近のことです。このようなことが起こる。子どもの虐待が起こると、虐待するなら、生まなければ良いのに、

という簡単な話になる。生んだと決めた以上は親の責任でしょう。決めたというのは最近の話で、子育ては親だけではできないというのは人類の知恵であります。決めるというのは百年ぐらいしかたっていない。決めたのでやらなければいけない、という昔からなかった話が入ってくる。

子ども虐待の仕事をすることもあるが、渦中にある親は、私が決めたから、私がやらなければならないと内面化して、SOSを出せないということが起きている。助けてもらうことがいけないことのような気持ちになっている。おそらく人類の歴史の中で、決めたのだから、おまえがやれ、というのか、決めたのだから、みんなで支えるという、というのか、どういう社会を作りたいのか、問われているのだろうと思います。子どもを持つ、育てるというのは半端なことではありませんので、みんなで支えるということになっていなければ、なかなか決めれない。決めれないならば、おまえがやれ、と言え言えほど、子どもを持つというのは止める人が増えるのはあたりまえの話で、これ自体は人類の歴史の中で、この百年ぐらいの変化です。決めたんだから、みんなで支えましょう、という世の中になっていかないと、人類は持たないだろうと思います。決めたんだから、私がやる、決めたんだから、おまえがやれ、ということになれば、気持ちの上でも家族の負担が集中するということになってくる。家族に集中すればするほど、家族の状態が、お金がないとか、親が病気であるとか、ゆとりがあるとか、子どもの状態にはねかえりますので、貧困対策一般は、格差をどうやって縮小していくかという政策の介入効果をどう高めるかということになります。子どもの貧困対策は、それに加えて子育てを家族に任せるのではなく、家族と地域社会が協働でどう担っていくかということです。そう観点から考えていくと、先ほど申し上げた街づくりの観点、ネットワークを作っておられるというのが大きな意味があると思います。昨年申し上げたことは、以上のことです。

今年なんですけれども、個別の観点から、個別の子どもをどう見たら良いのかということについて、お話をしようと思います。一番お話を申し上げたいのは、大人がネットワークを作って、子どもと家族のために動くということが出来つつあるということです。振り返ってみると、子どもがどういう気持ちで、どうみているのかということ、親なり、他の子がどう見ているかを考えてみようということでもあります。

大きな政策動向でいうと、みなさんご承知のように、2013年には、子どもの貧困対策法、2014年には、大綱ができて、今取り組みが始まっています。去年から今年にかけて、自治体の計画は、2015年北海道が、来年札幌市がつくるということになっています。2016年、北海道と札幌市で子どもの貧困に関する大規模な調査をしています。私が札幌市の子ども子育て会議の児童福祉部会の部会長で責任者です。北海道のほうも同じような責任者で、たまたま同時にとりまとめ役になったということで、同じ調査法で調査を行っています。稚内市にも道のお願いで小2、小5、中2、高2で調査が回っていると思います。来年にかけて集計をして全国的な比較も行って行きたいと思っています。もう一つは、2015年には児童福祉法の改正がありました。児童福祉法の中に、初めて児童の権利条約に関する権利という言葉がきちんと入りました。子どもの観点から見ようということでは当たり前のことですが、公的に位置付いたこと、地域社会からすると子どもの虐待問題について自治体をもっと指導できるように強化していこうと打ち出されています。実は私、厚生労働省の自治体の機能を考えるワーキンググループの座長を仰せつかっています。このことも気になるんですけれども、同じように地域でどのようにネットワークを作って、単なる形式的な会議ではなく、きちんと機能するようなことが求められているように思います。このような動向があります。

もう一つは、子ども虐待問題では、母子保健のどこ

るを強化していくことが市町村に求められているところですので、いずれも街づくりの観点が益々大事になってきたなあと思います。個別の家族ということで虐待ということで話をしていきたいと思います。虐待問題で児童相談所が対応した事例の中で、複合的な困難があるということでもちょっとお話をしたいと思います。何年か前に厚生労働省が、道内の児童相談所の分析をしたものがあります。時間がありませんので、結論だけを言いますと、実は 119 例の分析をしましたが、返せない借金があるとか、様々な経済的な困難があるとか、エピソードが確認されたのが全体の 7 割でした。児童相談所で対応したケースですので。その事例を分析する中で、孤立の中で生活している親戚や近所の人、助けてくれる人が出て来てくれなかったというのが半分くらいあった。たとえば、子どもさんのほうに発達の遅れや障害などがあり、育てにくいというのが 6 割。たとえば、子ども虐待は生活のゆとりがなく、助けてくれる人がいなくて孤立しているなかで、個別に対応しなければいけないという背景を持っているということがある。いずれにも該当しなかった例は、119 例のうち 6 例だけでした。経済的な問題と孤立の問題、親御さんにメンタルの支えなければならぬ問題を持っている人がどれくらいいるかということですが、全体の 4 割ぐらいです。子ども虐待問題は、虐待だけを取り上げて考えるよりも、生活にゆとりがあるという、助けてくれる人がいる、孤立がなく、子どもの障害に対応する、親御さんにメンタルの問題があって支える地域社会のサポート必要だろうということになります。数は少ないですが親御さんが知的障害があるという問題もある。障害がある中で子どもを育てることで、お金がない、助けてくれる人がいない。DV であるとか障害であるとか、個別に対応しなければならぬ問題、経済的な問題と孤立の問題が見えてくる。たこれは、貧困問題の一つの表れかたであると思います。虐待問題の議論をするときは、子どもの虐待だけ

ではなく、子どもの育てにくさ、ご家族の病気であるとか、生活のゆとりだとか、見てくれる人がいないとか、そういうことをきちんと見ていかないと虐待のことを考えていけない、という話をするのですが、貧困の問題を考えるときにも、複合的な背景をみていかなければ対応が難しい。逆に言うと、お金以外にも支援者を増やしていくとか、家族の問題、病気であるとか、障害の問題とか、丁寧に対応していくことが貧困問題でも不可欠だと思います。そうすると単に貧困問題というところの所得の再分配のこともあり、自治体でできることは非常に少ない。ただ、個別の家族の問題でいうと自治体でないとできないことがいっぱいあるということです。そうすると個別の問題でどうつながっていくかということがとても大事なことだと思います。たとえば、反貧困政策ということで考えると、色々な実践や施策の組み合わせが大事になってくると思います。

ここで DVD を見ていただこうと思います。これは、山科の「子どもの広場」という実践です。

地域が子どもを支える優れた実践です。子どもを主人公にして、子どもからどんなふうに学ぶかという実践です。

【DVD を見る】

たとえば、この DVD を見て、こういうふう考えた訳です。お金がなくて、孤立をしていて、親御さんに相談をして。子どもの不登校もあり、分析をすると、私なんかは自宅訪問をすると、「メンタルヘルスをもって、貧困家庭で生活をする不登校の家族（一）」というように書くんですね。子どもはいろんな思いがあって、色々な経験をして、その経験がどのような意味があるのか、支えるということがどんな意味があるのか、随分考えさせられる訳です。私の感じ方ですが、随分リアリティがあるんです。実話に基づいて作っているのです。私が学生時代 30 何年前ですが、子ど

もが色々な事情で親と暮らせない。養護施設で、たまたま関わって子どもの勉強を教えるボランティアをしていて、その時の子どもの顔が浮かぶんですね。子どもの貧困ということでは特別な貧困があるわけではないんです。人が生きていくうえで、必要なものが欠けている状態が貧困だと思うんです。障害者の貧困だとか、女性の貧困だとか、貧困の種類ではないんです。貧困を子どもから見るとどうなのか、その渦中にいる子どもはどんな気持ちでいるのか、そんなことを考えてみるのが大切なんです。人が生きるのは家族であり、地域社会ですので、そこが大事なんだろうと思います。子どもの視点を大事にしたいと思います。子どもは無条件に世話をされて生きていくということを感じる最初の時期だと思います。楽しかった、ワクワクするとか、怒られたとか、悔しい思いをしたとか、外界に働きかけて、外界から大人だとか、友だちだとか、学校の先生だとかから世話をされて成長していくんだろうと思います。そうすると貧困でも虐待でも、子どもはいろんな経験をしながら成長していく。子どもらしい経験がきちんとできているかどうか、そのチャンスが奪われるとしたら、そのことが子どもの成長・発達に問題を生じさせると思うんですね。子どもの貧困で注目するのは、子どもの側から考えてみる、子どもにとってフェアな社会とはどんなものだろうと考えてみる。その時に、どの地に生まれても楽しく育つというのが子どもにとってのフェアだと思うんですね。たとえば、学校の先生に子どもの貧困対策、虐待対策をしましょうという、この忙しいのに、また新しいことをさせられるのではないかと、という感じになります。子どもにとって、楽しいと思える学校を作りましょうと、こう申し上げたらどうでしょう。多くの先生は、そういう学校を作りたいと思っています。そういうことが貧困対策、虐待対策になるんでしょう。たとえば、子どもが相談するというときに、学校にいておもしろくもなく、楽しくなかったら、相談することも何もできな

い。楽しい学校は大切。子どもは、親の状態次第で子どもの状態は変わる。子育てにお金がかかるというようになればなるほど、家族の問題に押し込められてしまう。そうすると、あそこの親が悪いとか、この親が悪いとなってしまう。家族の不利が子どもの不利に転化してしまう構造ができてしまう。地域社会にできることは、子どもの不利に変化させないような関わりをどうつくるかということがとても大事なことだと思います。これだけで貧困問題を解決できませんが、こういう社会がないと子どもにとって住みにくい社会であると思いますし、子どもの貧困が表れやすい社会となります。家族だけだと、子どものスタートラインが平等だったら、能力と努力で格差はできてもしかたが無いじゃないかと思われるかもしれませんが、子どもの格差は大人になってから引き継がれますので、子どもたちが大人になって家族を作りますので、必ず不平等になります。実はスタートラインが平等だった社会はないんです。格差があって、その格差がスタートラインになってしまう。社会が底上げをする施策をとっていないと、格差がどんどん拡大していくことになってしまいます。これが貧困につながっていく。そこで、学校というところは、拡大する格差を縮めていこうとする意味があると思うんですね。そうでなければ、世の中がすすんでいってしまう。そういう意味では学校、子どもに関わっている方々は、学校が子どもにとって心地よいところになるということはとても大事なことだと思ってほしいんです。

もう一つ、見方によって変わっていくということでは、DVDをもう一度見てください。

【DVDを見る】

とてもわがままに見える子ども、ちゃんと気持ちを聞いてもらっていないことが結構ありますね。福祉のおばちゃんとか、スクールソーシャルワーカー

とか出てくるんですけど、子どもの気持ちを聞いているんですね。「どうしようか」など相談しているんですね。子どもの言いなりになっているわけではなくて。子どもたちは、大事にされる、支えられるとか。

子どもの貧困は、生活の問題として、家族の問題としてお話をしました。問題が生活や家族に集中している構造が貧困に拍車をかけている、街づくりの問題として考えることをこと話しました。個人の側から見てくると、どんな経験なんだろう。いろんな不利が蓄積していく、対応の可能性がどんどん小さくなっていく。これしかないという生活をしていくと、対応の幅が狭められていくと思います。そうした中で、人とのつながりが消えていくということがある。色々の経験をして人は力がついてくるけれども、経験がどんどん落ちていく。端から見ると、何でそんなことをするの、もっとすることがあるじゃないか、という言い方をされるが、なかなかそういう経験をしてこないという問題がある。最後に、尊重されることが欠落されていく。貧困が連鎖しますと言われると、子育てについても誇りが奪われていくように感じします。相談をして、いやな思いをしてしまう。自分の意志をきかれないから、持てないということになってしまう。貧困でどういうことになるかということ想像してみるとということも大事だと思います。聞くということ、相談するということ大事にして一緒に考える。どうしたいか一緒に考えるということなんだと思います。

10年ぐらい前でしょか。法廷の見学をしたことがあります。子どもに関わる裁判で、法廷に出ないでビデオで発言するためのビデオカメラの操作の練習をしていた場面を見て、子どもがその後どうなっていたかということが凄く気になりました。心配してくれている大人がたくさんいたという経験をしたと思います。きっと。ビデオカメラの使い方なんかは、マニュアルで教えたっていいんですね。回りの大人が自分のために色々動いてくれているという経験し

ていると思うんですね。そのことの意味が大きいんじゃないかと思うんです。

貧困問題なんて、解決は簡単なものではないと思います。世の中の不平等そのものにかかっていますので。明日すぐに変えるのは難しいです。その家族を支援することはできると思います。支援しても何も変わらないかもしれませんが。その子どもがどんな経験をするかは、その子が支援されたことの経験は確実にできる。そのことが人生のなかで違うと思われ、大人になったときに何かを変えるかもしれないし、それに賭けるしかない。こんな効果がでましたというよりは、その子にどんな経験をさせてあげたかが大事だと思います。そんな大人がたくさんいるという経験をさせることが大事だと思います。そんな街を作ろうじゃありませんか。

稚内ではそんな気運があると思います。私は仕事の都合でいろんな所に行きますが、この稚内の気運は他にはないと思います。

熱海早苗（司会）

松本先生、ステキな話をありがとうございました。これからシンポジウムに入ります。加藤所長をお願いします。

加藤良平（コーディネーター）

加藤と言います。よろしく申し上げます。今年のシンポジウムは、保育所から大学までの関係者と稚内市で組織された稚内市教育連携会議の代表委員の方々にお話をさせていただきます。

簡単にご紹介をします。小中学校校長会の鎌田校長です。北海道稚内高等学校の若林校長先生です。稚内大谷高等学校の山下校長先生です。稚内北星学園大学の斉藤学長です。稚内市教育委員会の表教育長です。今、お話をいただいた松本先生にも最後にお話をいただきたいと思っています。

5人の方々には、それぞれのお立場で教育連携会議

の一員として何ができるのか、方向性について語っていただきます。最初に鎌田校長先生からお願いします。

鎌田正之（稚内市校長会会長・稚内東小学校校長）

今、ご紹介をいただきました稚内東小学校の鎌田です。先ほどのDVDを見て、感動をして涙を流してしまいました。どんな子どもも楽しい学校、来たらホッと出来る、笑顔になれる学校。学校に課せられているもの、そのこと自体が貧困対策なんだという話に感動しましたし、後押しされたなあと思います。

私は、ネットワークでも子どもをサポートするという観点から、中学校区にある子育て支援ネットワークの取り組みと子ども貧困対策と子育て運動という2つの点でお話をしたいと思います。

子育て支援ネットワークは、名称や構成メンバーについては多少の違いはありましたが、稚内市の市街地の4つに作られています。家庭を支援する教育と福祉の連携です。子育て支援ネットワークは、困り感のある家庭と子どもについて情報共有したり、可能なサポートをしたり、そんな目的で、学校を出発に近年作られたものです。始まりは、平成18年度に潮見が丘中学校において、個別生徒支援会議が開かれたものと聞いています。東地区は平成20年12月に、学校を休みがちな複数の子どもが休まないで登校できないかということの解決のために、学校が東地区民生児童委員協議会に相談したことを契機にスタートしました。その時の校長先生は、加藤先生です。

なぜ、地域のことを変えようと考えたということは、ふたりの学校を休む子どもの理由が学校における子ども同士の人間関係ではなくて、家庭的な課題であるということがかかっていました。いずれもシングルマザーの家庭で、しかもお母さんに精神的な病があったということです。東地区の民児協の会長さん、主任児童委員さん、南地区の民生児童委員のみな

さんに参加していただき、学校、SSW、で2つの家庭について情報共有し、支援について協議を重ねました。このうち一人は6年生でしたので、じきに小学校を卒業して、見守りを中学校のほうに引き渡すことになったんです。もう一人の子は、その後の見守りや家庭の働きかけによって、学校を休むことも減り、笑顔も増え、大きな問題もなく学校生活を送っています。今はもう小学校を卒業していますが、そういうふうに変わっていきました。

東地区の支援ネットワークは、その後輪を広げて現在、東小、東中、声問小の3校のネットワークになっています。民生児童委員さん、主任児童委員さん、関わってくれている方は12名になっています。見守り対象の子どもを見ますとまず休みがちな子どもです。休みがちになる背景には、親が子どもに学校に責任をもって送り出すという養育能力の問題であったり、病気による子どもの世話ができないという問題があるということがわかります。また、社会性が育っておらず周囲となかなか関わりが持てない、集団生活に馴染めないという休みがちな子どももいますが、そうした子どものなかに小学校まで育つ家庭の中で、親からの愛着が不足していたのが原因だろうと思われる子もいます。そこには親が子育てについて良く分かっていないということがあります。実は、親も自分の親から適切な子育てをされていないというケースもいつか見られます。それから次の見守り対象の子どもは虐待のそれが養育放棄にあるというケースです。満足に食事も与えられないという、身なりや体が清潔でない、暴力で子どもを押さえつけようとする、自己管理できない放任でゲームづけで睡眠を十分に取らないで登校させる、対話のない家庭で寂しい気持ちを持ち、様々な困り感を持っているが親が関わってくれないケースがあると思っています。平成20年12月に始まった見守り家庭は、今、小中に広がりましたが、22の家庭を見守っています。10倍になっているということです。ケースが増えたと

いうことは、それまで見えなかったことが見えるようになったということです。昨年、今も松本先生がお話していただいたように、子どもの貧困の深刻さ、親の状態がストレートに子どもに跳ね返りやすいという反映であるということが、稚内でも進行しているのではないかと考えています。支援ネットワークの力で、東地区では現在完全不登校の子はいないということで、成果として現れています。見守り家庭が増えている状況は、学校と福祉の力が協働するということが益々重要になっているのではないかと考えています。ネットワークの充実を考えたとき、支援ネットワークに幼稚園も入っている地区もあります。今後個別ケースを考えた場合、その子の誕生から小中からその先に関わるような福祉と教育と医療の関係者が集まるような、そんなふうになれば素晴らしいなあと思います。その子と関わる人をつなぐ、稚内市は「子育てファイル」を作っていますが、それをどう活用していくかも検討が急がれるものではないかと考えています。

次に子どもの貧困対策と子育て運動についてですが、2日前の日曜日に東小の体育館で、東部地区の子ども育成部主催のドッジボール大会がありました。東小と潮見小の子どもが100名以上、150名ぐらいが集まって大変賑わったんですけども、昼は育成部の方々が豚汁を作ってくれて、子ども会ごとに車座になって美味しそうに食べていました。その中に、昨年、一時期不登校になった子どもも居て、お母さんが作ってくれたおにぎりと一緒に笑顔で食べている姿がありました。こうした行事に子どもの笑顔につながっていることがありますし、スクールガードさんの日々の声かけが子どもが高まっている力になっているのではないかと考えています。子どもの貧困対策が、地域づくりであるということです。地域づくりでありますと、改めて子育て連協の出番であるのではないかと考えています。各地区の子育て連協が子どもの貧困対策に関わるのが、今後方針の中に盛

り込むことが、子どもを包むことを地域の中で広げることになる、地域住民が参加できるような子どもの現状を知るような場を開いてみるなど、子育ての関係者だけではなく、福祉や医療の関係者と語り合いを持つなど、一つでも実現できればと思っています。子育て連協の事務局は、学校が担っていますので、校長会、教頭会とも連携して考えたいと思います。

加藤良平コーディネーター

ありがとうございます。続きまして、若林校長先生、お願いします。

若林利行（北海道稚内高校校長）

座ったままで失礼します。日頃、市民の皆様には大変お世話になっております。お陰様で、稚内高校全日制ですけれども、就職内定率が100%ということになりました。進学や公務員、民間まで就職がありますが、現在内定率100%ということになっています。

さて、子どもの貧困対策を稚内高校で何ができるかと、どう機能するかということです。高校に行きますと個別の状況はだいぶ薄まっているということが適切かどうかはわかりませんが、そういう状況にはなっています。連鎖を断ち切るのは、やはり教育だと思っていますので、そのことに本校はどのように機能しているのか、ということの説明したいと思います。一つめは学校改善の動機と学校課題、二つ目は課題への対策、三つ目ですけれども全日制として単位制導入の検討を活用した学校改善、四つ目、定時制は学びのセーフティーネットとして位置づけているということです。最後にまとめということでお話をさせていただきます。

まず、学校改善の動機と学校課題ですが、私が昨年の4月に着任しましたが、その時にいわゆる全日制ですが、間口減になりました。4から3になりました。それと課題の掘り起こしというのをやっていますが、教職員や学校評議員会、市教委、PTAの方々

から聞き取りました。一番ショッキングだったのは、稚内高校はどう見ても悪いということです。大学進学率が鍵になるということです。入試倍率が1倍を切っているところから、学科内の生徒の学力格差が大きくなってきました。そうすると授業をどうするかというのが大きな問題になりますが、定時制は多様な生徒の入学がありました。勤労少年だけではありません。校長としての独自調査もしました。教職員が若いですが、4分の1が新採用4年未満で、後は期限付きということで、平均年齢も下がっています。それと、稚内市内の高校ですが、過去に受験選がありました。このようなことが、動機と課題でありました。

課題への対策ですが、情報を集めようということで、市教委、中学校、山下校長先生の大谷高校さんへ足を運んだり、校長先生方とも交流をしました。軌を一にして、市内の中で子どもの貧困対策会議や学力向上対策会議、幼保、小、中、高、大の連携会議等が始まったことでもあります。そこでの情報収集も大きかったと思います。それと本校として、普通科、商業科として単位制導入の検討を開始しました。これは、学力格差のある生徒のニーズに応えたいというものでもあります。校内では研修会を増やして、道教委や文科省のステージも受けていました。国立教育政策研究所の教育課程指定も受けていますし、北海道道徳教育研究指定、ITC研究指定等々も受けています。道教委のアルバータ州の交換留学生というのもやっています。ハイレベル学習セミナーもやっています。そんなことで課題の対策を進めています。大きいのは後、人事です。それと生徒指導、教育相談に重点をおいています。これらを課題の対策として考えています。

次に、全日制として単位制の導入の検討を進めています。学校改善ということで、やはり稚内高校は、大方の市民、関係者の方々に聞きますと、普通科への期待が大きい。何かと聞いたら大学進学です。そこで

単位制として、稚内高校から第一志望の大学へ入れるということを目指そうということです。これは少人数指導で選抜制の高い難関大学を目指すということです。もう一つは、申請デザインの確立ということです。単位制というのは、科目を選択するときにかなり時間をかけます。この時に今自分が持っている力を考えて、自分の人生をどう設計するか、デザインするかを第一に考えて、どんな生き方をしたい、どんな大人になるか、どんな家庭をもちたいのか、どんな職業に就いたらいいのか、それぞれのライフステージで、どんな生活が考えられるか。どんな大学へ行って、どんなゼミまで絞り込んで、いま何をしなければならぬのか、どの科目を取らなければならないのか、というふうを考えていくということです。それと就職に対応した教育課程も用意していく。公務員、民間企業など。もう一つは、地域愛を身につけさせる学校設定科目を用意したいなあと考えています。

定時制ですけれども、私は、学びのセーフティーネットとしての位置づけがあると思っています。3つ機能として考えています。一つは学び直しによる基礎・基本の学力定着対策、二つ目は 経済的な要因による学習障害要因への対策、三つ目として学習機会の復興対策です。私の視点であります。

最後になりますがまとめでございませう。稚内高校として取り組む、子どもの貧困対策を考えました。一つは、喫緊の問題を抱えた生徒への対応です。二つめは教育で貧困の連鎖を食い止めたいということで、人間形成として教育課程と生徒指導に重点を置く。地域に開かれた教育課程ということで、できれば地域の方々にも入っていただいて、議論と公開を進めたい。最後になりますが稚内高校の学びが 地域を作り出す好循環を生み出す仕組みを作りたい。稚内がいつでもベースになって、そこから世界を見ていく一歩ができればいいなあと考えています。以上でございませう。

加藤良平（コーディネーター）

ありがとうございます。続いて山下校長先生お願いします。

山下優（稚内大谷高等学校校長）

こんばんは。稚内大谷の山下でございます。風邪をひいて聞き苦しいと思いますが。

さて、私からは私学の独自性を保ちながら、教育の意味を落とさないというテーマについてお話したいと思います。そして貧困のキーワードは、ひとつです。命の尊さを問うということ人間教育です。二つ目に街づくりというテーマがどのような街づくりに参加を出来るかということです。そのことを背景に私のお話を進めたいと思います。

稚内大谷は、昭和 38 年に稚内市民の要望と稚内市の要請でできた学校であります。そういうことから、使命は、一つ、稚内市民立的学園であるということ、二つ目は真宗大谷派、真言立の学園であるということです。すなわち、人が人間になり、人間であり続けることの下支えが教育である。人が人間になるためには、教育が必要である。その学舎として稚内大谷が必要である。稚内市民立的学園というお話をしましたが、私学の独自性ということから、そのことにふれたいと思います。稚内市民立的学園ということですが、平成 25 年に 50 年記念式典を開くことができました。その時に再認識したのですが、多くの方々の支えがあってここにたどり着いたということです。稚内市民、企業、OB の方々の支えに感謝をして、地域の関わりを教育の中に、どのように地域連携として根付かせるかというのを学園として決断をするという取り組みがありました。地域産業連携として、グローバルコース、総合クラスの中に教育課程、商業には簿記会計、財務会計、ビジネス基礎、家庭科には、生活介護基礎技術、これはホームヘルパーです。情報科には、文書、ワード、エクセルの資格取得をできるように、明年度の入学生のカリキュラムに工業科と

して、教科は電気工事基礎技術、土木施工基礎技術、こういう学校設定選択教科を導入する予定であります。これは正に地域連携につながる街づくりにつながる稚内大谷の連携参画かなあと考えています。

このように稚内大谷は私学ですから、何をするのも判断、行動力はスピード感があります。今回の子どもの貧困対策の本校の取り組みの一つとして、就学支援の設定、これは国の助成に加えて学園のほうで貧困家庭、低所得者への入学金の免除制度を導入しています。さらには、稚内の地には、公立高校と私学の 1:1 の配置の構図になっていますので、道立高校の授業料免除は私どもにはストレスを抱えることでありますので、授業料免除は影響力のあることでありますので、給付型奨学金制度を北海道の私学に先んじて導入したところです。保護者の所得収入の格差によって、公立、私学を選ぶのではなく、選ばざるを得ないということではなく、教育活動を比較して選ぶということに今はなっていると考えています。お陰様で、稚内大谷、この 3 カ年は充足率 100%を超える状況になっているのは、この結果によるところがあるのではないかと考えています。このように分析をしているところであります。

結びになりますが、私立である稚内大谷と稚内高校で特色ある教育を行い、稚内の街づくりに高校が組織力を持って積極的に参画をするという考えを持っています。ひとつは、企業連携をしっかりとていき、稚内の一次産業で豊かで安心出来る原材料に付加価値を付けるという研究者の養成です。二つ目は、医師不足の現状に踏まえ、両校で長期的に希望をつなぐという意味で、本校から医師を輩出していきたいと考えています。その計画も教職員と協働して検討しており、新しい稚内大谷高校をつくるべく研究をしているところです。このことは稚内高校、若林校長先生と連携を取りながら、教育の地産地消を目指していく必要があるのかなと考えています。私学、稚内大谷の教育は一人一人を大切にすることであり、貧困

の連鎖を食い止めるにことに通ずると考えているところではあります。以上です。

加藤良平（コーディネーター）

ありがとうございます。続いて、斉藤学長をお願いします。

斉藤吉広（稚内北星学園大学学長）

私からは子どもと大人の狭間にいる大学生の状況について少しお話をしたいと思います。子どもの貧困というよりも、今の若者の貧困という枠組みを広げてお話をさせていただきます。高校生ぐらいまでが子どもだとすると、大学の進学に対するハードルですけれども、ある調査ではお金の面から進学を止めたほうが良いという高校生が3人に1人いるという結果が出ています。本当は大学に行きたいけれども、親から言われてあきらめるとい声珍しくなっていくことです。今、大学に行けないのは学力よりも学費であるという実態になっています。実際に子どもを大学に送り出した親は、費用が家計を圧迫しているというのが80%に達しています。親の仕送りは減少傾向です。ある調査によると、仕送り額から家賃を引いた生活費は、25年前、1日あたり2500円だったものが、昨年は850円まで減少したそうです。当然、諸経費、携帯費、水光熱費、交通費、弁当代を含めて、1日850円です。だから、仕送りだけでは足りないということです。足りない分は、奨学金や働いて賄うということになります。学生支援機構、これは旧日本育英会ですが、その奨学金が今、大学生で2人に1人が利用しています。さらにアルバイトは、遊ぶ金というのではなく生活費という、まさに生活をするために必要になっているということです。今の標準的な大学生の姿です。本学でも、仕送り0円で、学費、生活費まで全部をアルバイト、奨学金で賄っている自宅通学以外の学生もいます。こういう意味で稚内市が本学入学生に稚内市の出資金の月25000円

を支給しているのは非常に大きいと思っていますので、感謝しています。

大学を出て、その後どうなるかという全国平均ですけれども、大学卒業後男女とも、2割程度は非正規の仕事に付かなければならないというのが実態です。高校卒業で、女子で5割、男子で3割が非正規雇用ということからみれば恵まれています。正雇用になれたとしても、ブラック企業という場合もあって、借りていた奨学金の返済が滞って自己破産に追い込まれたケースが、累計で1万件を超えたそうです。この問題を特集したNHKの番組で、一つ出ていた例は母子家庭で生活が苦しいので、高校、大学で奨学金を利用した、大学卒業して就職したのは非正規の保育士で月14万円、合計600万円借りた奨学金を返済する余裕がなく自己破産したというというのが紹介されていました。平均ですが、有料奨学金を利用した場合、350万円の借金を卒業同時に負うという状況になっています。世界では当たり前の給付型奨学金の導入が国レベルでやっと検討されているのを今後注目したいと思っています。

ちょっと話は変わりますが、広井良典という方がおりますが、教育自体を社会保障として捉えようということを行っています。どういうことかと言うと、かつて社会保障というと高齢者の生活保障ということが中心に据えられていました。それが人生おける様々なリスクが高齢期に集中していたからです。今、終身雇用の会社が無くなってきて、働く人の4割が非正規という状況で、年収200万円を切る人が、1000万人を超えるという中で、会社に頼ることが簡単では無くなるし、家族も安定的なものでなくなっているという状況です。かつては見えない社会保障というシステムが崩れてきている中で、人生のリスクが前半や中半にも広く及ぶようになってきている。だから、この方は、人生前半の社会保障という問題が浮上してきたと言っています。人生前半というと、広域サービス、児童手当関係の社会給付は、日本の場合、

格段に低い。教育分野での公的支出は圧倒的に低く、OECDの32カ国の中で、スロバキアと並ぶ最低の状況です。経済的な状況、生活状況にかかわらず子どもたちの学習権を保障するという意味でも、将来起こりうるリスクに対応する力を付けるという意味でも、公的教育を人生の社会保障の一貫として位置づけることが必要ではないか考えます。本学で何が出来るかということですが、取り組みとして一つは、述べてきたような社会情勢について特にこの地域に関わる問題について研究的に取り組んで、何かのメッセージを発していくことが必要ではないかと思っています。この教育連携会議の中では、潮見が丘地区、東地区のチームに本学の教員が関わって実態把握や対策協議に加わっています。実践的には、先ほどのビデオで無料塾というのが出ていましたが、COC事業・地(知)の拠点事業で、まちラボで行っている教育支援が、子どもたちの学習機会を保障する一助になるかと思っています。結構成果が上がってきていると思います。また、それから、まちラボを利用して、大学、学生が地域活動をする中で孤立している子どもたちに居場所を提供する機会になり、彼らを新しいつながりに巻き込むということにも期待しています。子どもにとって重要なことは尊重される経験ですが、若者も十分にその経験を持っているかというところではないかと思っています。学生には必要だと思っています。支援することで、自分も役に立っているという自己肯定感を得ることも重要だと思っています。この地域で何が出来るか、貧困対策で教育連携会議が作られて、今日のような機会があると思いますが、幼保・小・中・高・大が連携し、街づくりに関わっていきたいと思っています。以上です。

加藤良平（コーディネーター）

ありがとうございました。教育長お願いします。

表純一（稚内市教育委員会教育長）

教育長として、この貧困問題に取り組んできたことをお話したいと思います。私のことですが、4年前に教育長に就任して2期目に入りました。その前、36年ほど市の職員として行政マンとして仕事をしてきました。その経験から貧困問題も考えてみたいと思います。今日、松本先生の話聞いて考えさせられました。36年のうち、3分の1くらいは教育委員会で仕事をしていました。稚内市の教育委員会には、子ども課というのがあります。この課は全国のレベルでも稚内にしかないと思います。幼児教育の支援、就学前支援、保育所とか児童館、児童手当などを扱っています。この課の立ち上げに携わり、12年ほど前に最初の課長としてその職に就いたのです。この時は児童福祉の問題ということで、困難家庭の対応をしましたが、その厳しさを目の当たりにしました。この中で、子どもを中心に子どもをどのように支援していくかということに関係者が集まってケース検討会議をするんですが、そこで問題になるのが家庭、親なんです。その親を支援しようということになると、親の問題だけではなく、子どものお祖父ちゃんお祖母ちゃんの課題でできます。そんなことを経験してきて、そのことは負の連鎖であり、子どもの貧困の連鎖なんだと感じました。その連鎖を断ち切るためにはどうするかというと、子どもが経済的に自立することしかないんだろうと思います。そのためには、定職に就くことだと思います。定職に就くためには高校だけは出て欲しいと思います。できれば大学まで行って欲しい。そのことが可能になれば、少しは前進するだろうと思っています。そのためにこの子どもの貧困の問題に取り組んできています。決して、十分だとは思っていませんし、子どもの貧困の問題は教育や福祉の問題であるし、経済問題だし、雇用、労働問題であるし、社会問題であるし、教育や福祉だけでは十分でないという意見もあります。それらの問題に、この最北端の稚内の自治体が切り込んでい

くのは、困難なことではあると思います。しかし、自治体として手をこまねているのではなく、何か一歩でも前に出るということで、教育を切り口にして、福祉や保健と連携して子どもたちを支援していこうということで、子どもの貧困問題に取り組んでいます。

先程来、校長先生からこの街の子どもたちをしっかりと育てようという心強いメッセージをいただきました。この街では、こども課は幼稚園、義務教育は学校教育、高校が少し遠かったんですが、連携体制で中高の接続がしっかりし、また、大学が地域との連携を進めています。私は、教育連携の中で、子どもの貧困対策を大きく前進させることを可能にしたいと思います。先ほどの校長先生の話からすると、単純なことではないですが、ここに参加してくれた皆さんと一緒に少しでも前に進むようにしていきたいと思っています。大変良い勉強の機会になるなあと改めて思っています。これからもよろしくお願いします。以上です。

加藤良平（コーディネーター）

ありがとうございました。今、お話をしていただいた5人の方は、稚内市教育連携会議の代表委員です。幼保・小・中・高・大の連携というのは、全国にも例がないんです。この幼保・小・中・高・大の連携会議で子どもの貧困の連鎖を断ち切ろうというのも例がないんです。全国に先駆けて創造する分野です。このテーマを5人の方々をお願いしたら、エツという顔をされたんです。今、話されたように、それが今後つながって行って、稚内の具体的な施策になっていけば良いなあと期待していきたいと思います。

現在、主任児童委員の藤本さんやわかホームという組織の藤谷さんが中心になって子ども食堂がもう少して実現しそうなところまでできています。それから、鎌田校長先生もおっしゃっていましたが、各中学校区で子ども支援ネットワークが機能しています。ここには、今までは学校や民生委員の方々を中心だ

ったのですが、さらに幼稚園・保育所や高校が加わっています。幼稚園・保育所や高校が加わると、今まで小中の話だけだったのが、本当に地域の中で幼稚園・保育所から大学まで、兄弟の話も含めてみんなが見ながら動けるようになってきています。私たちはそんな取り組みも現在進行形でやっています。教育連携会議も含めて、5人の先生方からの話を受けて、松本先生からのお話を最後に伺いたいと思います。

松本伊智郎（北海道大学大学院教授）

話を伺って、本当に素晴らしいなあと思いました。私もどんな自治体に伺っても、幼稚園・保育所から大学までを全部を含めて連携会議を作っているのは初めて聞きました。子どもの貧困を考えるときに家族のことまで考えるのに連携会議を作るのは初めて聞きました。出来たことは素晴らしいだけでなく出来た土壤があることが素晴らしいと思います。土壤がなければ出来ないことです。土壤を作ってこられたことが素晴らしいなあと思いました。校長先生方が熱心である、きちんと考えていることが素晴らしい。私が北海道の大きな街で、校長先生と教頭先生の全員が集まった研修会を担当したことがあります。今日と同じ内容です。1日目が教頭先生で、次の日が校長先生でした。教頭先生は色々なことを考えておられてしっかり聞いてくれるのですが、校長先生はかなりまちまちなんです。10年ぐらいになりますが、トラウマになっています。校長先生がきちんと姿勢を示されると、学校の外に向かってしっかりできるんですね。こういう取り組みが大切なんですね。私も勉強をさせていただきたいと思っています。

それぞれの先生の話はもっと聞きたいですが、時間もありませんので感想をめいたことを。一つは、学力の問題ですね。進学の問題ですが、これは学校として本丸でしょう。それを仕事とつなぐことが、学校として大事だということですね。そのことを前提にしてなんですけど、教育の場で培っていただきたいこ

とは、人とつながる力、相談する力、相談し合う力と
いうことでしょうか、貧困や虐待が深刻になってく
ると、孤立していくんです。そのことが問題を見えに
くくしていくんです。相談し合える力、相談する力が
日常の経験の中でどんなふうに培っていけるかが気
になります。社会福祉の側からすると、大人同士が相
談し合える文化がない、そういうところで相談する
ということができないと思うんです。中学校区の
ネットワークも素晴らしい試みだと思います。これ
も大人同士も相談し合える文化を作っていこう試み
だと思います。それが子どもに伝わると、子どもが大
人になったとき相談できるというように、最悪にな
ることは防げると思うんです。つながる力、まわりに
相談する力が大事だろうと思いますし、その土壌が
あるんだろうと思います。

もう一つは、学力の問題、進学の問題は本丸ですけ
ど、子どもの貧困対策で言うと、教育長さんが言っ
ていましたが、高校はきちんと出して、仕事をするとい
うことの力をつける。ありがちなのは障害を持って
いる子どもの支援の問題です。特別支援教育のなか
でご苦労を抱えている方々がいます。抜けがちにな
るのは、支援ではたくさんの蓄積がありますけど、障
害を持っている子どもに対しての支援、つながって
いくということは最も大きい問題だと思うんです。
もう一つは、昨年も申し上げましたが、子どもの貧困
問題では命の問題を考えることです。学校に保健師
さんに来てもらって、保健師さんがいるということ
を伝えること、つながれることが大事だとつくづく
思いました。

最後に、教育長さんがおっしゃっていましたが、教
育委員会のなかにこども課があるということはとても
珍しいことです。貧困でも虐待でも子ども関係で
は、教育委員会でつなげていくということが大事で
す。子どものサービスでつながることが大事ですが、
大人の支援ということが切れてしまうことが問題で、
そのことをつなぐことが大事だということです。具

体的に言うと、生活保護、精神保健、医療も含めて、
支援が必要な方が子どもを持たれていること、どの
ような支援をするかということが大事な部分になるの
ではないかと思います。教育と福祉が一緒になって
いるというのが大きくて、大体の自治体は教育と福
祉はつながりがなくて、ここのつながりが工夫され
ていることは力強く感じました。感想を述べてさせ
ていただきました。私も大変勉強になりました。あり
がとうございました。

加藤良平（コーディネーター）

ありがとうございました。時間があれば、会場の皆
さんに意見や感想を聞きたいと思ったんですが、予
定していた時間が過ぎてしまいましたので、割愛さ
せていただきます。最後に謝辞を申し上げます。

井上幹雄（稚内市教育委員会教育委員）

今、加藤先生から紹介がありました稚内市教育委
員会の井上です。今年度の子どもの貧困シンポジウ
ム・講演会の閉会に当たりましてお礼のご挨拶を申
し上げます。このようにたくさんの参加をいただい
たことに皆様にお礼を申し上げます。本日の出席者
は 211 名でございます。大変ありがたいことです。
いくら素晴らしいお話をお聞きしても、どんなご意
見を申し上げても、聞いてくれる人、それを聞いた人
が考えて、思ったことを実践してくれる、そういう人
がいなければ、なんの意味もありません。そういう意
味から考えても、今日たくさんの方々にお集まりい
ただいたことに対して皆様方にお礼を申し上げたい
と思います。本当にありがとうございます。

松本先生には、昨年度に続いてご講演をいただき、
ありがとうございます。昨年の講演と資料を見させ
ていただきました。そのときに実際の関係者、学校の
関係者、学習支援をしている学生ボランティアの
方々、メディア関係、市民の方々に素晴らしい提案を
していただきました。その中で、市民には貧困問題に

関心を持ち続けていただくことをおっしゃっていただきました。今日のシンポジウムでシンポジストの方々にご意見をいただきました。お礼を申し上げます。ありがとうございました。聞いて、考えて、実践をするということが大事なことだと思います。特定の人ではなくて、みんなが、私にはこんなことが出来る、私にもこんなことをやってみようかなという、そんなことを感じさせるような今日のこの会ではなかったのかなと思います。そんなことをみんなで確認する会ではなかったのかと思います。皆さんが話していましたが、貧困問題はすぐに解決できることではありません。どうかみんなで関心を持ち続けていきたいと思います。そして、行政の施策の支えにしたいと思います。そんなことをみんなで確認し合える会、シンポジウムだったと思います。本日はありがとうございます。

子どもの貧困と地域、社会

松本伊智朗

北海道大学教育学研究院

昨年お話ししたこと

- 1 まちづくりの問題として子どもの貧困を考える
稚内の取組みに対する強い印象
- 2 貧困の概念、言葉の意味
- 3 貧困率と政策の再分配効果の低さ
- 4 子育てが家族に集中する構造

昨年の話 貧困の概念、意味

相対的貧困という概念

貧困 — 様々な定義が可能

「本当の貧困さがし」のワナ

「必要」からの不足が定義の核

「必要」を生理的側面で把握

⇒ 絶対的貧困

「必要」を社会的・文化的側面で把握

⇒ 相対的貧困

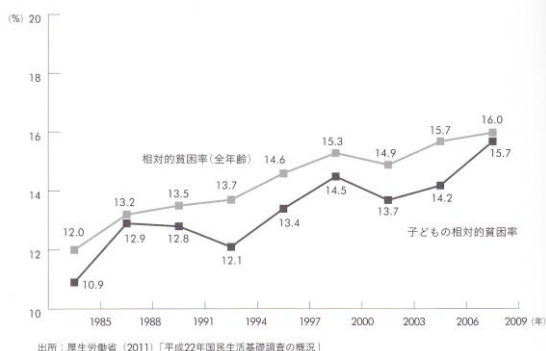
人間の生活は常に「社会生活」

昨年の話 貧困率の動向と政策効果

- 1 貧困率・子どもの貧困率は上昇傾向
- 2 国際的にみて貧困率は高い
- 3 貧困ギャップが深い(貧困の程度が深い)
- 4 母子世帯に高い
- 5 子どもの貧困に対する政策介入効果が低い

① 公的な貧困率の発表

図1 ● 厚生省の発表による相対的貧困率の推移



⑤ 政府の再分配による貧困率の削減効果

表1 ● 年齢階層別、再分配前、再分配後の貧困率

	2010			2007		
	再分配前 (2010)	再分配後 (2010)	削減 (%)	再分配前 (2007)	再分配後 (2007)	削減 (%)
65歳以上 (女)	64.43%	22.79%	41.64%	61.21%	24.46%	36.75%
65歳以上 (男)	63.83%	15.07%	48.76%	61.65%	17.99%	43.66%
20-64歳 (女)	21.21%	14.56%	6.64%	19.68%	14.03%	5.65%
20-64歳 (男)	17.65%	13.72%	3.94%	15.82%	12.45%	3.37%
20歳未満 (女)	16.29%	15.81%	0.48%	14.78%	15.32%	-0.53%
20歳未満 (男)	18.19%	16.74%	1.45%	12.92%	13.70%	-0.77%

出所：内閣府男女共同参画会議 (2011)

昨年のお話 家族と子育て

1) 子どもの貧困と家族

市場化

生活手段の商品化（金がかかる社会）

孤立化

家族を取り巻く親族網の縮小と地域移動

「子育ての変容」

競争社会と子育ての「目標」

家族依存 子どもは親次第

⇒ 家族の格差が子どもの状態に直結する

今年の構成

1 政策の動向

2 不利・困難の複合的性格

例証1 自立援助ホーム利用者の不利の構造

例証2 家族における重なり合う不利・困難

3 子どもの視点で見るとということ

4 貧困という経験の理解

5 支援のために

子どもの貧困に対する社会的関心と政策課題化

子供の貧困対策推進に関する法律 2013年6月

子供の貧困対策に関する大綱 2014年8月
一方で生活保護基準の削減

自治体での調査と計画

2015年 北海道

2017年 札幌市

2016年 北海道と札幌市における調査

児童福祉法の改正 2016年5月

子どもの権利(児童の権利)の明文化

自治体の役割、機能の強化
専門職配置と連携の強化

母子保健の役割

等々

不利・困難の複合的性格 例証1 自立援助ホーム利用者の不利の構造

文献②③⑦⑧⑪⑫⑲

自立援助ホーム

家族からの養育・支援が受けにくい10代後半の子どもを支援する場所。社会的養護の一形態。

定員6名前後のグループホーム形式。

児童福祉法に法的根拠。

最も不利を負う子ども・若者の集団

使用する調査

(いずれも報告者が調査設計・集計分析)

〈2005年調査〉

村井美紀(東京国際大学)を主任研究者とする研究班が、全国自立援助ホーム協議会の協力の下に厚生労働科学研究費助成により行った、2005年1月～12月に全国の自立援助ホームを利用した子ども・青年の悉皆調査。

〈2008年調査〉

全国自立援助ホーム協議会が朝日新聞厚生文化事業団の助成で行った、2008年1月～12月に全国の自立援助ホームを利用した子ども・青年の悉皆調査。

利用者の概況(08年調査)

児童養護施設での生活経験 45.8%

教育歴 中卒40.7% 高校中退32.8%

入居時に仕事に就いていたもの 20.9%

退居時に仕事に就いていたもの 53.2%

正規雇用 20.6%

退居時に手持ち金がなかったもの 44.2%

本人が入居前に経験・直面したこと (M.A)

	(N=310)		(N=369)	
	05年度調査		08年度調査	
非行・犯罪の被害	62	(20.0)	61	(16.5)
いじめの被害	61	(19.7)	80	(21.6)
養育者からの虐待	146	(47.1)	211	(57.1)
返済に困る借金	24	(7.7)	12	(3.2)
解雇	19	(6.1)	23	(6.2)
仕事や学校など通う場所(所属先)がなかったこと	51	(16.5)	72	(19.5)
住む所が決まっていなかった	83	(26.8)	81	(21.9)
親や保護者の死亡	42	(13.5)	41	(11.1)
親や保護者の行方不明・連絡がつかなくなったこと	58	(18.7)	51	(13.9)
ひとり、あるいは子どもだけで生活していたこと	24	(7.7)	31	(8.4)
行くところがなくて駅や路上・車中などで寝泊りをしたこと	34	(11.0)	33	(8.9)
学校の長期欠席・不登校	81	(26.1)	85	(23.0)
停学・退学	56	(18.1)	99	(26.8)
複数箇所の施設・里親等での生活体験(措置変更・解除等による)	62	(20.0)	69	(18.7)

不利と困難の3側面

I 被害(05/61.9% 08/70.4%)

- ・ 非行・犯罪の被害
- ・ いじめの被害
- ・ 養育者からの虐待

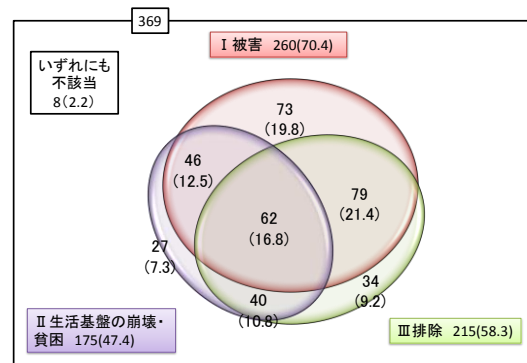
II 生活基盤の崩壊・貧困(05/55.2 08/47.4)

- ・ 返済に困る借金
- ・ 住むところが決まっていなかったこと
- ・ 親や保護者の死亡
- ・ 親や保護者の行方不明・連絡がつかなくなったこと
- ・ ひとり、あるいは子どもだけで生活していたこと
- ・ 行くところがなくて駅や路上・車中などで寝泊りをしたこと

III 排除(05/55.2 08/58.3)

- ・ 仕事や学校など通う場所(所属先)がなかったこと
- ・ 学校の長期欠席・不登校
- ・ 停学・退学

図11 2008年度調査 男女 利用者の困難



つまり

もともと不利を負う子ども・若者の困難
同世代の一般的な子どもの経験との比較

被害・貧困・排除の三側面の重なり
性格と対応の方法が異なる不利・問題の複合
(この点は例証1も同様)

安心・反貧困・包摂を
軸とする対応の組み合わせ・関係の検討
ソーシャルワークの機能

2 例証2

家族における重なり合う不利・困難

厚生労働科学研究

「子ども虐待問題と被虐待児童の自立過程における複合的困難の構造と社会的支援のあり方に関する実証的研究(主任研究者松本伊智朗)」

分析対象

2003度に北海道内すべての児童相談所(9か所)において虐待相談として受理したもののうち、当該児童の受理時の年齢が5歳(49例)、10歳(28例)、14歳、15歳(42例)のもの119例すべて

(身体的虐待46 ネグレクト55 心理的虐待10 性的虐待8)
文献⑧⑨⑩⑪

生活基盤・貧困

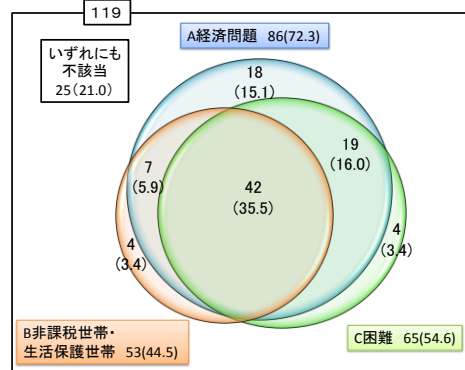
問題の基底としての貧困・生活基盤の脆弱性

A借金・多重債務、破産、経済的困窮などの
「経済問題」を経験 86例(72.3%)

B生活保護受給世帯 47例(39.5% 不明除66.2%)
非課税世帯 6例(5.0% 不明除8.5%)

C調査員の判断による生活程度
困難 65例(54.6%)

図1 生活基盤の指標の重なり
A経済問題/B非課税世帯・生活保護世帯/C困難



生活基盤・貧困(ネグレクト・参考)

ネグレクトと貧困・生活基盤の脆弱性

経済問題

身体的虐待 26例(56.5%)
ネグレクト 48例(87.3%)

ネグレクトのみに集中しているというわけではなく、全般的に生活基盤が脆弱であることに加えて、特にネグレクトに高いことに注意

社会的孤立

支援的な親族・知人が確認できたのは

60例(50.4%)

残りの59例(49.6%)は社会的な孤立度が高いと考えられる(「社会的孤立群」)

子ども・家族の諸困難 (子ども)

子どものことばの遅れや知的障害・身体障害等
当該児童 56例(47.1%)
兄弟姉妹 41例(34.5%)
うち26例は当該児童と兄弟姉妹の双方

多くの子どもが、学校における困難に直面
当該児童の42例(35.3%)
兄弟姉妹の40例(33.6%)に不登校

子ども・家族の諸困難 (家族)

養育者のいずれかにメンタルヘルス上の問題
(抑うつが中心)
47例(39.5%)

養育者の知的障害 24例(20.2%)

夫婦間の暴力、あるいは疑い 31例(26.1%)

図2 不利と困難の複合(子どもの障害)
A子どもの障害(どちらか)/B経済問題/C社会的孤立

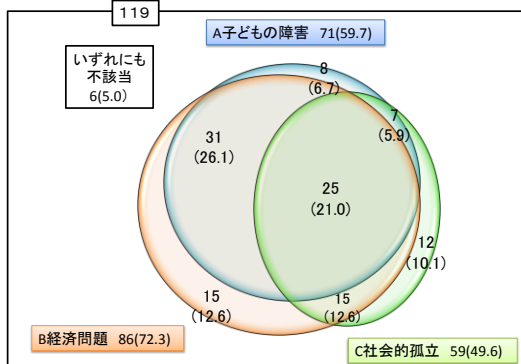


図3 不利と困難の複合(親のメンタルヘルスの問題)
A親のメンタルヘルスの問題*/B経済問題/C社会的孤立

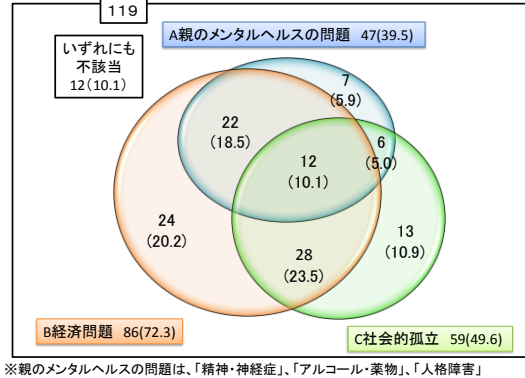


図4 不利と困難の複合(親の知的障害)
A親の知的障害/B経済問題/C社会的孤立

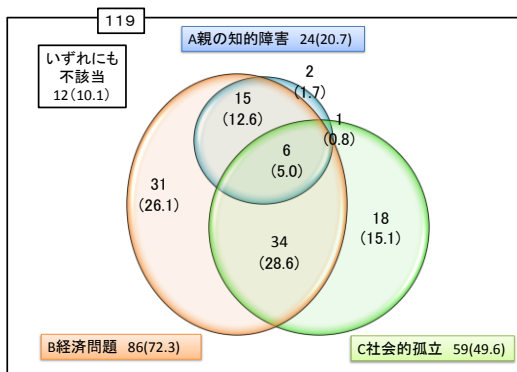


図5 不利と困難の複合(DV)
A DV(疑いを含む)/B経済問題/C社会的孤立

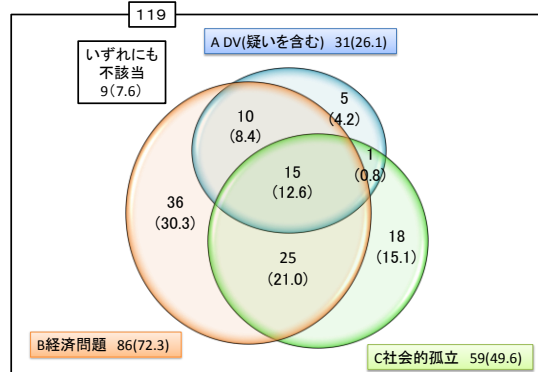


図6 不利と困難の複合(障害/DV)
A子どもの障害(どちらか)/B親の障害*/C DV(疑いを含む)

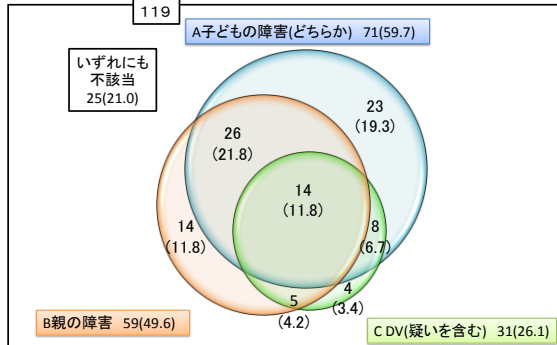
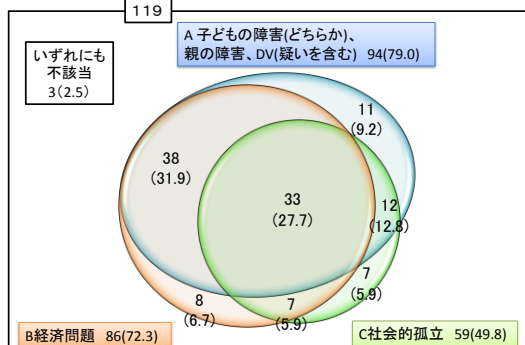


図7 不利と困難の複合(総合)
A子どもの障害(どちらか)、親の障害*/DV(疑いを含む)/B経済問題/C社会的孤立



つまり

子ども虐待問題の基底には貧困と社会的孤立
貧困の「生活の困難・問題」としての現象は
複合的な困難・重なり合う不利という形態
反貧困政策・実践は多様な対策の組み合わせ
個別の家族支援と介入は
反貧困政策を前提として有効

3 子どもの視点

「子ども」という時期

無条件で世話をされる体験

自分と「世界」に対する肯定的感覚

子ども期・子どもの原風景

生きることをめぐる最初のイメージ

わくわくするような体験
人生に対する肯定的な体験
「自分の人生は自分でつくってもよい」という
能動的な感覚

「子ども期」の形成と成長・発達
基盤としての 安心・関係・応答・参加・機会

寄り道 子ども虐待

1) 子ども虐待防止活動の「目標」
(ケンブ/小林)

- ①子どもを死なせないこと
- ②子どもを虐待しない大人に育てること
⇒ ②b子どもがきちんと大人になれること
/子ども期の回復と創造(松本)

2) 発生しやすい条件と対応戦略
(ケンブ/小林 松本補足)

- ①社会的孤立
⇒ 支援者をつくる・つなぐ
- ②生活のストレス・生活困難・家族の中の葛藤
⇒ 生活の安定を図る・支える
- ③意にそわない子ども(子どもの育てにくさ)
⇒ 子どもの支援する・育てる
- ④愛された体験のない子ども時代
⇒ 子ども期の回復・ケア

3) 「援助の必要な子ども・家族」というとらえ方

- ・ イギリスが後手にまわしてきたこと
- ・ 「虐待かどうか」の判断がもつ有効性と限界
- ・ 家族・状況は変化する／情報は常に断片的
／判断は常に間違いの可能性をもつ
- ・ 虐待を受けた子ども → 援助を必要としている子ども(Children in need)
- ・ 介入と保護、支援の関係／支援のない介入はありうるか

子どもの貧困への注目

「貧困」を子どもの側から考えてみる

子どもにとっての「社会的公正」とはなにか

もっとも「不利を負いやすい」

「声が奪われやすい」存在

子どもの貧困ということば

子どもの貧困という「特別な」/「新しい」貧困？

貧困の一側面として理解

/基本問題は貧困それ自体

貧困を子どもの側から理解する/子どもに焦点

貧困が子どもの不利・困難に転化する過程

反貧困政策・実践としての「子ども政策・実践」

貧困対策の歴史と「子ども」

貧困の社会的発見・再発見に関わって
「子ども」は常に中心的なテーマであったこと

- 1 産業革命期の工場立法と児童労働の規制
- 2 英・義務教育成立と就学問題・学校給食
- 3 1960年代の貧困の再発見と子ども政策
イギリス 家族手当/アメリカ ヘッドスタート
- 4 2000年代初頭の日本？

子どもの領域の平等と公共性

市場化の中での家族依存

家族の不利が子どもの不利に転化する構造

公共領域が家族に依存 社会的公正とは

能力主義と家族依存の矛盾

世代の再生産を家族のみで行う社会

→これだけだと必ず格差の拡大

何のための貧困の議論か

「傷口に塩を塗りこむ」議論

親の人生・子どもの笑顔

社会的公正・安定的な社会の持続

民主主義の基盤

自由と個人の尊厳に価値をみる社会での貧困

反貧困の広範な社会制度をもつ社会での貧困

何のための貧困の議論か

責任・努力・能力

自己決定による参加と退出の自由

平等な当初条件

では「人生」は？

「努力」の質や量は「正しく」評価しうるか？

格差の拡大 貧困を生みだしかつ貧困を隠す

競争の激化 社会の分断

人間の特質 共感と想像力

生存の前提 共同とケア関係

4 貧困という経験の理解

- 1) 経済的資源の制約・低所得と貧困
- 2) 不利の複合・蓄積としての貧困
- 3) 対応可能性・選択可能性の制約
- 4) 「参加」の欠如・社会的孤立
- 5) 人生の可能性の制約・「能力」の蓄積の不利
- 6) 時間の経過と人間
- 7) 「尊重されること」の欠落

4 貧困という経験の理解

- 7) 「尊重されること」の欠落

「劣ったもの」として扱われる感覚
相談先での嫌な経験、悔しい思い
自分の意思を聞かれない もてない
誇りが傷つけられること

5 支援のために

資源の再配分

つながりの創出と参加の確保

経験の蓄積と「能力」形成 「失敗する自由」

社会的公正と社会の統合・持続性

子どもの「公共圏」の再構築—親世代の格差を
子どもの領域に持ち込ませない

すべての政策に貧困の視点を

5 支援のために

支援された・尊重された経験のある人生

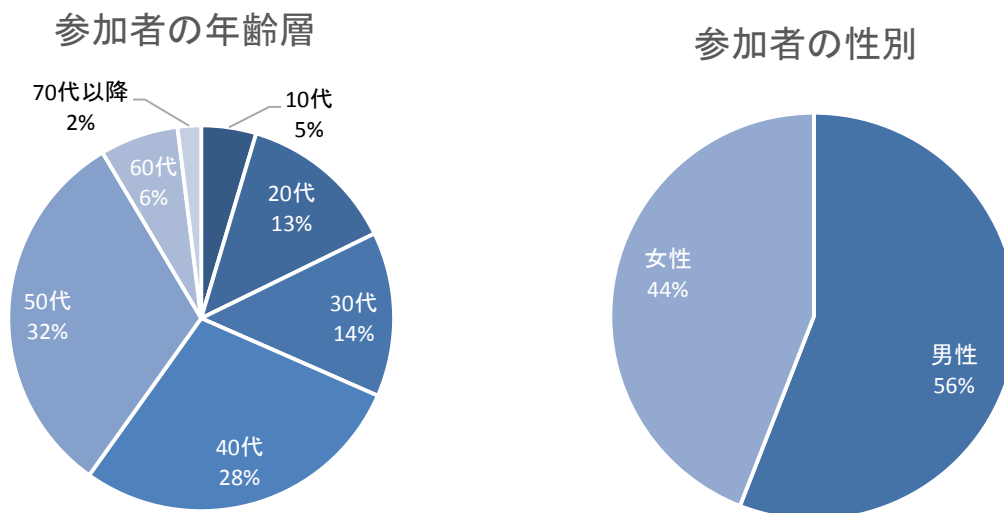
支援者の人生と共同・相互の尊重

人を支える実践の無いところに、
社会の変革はあるか？

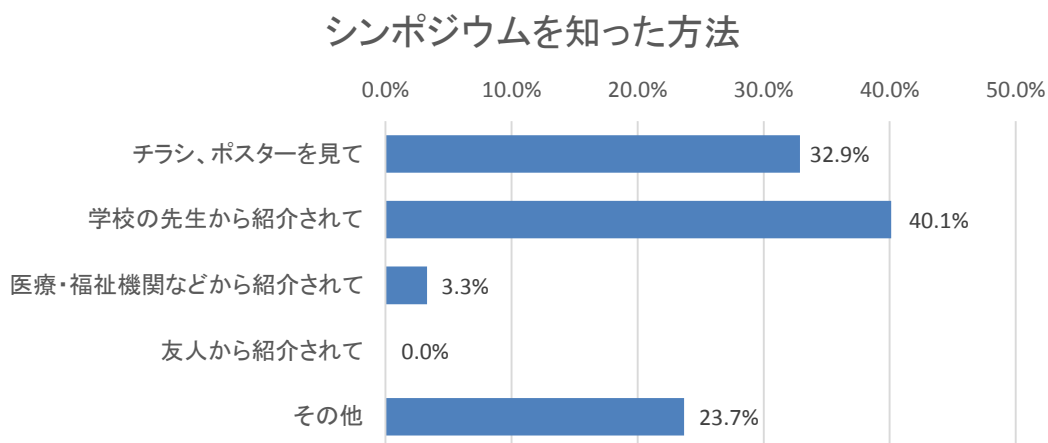
1 第2回稚内市子どもの貧困対策市民シンポジウム (4) 参加者アンケート集計

参加者 215 名
回答数 152 名 (回収率 70.7%)

(1) 年代、性別に○をつけてください。



(2) 本日の講演・シンポジウムをどこで知りましたか。



(3) 本日の講演・シンポジウムの内容について

① 松本先生の講演の感想や意見をお書きください。

- DVD が良かったです。個々の子どもはそれぞれ一人の人間で、パターン化された何かは無いという事を忘れがちだと、改めて感じました。
- DVD 等も見て、子どもが感じている気持ちを知る事が出来た。初めて、貧困対策の講演を聞きましたが、貧困・虐待の関係性も知る事が出来た。
- 貧困に対する意識が高まり、どういった対策が必要なのか考えさせられた。
- 経済的な問題、社会的孤立、子どもの障害や親のメンタルヘルス等、様々な要因が重なっていると聞いて、様々なところから解決にむけて考えなければいけないと思って、子どもの貧困の大変さを知り、改めて深刻な問題だと感じた。
- 貧困は子どもだけでなく、親の貧困と様々で、その対策について学びました。
- 貧困を子どもの側から見る・・・という言葉が心に残りました。子ども達は今の”自分自身”をどのように捉え、未来を描いているのか。どんな状況・環境であれ、たくさんの希望や夢を持って成長していけるように、今、私が教師として出来る事は何かを考え、一つずつ行動していきたいと思います。
- 「地域で」「みんなで」という事が貧困対策で大切な事を改めて感じました。どんな子どもも学校に来れば、楽しい、安心できるような学校づくりも、子どもの貧困を救うためになる事、教師にも出来る事はあるのだ！と思いました。「頑張らなければ」と思います。
- 子どもの視点からの VTR は、泣かされました。涙が止まりませんでした。大人達が複合的な視点を持って社会問題を考える事がとても大切と思いました。
- 昨年に引き続き受講いたしました。身近で貧困を抱えた子ども達を目の当たりにしながら、地域と連携し教育を進めています。そのためにも本日の講演で自分自身の立ち位置や理念を確認できました。
- DVD に胸が熱くなりました。現実には稚内にいる子どもと同じだと感じました。街づくり、街の施策をどうするかという視点と同時に、楽しい学校づくり、居場所のある学校づくりが学校の使命だと強く思います。
- 子どもの貧困は他人ごとじゃなく、周りの人の支援がとても大切だと思いました。DVD、感動しました。
- 子どもの貧困の本質を考える事が出来ました。
- シンポジウムの最後にお話された、障害のある子ども（あるいは家庭）への支援については、その現場で働く身としては痛切にその必要性を感じます。
- 貧困から社会的孤立や虐待につながる事、DVDを通して子どもが安心して暮らせる家庭や自分の意見や思いを言葉に出来る環境が如何に大切であるかを感じ学ぶ事が出来ました。
- 貧困と虐待は親の経済苦とつながりがある事がよくわかりました。
- それぞれの子どもの背景には様々なものがあります。一緒にどうしたらいいか考える事、大切ですね。こちらの価値観を押しつけてはいけないと改めて感じました。映像とても良かったです。お話は少し難しかったです。
- 自分自身が熱く子どもに語る事はあっても、一人ひとりの話を聞く事は、まだまだ足りていなかったと感じました。私が明日から出来る事は、子ども達が楽しい学級づくり、安心して過ごせる居場所づくり、だと改めて学びました。貧困に対する直接的な支援は出来なくても、やるべき事があるんだと示して頂きました。本当にありがとうございました。
- すごく良い内容で刺激を受けました。尊重する事は子どもも平等に認めて居場所づくりが大切である事を学びました。一人ひとりの対応のスキルも必要である。
- ”子どもの貧困対策は地域づくり”という言葉が印象に残りました。

- 涙、流しながら聞かせてもらいました。一人の大人として改めて心が強くなりました。一人も見捨てない。
- 貧困の連鎖を断つのは当然だが、心配してくれている人が多くいる事を実感する世代を越えた連鎖を作り上げる事が大事。
- 私は小学校の教員です。ビジュアルノベルがとても印象的でした。ああいった経験を目の前の子ども達がしないように子どもの声に耳を傾ける事、子ども達の様子を見取る事、を忘れずにいたいと思います。「学校に行ったら楽しい」という学校・学級を作っていきたいです。
- 子どもだけでなく親に対しても「どうしたいの？」がキーワードなのかな、と感じました。
- ひと口に貧困と言っても一人ひとり抱えている問題は違う、その事をイメージする・想像することが大切。貧困に種類はない事がわかった。DVD から考えさせられる事があった。もう少し字が大きいと良かった。
- 貧困は一つではない事。様々な環境が背景にある事。子どもの視点から解決策を見出さなければならぬ事を改めて気づかされた。ありがとうございます。
- 子どもの視点からの映像、胸が詰まる思いでした。子どもの声に耳を傾ける、困り感に寄り添う、そういう大人でありたいと思いました。
- 学校が楽しく、来たい、居場所になれる学校が貧困対策になる。私がずっと考えていた事が出てきたところが励みになりました。
- お金の話だけでなかった事に驚き。わかっていたはずなのに、どうしてもイコール経済的に考えてしまいがちなので、重なり合う困難の視点は、とても参考になりました。
- 稚内の子どもの貧困対策の何が他地域のそれと違って良いのか、もっと具体的に話してほしい。
- 格差の話をしていましたが、格差があるから這い上がる人もいるのでは？格差が無く平等の世界もつまらない、這い上がれる世の中にすべきでは？
- 松本先生の講演内容が教育連会議・貧困対策プロジェクト会議で有効な形で活かされる事を期待します。SSW や学校職員にだけ負担がかからないようにしてほしい。
- ビデオもあり、とても考えさせられる内容でした。
- 子どもの気持ちを聞く事は大事だと思いつつ、なかなか日々出来ていないなあと反省しました。
- とても心洗われる思いでビデオを観たり、松本先生のお話をうかがいました。子どもの心を知る、創造するなど子どもの気持ちに寄り添える地域の住民になりたいと思いました。
- 学校として出来る事はたくさんある、ということを感じさせてもらう講演でした。一人ひとり尊重する＝聴く＝一緒に考えるという大事な事を教えて頂きました。
- 貧困により子どもがどう考えているのかを考える手がかりとなりました。
- 「貧困」も「虐待」も一つの要因ではなく、様々な要因が重なっていて、周りの支援や国の政策なしには解決、前進はないと改めて考えさせられました。我が家には障害のある子がいるので、松本先生が障害のある子や家庭への支援の事を最後に触れてくれたので、すごくありがたかったです。
- 子どもの視点から見た支援が必要で、子どもの気持ち、声をしっかり聞く事がとりわけ大事。「すごい」という言葉だけでも子どもは嬉しく思うもので、認める、褒める、尊重する事が変わるきっかけになる。
- ビデオ上映に感動しました。子どもにどうしたいか問いかけ、子どもの言葉に耳を傾け、一緒に考えていく事の大切さが本当に大事な事だと感じました。
- 支援された経験を作る事は出来る、この言葉が大変心に残りました。DVD 感動しました。もっともっと詳しく長くお話を聞きたかったです。相談し合う文化、大事にしていきます。
- 貧困の一場面を確認出来た。母親の DVD を見てみたい。

- 胸がいっぱいになりました。どうしたらよいか一緒に考える事の出来る大人であり、そういう社会を作る事の大切さを痛感しました。
- 自分の居場所といえる場を持つ事の大切さと、その場をどう作っていくのか、転んでも受け止めてくれる土壌を持つという事に、一人ひとりの環境の違いが大きく影響している事はわかるが、土台をしっかりしていくには学校・地域・行政等が連携していく事が大切だと感じた。
- 教育現場の人間として、すべき事やこうあるべき事、子どものためにしてあげられる事を再確認できました。「貧困」にある背景には様々な事がある。子どものために尽くす事が今だと思いました。
- DVDにもあったように、子どもは家族以外の地域の人とのつながりで多くの事を学び生きていく事を肯定的に受け止められる事、再確認できました。
- 家庭の不利が子どもの不利、その通りだと思います。教育・学校が関わっていく事が大切な事を改めて考えさせられました。
- 子どもの視点で見る事の大切さ、話を聞く事の大切さ、大人がその子の為に心配したり、支えたりしてもらう事の経験が大事だと思う事が出来ました。
- 改めて貧困の根深さとその根幹を知る事が出来ました。自分が出来る事、子どもの目線から考えなくてはならない事を考えさせられました。
- DVDはとても心に入ってきました。もったいないのはフリップが少し速かったので読んでいくのに大変でした。
- 子ども達の心の拠り所を地域の中で・・・どんな所にもある事の大切さを改めて感じました。子どもの貧困＝親の支援＝経済の援助がつながっているのですね。
- とてもわかりやすいお話でした。貧困問題は地域づくりという事がよくわかりました。実際に取り組みを進めていく事は大変ですが、見通しが持ててとても明るい気持ちになりました。もっとゆっくり聞きたかったです。
- 親のメンタルヘルスの問題と経済問題と社会的孤立の関わり、つながりの大切さがよくわかりました。人とつながる力、相談し合える力をどう作るか、本当にそうだと思います。
- 子どもの貧困の「背景」に目を向ける事を忘れてはいけないと改めて感じました。
- 今日のお話を聞いて良かったです。子どもの立場で貧困を見る事、とても大切だと感じました。もう少しお話を聞きたかったです。また、来年来て下さい。
- 大変わかりやすい。専門的な話に終始するのではなく、人として、大人として子ども達にどう関わるのかを問われているように思う。伴走する大人を作る事の必要性和重要性を強く感じる。
- どんな子にも楽しい学校、子どもの気持ちを聞く、寄り添う事が貧困対策につながるという事が大変心に残りました。この事を常に意識しながら学校現場で働いていきたいと思いました。
- DVDがフィクションだとわかりながら涙が出ました。実際にはそれが現実にあるのではないか、その中で苦しんでいる子どもの心が見え、その現実が変わっていく、周りとの関係の中で支えてくれる人がいる事に嬉しさを感じたから、伴走してくれる大人がたくさんいる、そんな街を作る事、まさに街づくり、子育て運動の街、稚内ならばそうだと確信しています。
- 虐待に対しての考え方が変わった。親の問題だと思っていたが、それだけではないことを知れた。
- もう少し具体的な対策について話を聞きたかったです。DVD後のような話を。
- DVDに先生の思いや伝えたい事が詰まっていて涙が出ました。そして何をすべきかはっきりしました。
- 行政、福祉、学校での役割はわかります。ただ、具体的な実践がわからないので、今まで通りやっていくしかないのかな、と思いました。
- 興味深い内容でした。
- 大変勉強になりました。DVDも勉強になりました。

- 子どもの頃、たくさんの大人に支えられて育った自分です。その恩返しを何かの形で真剣に考えないといけない、と思い始めています。一步、踏み出す勇気がなかなか持てません。
- 「どうしたい？」 どうしたらいいか一緒に考える事、今の子ども、そして保護者にも当てはまると思います。子どもや保護者の困り感に伴走出来る大人になっていこうと改めて考える事が出来ました。そして、どの子ども楽しいと思える学校づくりを進めたいと思います。
- ビジュアルノベル、とても感動しました。「子どもの貧困」という少し固いテーマだったので、ずっとお話を聞いているだけだったら、きっと途中で気を失っていたかもしれません。
- 貧困の中で困っている人には、話を聞いてあげるとい事が大切だとい事を知った。本も出している先生の話聞く事が出来、良い機会となりました。
- DVD とても感動しました。子どもに耳を傾ける事が大事だとい事。一緒に考える事、とても大切な事だとい思いました。ありがとうございました。
- DVD を通して色々な事を考えさせられました。また、それと同時に色々な子ども達の顔が浮かびました。子どもから見える社会、子どもが何を見て、どんな事を感じながら日々を過ごしているのか、子どもと接する時に忘れてはいけない視点だと改めて感じました。貴重なお話を聞く事が出来、大変良かったです。
- 貧困問題は単に経済的問題ではない事がわかりました。
- 「助けられた」という経験をもっと増やして頂きたい。自分の経験と照らし合わせて、まだ感じさせられていないと思った。
- 仁くんと智くんの2つのビデオを見て、子どもの貧困の実態を改めて知れました。子どもの意志などの尊重される事の欠落が多くあるのが貧困につながる事、それを改善する事が大切だとい事がよくわかりました。ありがとうございました。
- 素敵な DVD を見せて頂き、そこから噛み砕いて子どもの視点で、子どもの角度で困っているものの見方が出来てありがたいと感じました。
- DVD を見たり先生の話聞き、今だ貧困の差がある事を改めて考えさせられました。とても勉強になりました。
- とても良かったと思います。受け止める力、身につけていきたいな・受け止めてあげれる自分、気づいてあげれる自分、一緒に考えて、乗り越えていけるように、そういう協力をしていければと思います。
- 貧困の立場にいる人を周囲の人々によって、プラスにもマイナスにも向かわせる事が出来ると感じた。私もプラスの方向に導いていけるような、一人になりたいと思った。鎌田先生も発言していましたが、DVD を観て涙が止まらなくなりそうで半分ほど見れなかった。
- 自分も子どもを持つ親として「子どもの貧困対策」に興味があり講演を傾聴させて頂きました。DVD 鑑賞をはじめ、先生の講演も「なるほど」と聞き入ってました。本日は本当に良い講演ありがとうございました。
- とても考えさせられる内容でした。様々な家庭的因子や経済的な問題など課題は多くある中で、その子の思いや、どうしたらいいのか？ 寄り添う関わりの大切さを学ぶ事が出来ました。DVD の内容もとても深い内容で貴重な講演でした。ありがとうございました。
- DVD がとても心に残りました。
- 子どもの貧困に対する支援の方法を再認識しました。また、支援の難しさを痛感しました。
- 実践と経験に基づく貴重なお話と実話をもとにしたリアリティある DVD で時間があっという間でした。貧困そのものは私自身まだまだ不勉強だと思っています。このような学びを続けていきたいです。
- 社会は不平等であり家族が不利だったばかりに子どもにまで不利を負わせる事は何としてでもなくしていきたいと思いました。一緒に考える事の出来る人になりたいと思いました。

- DVDの説得力が大きかった。先生の話もわかり易く、もっと聞きたかった。
- DVDがとても感動しました。一つの事も色々な方法から見て、それぞれの立場から考え、支援していかないといけないと感じました。「どうしたいの？」これからも心がけていきたいと思えます。
- 学校現場で働く者として、子どもの貧困は切り離せない課題ですが、その課題に対して学校現場で取り組める事があるのだ、という事を改めて考える機会となりました。
- DVDを見て「居場所を作る事」「子どもの心と心から向き合う」事が大切だということを改めて強く感じました。
- とても具体的でわかり易いお話でした。子どもにとって居場所があって話を聞いてもらう事が、どれだけ大きな事なのかを改めて感じる事が出来ました。お話を聞いて本当に良かったです。
- 子どもを一人ぼっちにしない大人の支え！学びが深まった。経験を重ねる事で子どもの視点が必要、とても感動しました。
- 子どもの貧困について深く考えさせられました。今まで理解していたと思っていましたが、実践は多様な対策の組み合わせと言ったお話に、成程と思いました。DVDでは、子どもの視点、気持ちを少し理解出来たと思いました。
- 職務上、子どもと接する機会が多いので、子どもの良き相談相手としていられるようにしようと思いました。
- 私も魔法の言葉、「どうしたい？どうしようか？これからどうしたいの？」と、どうしたらいいか一緒に考えていきたいと強く思いました。
- 今まで何となくしかわかっていなかった事が、イメージを持ち易くなりました。
- 相談する力は、今、大人も子どもも低下している力だと思います。まずは、大人からです。頑張ろうと思いました。
- ”貧困”に関するレベルの高い内容の話が聞いて良かったですし、他人事とは思えない課題を感じました。
- DVDを見た後、「内容はフィクションだけど、現実に行っている事なんだよな」と思いました。一人ぼっちを無くすために、今、出来る事を精一杯やろうと思いました。
- ビデオは泣きました。分析のむこうに人生があると思うと、放置出来ないですね。折角、素早く動けた連携なので今後も生かして一歩先行く稚内になるように、モデルケースになるように願っています。
- 以前、貧困について学んでいました。今回、先生の話聞いて再度勉強しようと思いました。ありがとうございました。
- ビデオなどを見せてもらいましたが、フィクションではなく実際にこのような事が現実にあるのだと思い、身近な事だと改めて感じました。
- DVD、とても良かったです。勉強になりました。
- 貧困の概念をわかりやすく、かつ、ユーモアたっぷりの話口調で、とても勉強になった。
- 素晴らしい講演で、貧困は近くで起きている事を知った。連携し「子ども達との会話」が大切！
- プレゼンがわかり易くて良かったです。
- 子どもの貧困には経済的要因だけでなく、相談する人がいない、子どもの障害など様々な要因が重なっている事がわかった。だから、どう関わればいいのか、色々な可能性があるんだなあと感じた。「支援される経験はずっと残る」
- 大変、勉強になる事ばかりでした。”子どもの視線”大切にします。
- 2度も来ていただきありがとうございました。仁と智のビデオは文を目で追うのが忙しく感じましたが、内容が良くて心に届きました。「〇〇君はどうしたいの？」の声かけを大事にしていきたいです。
- 貧困を差別にしては絶対いけないと映像を見て強く感じました。そのためにも、貧困を小さく小さくしていく必要がある。
- 「私を支えてくれる大人がいるという実態」を与えられる機会があればいいなあ、と思っています。

- リアリティに富んで大変良かった。
- 1980年代、他町での子育て時代、いじめ問題が取り沙汰されるようになっていた。苦しい子育て時代から、今、自分に出来る事、無条件で社会の中で誰かの心配をさせて頂きたい、そんな人がいるんだヨと伝えられたらと、街づくりに参加していきたいと思いました。
- また、お話が聞きたいです！
- DVDと先生のお話が連動していて、課題がとても伝わってきました。子どもが置かれている状況を見極め、対応したり、話を聞いてあげる事の大切さを改めて感じた講演でした。
- 一番後になってしまったので、ほとんどスライドが見えなかった。DVDよりもっと話が聞きたかった。
- 貧困も大きな問題だが、その中にいる人達一人ひとりに寄り添う事で、心の貧困は解消しているものと思えました。ありがとうございました。
- 貧困は経済的なものだけではないという事、学校・地域でもっともっと助け合っていかなければならないと思いました。
- 貧困という経験の理解という中で、「劣ったもの」として扱われる感覚という表現が心に響きました。そこに慣れさせない事の大切さをどの人も守れるようにしていく事が重要だと思いました。
- DVDを見て、こんな子ども達が救われていくようになればいいなと思いました。
- 貧困とは生きる上で欠けている事という言葉が印象深かったです。当たり前かもしれないけれど、心に響きました。「学校生活」が楽しいと思える学校を作る、難しいけれど協力したいです！
- 貧困を子ども達の視点から捉えたDVDが特に印象に残りました。地域での支えの具体的な方法が理解出来たように思いますが、一市民が出来る事は何かを考えていきたいと思えます。「尊重される事」の大切さを改めて感じました。
- DVDは良かった。
- ビデオを見て、関わりの少なさ、子どもから見た視点で見る事が出来て、大変、勉強になりました。一人ひとりが少しでも出来る事を行える社会にしていけたら良いと感じました。環境により社会性が育てられない、狭くなっている切なさ、地域の関わりの必要性を感じました。
- 貧困の子ども達だけでなく、目の前の子ども達に心配している大人の一人として側にいたいなと思いました。
- 貧困を理解するために、幾つかの要素で貧困家庭とそうでない家庭の格差として問題を捉えていましたが、対策は組み合わせという結論を感覚的に理解する事が出来ました。「わかる」の新しい側面を知る事が出来て大変良かったです。ありがとうございました。
- 子どもの貧困の実態を知る事が出来ました。自分が思っていたよりも貧困って大変なんだなと感じました。
- 稚内に来る前、児童養護施設の子供達と関わっていた時の事を思い出しました。子どもの大変さは子どもにしかわかりません。寄り添ってあげる事が何より大事だと感じています。
- 途中からの参加でしたが、参加者が多くびっくりしました。後で映像が見にくくて残念でした。「家でしんどくても、学校は楽しい」と言ってもらえる学校になったらいいと思います。
- DVDを非常に興味深く見る事が出来ました。日々、魔法が使える養教でありたいと思うし、そうしているけれど、学校の先生だから限界を感じる事がある。福祉のおばちゃんになり、掃除をしてあげたい、大学生になって一緒にご飯食べてあげたい、家庭のフォローの大切さを感じています。
- 家でしんどくても学校に来たら楽しいと思える環境作り、していきたいと思いました。周りに心配したり、どうしたら良いか一緒に考えてあげられる大人になりたいです。
- 胸が苦しくなりました。
- 広い視点(政策)と個別の視点があり、課題がより明確になったと感じた。

- 教師として子どもの家庭背景、見失いたくないと思いました。過去、似たケースの子がいましたが、自分のやってきた事は良かったのかと振り返る事が出来ました。今後に生かします。
- 奥の深いお話ありがとうございました。欲を言えばもう少し個別なお話も聞きたかった。
- 「貧困～必要なものが欠けた状態」に、ハッとさせられました。どこか下に見ていたかもしれない自分に改心して、明日から手を差し伸べたいです。
- 深く、難しい問題かなど。個人では難しいので、地域、団体との連携が大事かと。
- 資料はもちろん、DVD も見る事によって、子どもの貧困の実態について具体的に理解する事が出来ました。
- 自分に期待してくれる人間の大切さを支えてくれる人の大切さを学びました。家に帰ったら息子に「どうしたい」と聞いてみたいです。
- 同じ家に住んでいても、それぞれに違った思いや状況があるのだとわかりました。家を見るのではなく、その人自身を見たり思いを聞いたり一緒に考えていったりする事が大切なんだなと思いました。
- メンタルや障害者のような理由で貧困が連鎖している事を知った。
- 教育の大切さ、教育から生まれる人とのつながりの大切さを感じました。
- 大変勉強になりました。特に DVD には考えさせられました。
- 支援されたというその子の経験が如何に、これから先の人生に影響を受けるか、という事を考えさせられました。DVD の兄の目線、弟の目線に考えさせられました。支援する一人として目先の事ではなく将来にむけて関わりたいと感じました。

② シンポジストの発言への感想や意見をお書きください。

- ◆ 子どもの尊厳の視点は大切だと思いました。最近、子どもと大人が集まる場を作っている寺の住職と話をしましたが、貧困であるほど持っているものが少ない（知識・スキルなど）。最後に残っているものはプライドなんだから、それを大切にする事は、一番大事な事だと話していました。その通りだと思います。
- ◆ 各立場からのお話しが聞けて、勉強になりました。幼・保・中の先生の話も聞きたかったです。また、北・南・東・潮見が丘等の地区の状況をもっと知りたかったです。
- ◆ 幼・保・小・中・高・大、地域全体で連携し、より良い子どもの未来を作っていってほしいと思った。
- ◆ 自分が通っていた高校の校長先生が、こういった事も考えたりしていると知って驚いた（稚内高校）。頑張してほしいと思う。
- ◆ 色々な意見、今後の対策、今の現状を聞いて様々な機関での連携が大切だと思った。
- ◆ 教育連携の大切さを改めて感じました。
- ◆ どの方のお話からも”連携”、つながるという事の大切さを感じました。他者と関わる難しさ、大変さ、喜び、様々あると思いますが、そんな大人の関わりをしっかりと子どもに見せて、その良さを感じさせてあげる事が子どもにとっての何よりの学びになると感じました。
- ◆ 「子どもの貧困」というのは、これまでは身近な問題ではなかったが、稚内でも他人事ではない深刻な問題であり、現実なのだなぁ、と感じました。小中高大それぞれが連携して子どもの貧困にむけて取り組んでいるのが素晴らしいと思いました。
- ◆ ネットワークの充実（4地区）、学校の教育の力など、やはり校長先生や学長など身分があり、責任のある方のシンポジウムは説得力があり、重みがありました。ただ、選挙演説みたいになっていたのが、面白かったです。
- ◆ 各地区子育て連協の役割が重要、地域愛、教育で貧困の連鎖を断ち切る。結果として、貧困対策は地域・学校の連携が重要と再認識出来た。

- ◆ 稚内の教育の一体感が感じられます。必ず成果教育で子どもの貧困の連鎖を止めてほしいと思いました。
- ◆ 稚内の子育て運動の歴史を改めて感じさせられました。素晴らしいお話ばかりでした。
- ◆ 稚内高校、若林校長の学校改革への姿勢と熱意がお見事！感服しました。各先生方がそれぞれのお立場で貧困対策について考えられ、行動されているのが実感できました。
- ◆ 各々の立場から貧困と向き合い、特色を活かした取り組みから連鎖を断ち切ろうと活動している方々の話を聞き、難しい問題と向き合いつつ、力強さを感じる事が出来ました。
- ◆ 各学校の指針を、わかり易く話して頂きましてよくわかりました。
- ◆ 貧困対策のためには教育が如何に大きく影響しているか、という事を強く感じました。幼保小中高大がつながり教育の力で街づくりをしていく事で貧困を減らしていけるいいです。
- ◆ 偉そうに書きます。申し訳ありません。一人ひとりの発言時間が限られていたと思うので、もう少し学校の CM ではなく、子どもの貧困に対する学校としての取り組みや、ご自身はどう思われているのかについて語って頂きたかったです。正直、去年のシンポジウムの方が現状を知れたり子どもへの愛情をひしひしとを感じる事が出来ました。それならば加藤所長の考えやお話を聞かせて頂きたかったです。
- ◆ 素晴らしい発言ばかりで感動しました。是非、実践していきましょう。取り組みを可視化してすべて実現させましょう。オール稚内で、同じ方向をむいて達成させたいです。
- ◆ それぞれの立場からの発言は心強く感じました。連携が実現できたらいいと思います。
- ◆ 斉藤先生の話は、わかり易かった。大学から見た貧困の問題や大学が出来る貢献策など、これから期待できる提案がされ、嬉しく思いました。
- ◆ 私は小学校の様子しかよく知らないので、様々な立場の考えが知られて良かったです。
- ◆ 各段階での対策をそれぞれ聞く事が出来て良かったです。交流は出来たと思うので次は連携する段階かなと思います。北星大学の学長さんがおっしゃっていた事、若者の貧困や学生も自己肯定感を持てる、経験を積む必要があるということがズシンとききました。
- ◆ 各々の取り組みがよくわかりました。皆さんの説明がとてもわかり易かったです。幼～大の連携が図れるのは稚内市ならではです。稚内が一つのチームとして機能している事は素晴らしいです。人と関わる力、相談する力が大切という事＝大人がつながる事が大切という事。
- ◆ それぞれの立場で出来る事、理想とする事が聞けて良かった。
- ◆ 「教育」の果たす役割について、教育現場からの話を聞けて良かった。
- ◆ 東地区のような取り組みが本当に色々な親に見える形で理解していくと、もっと声があがるのではないか。助けを求める人も声を出す事が出来るのではないか、と思います。
- ◆ 高校、私学、大学の話を聞く機会は、ほとんど無いので比べながらそれぞれの話を聞けて大変参考になりました。教育、大事ですね。
- ◆ 市、各レベルの教育機関の今後の連携が活発に行われ、それぞれの特色を活かした子どもへ学校への支援が拡充される事を願います。
- ◆ 私達が稚内を温かい街にしていくんですね。それはやっぱり大人の責任、若い人達と一緒に日本一の街にしたいですね。
- ◆ 教育の目標では？福祉的な部分は？福祉も行政対応も低下、貧困の連鎖は教育力低下の連鎖でもある。人間形成？人生設計？大学に入れば貧困防げる？うまくいかない場合の危機的回避能力も養ってください。
- ◆ とても真剣にうかがう事ができました。
- ◆ 「行事が子どもを育てる」事は、本当に感じています。そこで居場所を感じる子どももいるのだと思います。ただ、先生方の労力を考えると手が足りず悩ましいところです。
- ◆ 教育の重要性を再認出来た。
- ◆ 今まであまり考えていなかった子どもの貧困対

策が、様々な立場で考えられていた事がわかりました。貧困対策に教育が大きく関わっていた事もわかりました。奨励金問題、身近に感じます。

- ◆ 東地区のネットワークの話は具体的であり、身近な問題提起と継続の大切さがよく感じられました。大谷高校の独自性と街づくりへの関わりを見据えた教育活動は貧困対策への関わりを深く感じました。大学生から若者の貧困は家庭・子どもの貧困であり将来的に、やはり連鎖へとつながっていく事になりますよね。社会的な支援がないといつまでも連鎖が続くという不安が消えません。
- ◆ 稚内の各立場の話聞いて、オール稚内の取り組みが出来るなと思いました。幼保から大まで連携出来る事が、皆で何が出来るか考えていく事につながっていく事を感じた。
- ◆ それぞれの立場からの発言を聞く事ができ、良かったです。実情がわかったと共に長としての思いやプランを聞く事ができました。益々の連携が楽しみです。
- ◆ 各分野での取り組みをわかり易く説明されました。連携の大切さを強く感じました。
- ◆ 各教育機関での対策や取り組みは理解できました。今後の街づくりの観点から考えると教育が必要だという事。ただ、教育だけで貧困の連鎖は断ち切れるのかという疑問は感じる。職業観や就業観は親も子も必要な部分であるので、企業の参画も必要不可欠だと感じます。
- ◆ 稚内高校が、私が通ってた時と変わっていて驚きました。
- ◆ "少子化と言われ、子どもの数が減っているなかで、子どもの貧困率が高くなっているのは何故でしょうか。子どもの貧困は、親・家庭の貧困であり、そうなる原因は経済状況・雇用情勢の悪化です。低賃金化が進み、両親共働きの世帯が増え、それにも関わらず一人当たりの長時間労働は解消されない結果、子どもに十分に接する時間が減り、家庭の教育力は低下していると思います。また、以前から教員の長時間労働は言

われていますが、近年では、配置数が削減されているのにも関わらず仕事量は増えており、協働や連携と言え、聞こえはいいですが、様々な負担を地域や保護者など外部に求めるようになっていきます。

- ◆ つまり、学校では教員数を増員、少なくとも維持して、業務を精選し、学校教育は学校のなかで完結させる。家庭では一方の収入のみで十分生活ができるような賃金体制にして、もう一方が中心に子育てなど家庭教育に注力して、子どもが小さい頃から生活習慣や社会規律・経済観念などを身につけさせる事ができるように社会構造を変えて、次の世代が自立できる力を育てる事が必要だと思います。"
- ◆ 学校間の連携、それぞれの学校での学力や進路などの取り組み、色々と聞いて良かったです。稚内の子ども達の為に今後も努力して頂きたいと思います。
- ◆ どの方も稚内の為に、子ども達の為に教えて頂いていると感じる事が出来ました。
- ◆ 幼保の出席、発言を期待したい。
- ◆ それぞれの立場での幅広い考え方とその実践に感動。小学校（中学校）、高校（公立・市立）、大学の役割などを聞き、本当に感動。思い切って参加して本当に良かったです。
- ◆ 小中高大、行政のそれぞれの立場から貧困対策、街づくりに向かう気持ちが伝わってきました。
- ◆ 稚内高校の「どんな人生を描くのか」「定時制は学びのセーフティネット」、北星の若者の貧困の大学の話、取り組みが心に残った。
- ◆ 各学校や団体がそれぞれの立場で行っている取り組みが地域を作り、人を育てているのだと感じました。
- ◆ それぞれの立場からのお話、大変興味深かったです。特になかなか高校や大学の方のお話を聞く事は少ないので、とても貴重でした。
- ◆ 貴重な意見を聞きました。
- ◆ 稚内市の中枢となる教育長のお考えを聞ける良い機会となりました。
- ◆ 今後の取り組み、それぞれ何が出来るのか、と

いう事に意見を述べる事が中心なので、稚内の実態が見えていない中で聞いているので何が出るのかという事は理解出来るが、実態とかみ合っているのかどうかわからなかった。

- ◆ 難しく話していた。結局、何が言いたいのかわからなかった。
- ◆ 高校は学校 PR？ 貧困対策に聞こえない。
- ◆ ポイントを絞って発言したら、もう少しわかるかなと思います。素晴らしいメンバーのシンポジウムにステージを見ているだけで圧巻です。お疲れ様でした。
- ◆ この連携の輪を広げる事で、どのように貧困の連鎖を断ち切るのかが、具体的にわからない。結果を急ぐわけではないが、我々は何をすればいいか、何が出るかがわからない。
- ◆ "子どもの貧困が連鎖しないように、幼保小中高大が連携して取り組みを進めていくことは大切で、これは長期的な施策であり、教育サイドの取り組みは、継続していくことで、時間はかかりますが、効果が出てくると思います。短期的な施策としては、今の子どものためには、親の貧困が子どもの貧困につながるのだから、親の就労支援と生活保護など福祉的分野の充実を急ぐべきと思います。
- ◆ 次回は最前線で頑張っている方の声が交流されるといいと思います。
- ◆ 皆さん、とても素晴らしい発言でした。とても勉強になりました。特に高校の先生の話聞く機会がなかなか無いので、若林先生と山下先生のお話が聞けて良かったです。
- ◆ 学校長、教育長の意見を聞き、子ども一人ひとりを尊重する事の大切さを知った。
- ◆ 様々な話を聞く事が出来ました。
- ◆ それぞれのパネリストの方々が取組みされている事、感じている事を聞く事が出来、良かったです。
- ◆ 「子どもの貧困」を食い止めるためには、基礎学力の大切さ、学ぶ事の意味がどれほど重要かを感じました。
- ◆ これからの子ども達のためにも現実に行ってほ

しい。

- ◆ 教育現場のトップの先生方の熱い想いをうかがう事が出来て良かったです。
- ◆ まだ、「連鎖」していないと思います。目に見えるような形の取り組みを増やし、情報、発言があるといいと思う。各学校、立場からの取り組みは素晴らしいからこそ、もっとつながってきたいです。
- ◆ 高校の校長先生方や教育長のお話を聞き、現在の現状を知り、貧困問題、格差の問題を知れる良い機会でした。
- ◆ 高校の話が貧困対策に具体的につながっている感じがなく、少し残念な気持ちになりました。もう少し生徒の状況等を聞きたかった。東ネットワーク、北星の若者調査、とても良かったです。
- ◆ それぞれの立場でしっかり思いを持っている事に安心しました。地域としてなかなか、学校としては開けた学校に、というのが出来てない学校が多いな・・学校の思いまよいが子ども達の思いや考えをしっかり受け止めてもらいたいです。先生方にそういう時間がないのではと思っています。
- ◆ うつ、精神的病で子どもを育てられない親が増えてきている中で、子どもだけでなく親への支援も大切になってきていると感じた。
- ◆ 東地区の見守り家庭が多い事に驚きました。他の事に関しても驚きの話が多過ぎました。
- ◆ シンポジストの意見に元気をもらいました。
- ◆ 各教育機関、関係機関が全体で最初から関わりを持ち卒業後も一貫して情報共有と支援が必要ではないか。
- ◆ 稚高、大谷高、両高校や北星大の話は、なかなか聞く機会がなく、とても貴重な時間でした。それぞれの立場で稚内の現状、社会情勢の状況を見ながら尽力されている事がわかり、学ばせて頂きました。
- ◆ 5人とも簡潔にまとめられていた。幼稚園、保育所の先生の意見も聞いてみたかった。
- ◆ 3人に1人以上が学費の事を理由に進学を諦め

ている事は未来の稚内を支える若者達の力を発揮できない状況を生んでいる。即ち、稚内の未来がどんどん失われていく事につながると感じました。子ども達には明るい未来を見せてあげたいと思いました。教育費の補償制度を、奨学金のような返済の必要があるものでない形で充実させていく事が必要であると感じました。

- ◆ 貧困対策としてどの方もキーワードとして「教育」を挙げていました。小中高大のどの段階でもそれぞれの取り組みをしてはいますが、子どもの貧困を根本から解決していくには、やはり「教育」が大事なのだと感じました。
- ◆ 市全体で支えている事が実感できた。
- ◆ 子どもを支援する側につながる事の大切さを感じました。
- ◆ 子育て支援ネットワークの活動について、理解出来ました。稚内高校、稚内大谷高校の取り組み、北星大学での取り組みなど勉強になりました。
- ◆ 学校の役割を考え、様々な取り組みをしている事がわかりました。
- ◆ 各教育現場での取り組み、目的、地域として何が出来るのかの考えが明確に知る事が出来ました。
- ◆ 「連携」とは何をするべきなのかを、もっと具体的に聞きたかったです。
- ◆ それぞれの立場の視点で、成程と思いました。もう少しシンポジストさん同志の会話を聞きたいと思いました。
- ◆ 幼保小中高大の視点で子どもの貧困のお話を聞けて良かったです。そこに特別支援学校も入ると、もっと良かったかなとも思いますが。
- ◆ 小中から高校、大学まで色んな役割の中で、光のあるゴールを目指しているのはスゴイ事だと思います。生活力ある大人になる事こそが解決のゴール！そしてこんな会が続くといいですね、まずはスタートラインです。
- ◆ もう少し、一人ひとりの話を聞いてみたかったです。
- ◆ 貧困対策との関係があまり感じとれませんでしたし

た。部分、部分で。

- ◆ それぞれの立場からのお話を聞けて参考になりました。これからも関心を持ち続けて、このシンポジウムにも参加していきたいです。
- ◆ それぞれ6分は長いと思います。それよりディスカッションに時間をとるべきだと思います。
- ◆ それぞれの対策、取り組みを知った。
- ◆ それぞれの考えがあって良かったと思います。
- ◆ 貧困対策に教育や学校の役割、可能性が大きい事がわかった。
- ◆ 各校の取り組み、わかり易かったです。
- ◆ 各々のお立場から「何が出来るか」を語っていただいたのは、良かったです。短い時間で語り尽くせない事だとは思いましたが、ありがとうございました。
- ◆ 発言内容は実情、課題、目標等が明確にされ、それぞれのカテゴリーで、しっかり取り組んで確実に前進していると感じました。ただし、昨日もそうでしたが学校の先生の話は長過ぎです！去年は南小教頭、今年は東小校長！小学校の先生は話が下手です！そんな印象しかありません。せっかく良い講演なのに残念です！
- ◆ 各氏発言が整理されていて拝聴し易かったです。
- ◆ シンポジストは教育者がほとんどだったが、幼小中高大につながる事は例がないというが・・・今後に期待したいと思っています。
- ◆ それぞれの教育の分野での取り組みを知る事が出来て、元気も出だし自分も出来る事を周りの同じ想いの人々と一緒にやりたいと思いました。
- ◆ 各学校、団体の取り組みを知る事が出来ました。進学したくても出来ない子ども達がたくさんいる事は、とても切ない事であり、国も何か手立てが必要だと思います。
- ◆ それぞれの立場で子どもの貧困から発した街づくりの基盤が語られる事は大変素晴らしいと思いました。
- ◆ 鎌田先生と斉藤先生の話が、新しい情報や発見があり、ためになりました。子ども食堂の動きは知らなかった、驚きました。
- ◆ 最後まで聞けずに残念です。私用で途中退場で

した。

- ◆ とてもいい話を聞けました。ありがとうございました。
- ◆ もっと一人ひとり 6分以内に言いたい事をまとめて言えるよう準備してほしい。話している内容が多すぎて結局何を言いたかったのか、よくわからないという事があった。学校の取り組みのPRも兼ねているようだったので、発言が長いなら事前に資料としてまとめて配布してもらえると良かったです。
- ◆ 東地区の見守りの話が良かったです。当初の10倍というのはびっくりしました。
- ◆ 各シンポジストの話は、どの方も自分達の基礎から全体を考えた話だったと思います。これらがつながっていってくれる事を願います。
- ◆ 貧困のテーマに欠かせない、ライフデザインと教育に関する情報でした。内容については資料があった方が活用の方が広がり、展開につながるものが多かったので少し残念です。
- ◆ 貧困に対する様々な取り組みを知る事が出来ました。とても勉強になりました。やはり若い時が一番貧困に対する支援をする必要があるな、と思いました。
- ◆ それぞれの立場からのお話は大変興味深いものでした。東地区の小中ネットワークは随分進んでいて学校関係者、地域、行政の皆さんが子ども達のため奮闘されている事がわかりました。
- ◆ 幼～高の連携は良いと思う。ただ、もう少し貧困に関わる話を聞きたかった。
- ◆ 学校とPTAの連携をもっととれれば。
- ◆ シンポジストが自分の職場の宣伝をしているだけのように聞こえる。全く貧困と結びつかどうか怪しい。落ちない。
- ◆ 親の養育問題、自らが育った環境など稚内でも課題のある家庭は増えているものの、民生委員さんや様々な人が関わって何とかしようとする働きをしている事を知り、今後、更にそのような手立ての必要性が増えていくのかなと思いました。
- ◆ 全て学校側の話だったので、「市」が何をするか

など聞きたかった。正直、学校・教師だけが何とか出来る事ではなく、どう市と連携出来るのか知りたい。

- ◆ 学力よりも学費がネックになっている、といった事が印象的でした。
- ◆ ステキな提言ばかりでした。テーマが幼～大なので、幼・保の提言者や特別支援の方がいれば良かったと思います。
- ◆ 子どもは親や家庭を選べないし、与えられた環境でしか生活が出来ないので保護者だけでなく、周りの大人も皆でその子に関わっていく事が、その子の成長や経験にとって、とても大切なんだとわかりました。
- ◆ それぞれ新しい情報があり参考になった。
- ◆ それぞれの取り組みを聞く機会となり、大変参考になりました。意見交換の時間を取れると良かったと思います。
- ◆ 様々な立場の方からの話が聞けて良かったです。
- ◆ 各リーダーが貧困に対して真剣に取り組んでいるのがわかりました。稚内が先進的な取り組みをしているのが、素晴らしいです。安心しました。
- ◆ 子どもを支える社会作りの大切さを学びました。
- ◆ 見守り家庭が増えている事は深刻に思います。稚内高校の単位制の導入に関心があり、今後の成果を期待しています。自分の人生→ライフスタイル→学科と勉強の意味がわかるというのは良いと感じた。大谷高校の資格取得が今後の街づくりに期待しています。給付型奨学金制度は貧困家庭にとって救いのある高校となると思います。どの子にもチャンスを与えて頂きたいと感じています。大学生が生活するためにアルバイトに追われているのは本末転倒なので何とかならないのだろうかと感じました。奨学金制度に対しても自己破産しなければならない状況が何とかならないければ人材育成にはならないのではないかと不安を感じました。北星の学生生活動に感謝です!子ども食堂が出来ると良いと思います。
- ◆ 各シンポジストの取り組みや関心が深く理解出

来た。

- ◆ 課題を的確に整理して話してほしかった。難しい用語で長く話しても一市民には貧困の具体的な姿が見えずがっかりした。学校宣伝は必要ない。子どもの困り感の実態を話してほしかった。シンポジストが男性ばかり？何故でしょう、肩書がある人ばかり？それでオール稚内になるのでしょうか？
- ◆ 孤立化させない、教育の重要性。稚内の取り組

③ 全体の感想や意見をお書きください。

- 幼・保・小・中・高・大・地域とたくさんのつながりを持って、稚内で生まれ育つ子ども達が幸福感を持って過ごせる事を願っています。貧困というテーマは大きいですが、一人ひとりが笑顔で過ごせる事が大切なのは・・・そして私の出来る事をしていきたいと思いました。
- 貧困については、これからももっと考えなければいけない問題点がたくさんあると思った。
- 子どもの貧困や地域の問題について、深く考えるきっかけになった。
- 松本先生とシンポジストさんの発言で、今後、貧困の家庭と関わる際の対応を学びました。ありがとうございました。
- 子どもの貧困は大変な事だけれども、まず、低所得者の親などの支援も大切かなと思いました。
- シンポジストの中に特別支援学校の代表者の方を入れて頂きたかったです。
- お話を聞く中で、日々の子ども達との関わりを自分なりに振り返ることが出来ました。”子どもはどうしていききたいのか”という事を心に留めながら、今後の支援に当たり子どもの姿から学んでいきたいです。
- そうだ！人とつながる力が大切だ！子どもの貧困について考えようという人がたくさんいる事に勇気づけられました。
- 大変、勉強になる会でした。松本教授、シンポジストの話される内容が深みのあるものばかりでした。お世辞ではなく、本当に今回も参加できて良かったです。ありがとうございました。

みなど知る事が出来た。

- ◆ 学校間連携はとても良い事だと思いますが、学校は日々忙しいと思いますので、学業という本来業務に影響や負担がないように進めていく事が必要だと思います。子ども達のために頑張っている人達が倒れていなくなったら本末転倒です。

- 地域の団結力や子ども達の未来を考える方々の輪がもっと広がって、稚内市内の一人ひとりの大人が、子どもの笑顔を絶やさない認識を持ってほしい。その大いなるきっかけになっていると思います。
- 「貧困」というキーワードではありますが、歴史の流れの大きな転換点にきているという事が伝わってきました。稚内ならば明るい未来を拓く事が出来ると思いました。ありがとうございました。
- 稚内市の先進的な取り組みを知れて、来て良かったです。自分にも何が出来るか考え、実行していきます。また、藤本さんのご尽力で子ども食堂がオープンしそうだとのニュースも嬉しく聞きました。子ども食堂も大切なセーフティネットだと思います。
- 貧困や虐待の話を知ると、いつも暗い気持ちになりますが、今回は取り組みに対しての話が前向きで明るい気持ちも持つ事が出来ました。幼保小中高大と長い縦の連携の力強さを感じます。ありがとうございました。
- 大変、良かったと思います。
- 「人とつながる力、相談する力」の言葉、響きました。そのためには受け入れる、聞き入れる側の土台づくりも必要だし、日頃からのコミュニケーションが高められるような人間関係を作っていけるといいと思いました。
- これから稚内が一つになって貧困対策に取り組んでいく事が必要だと改めて感じました。

- 少し話は逸れてしまいますが、保健室の先生、SSWの先生のお力は本当に大きく、いつも助けて頂いています。今日のお話でも痛感しました。これだけ多くの方が子どもの幸せを願って集まり、更にお話の節々にも感じられたのに、何故、市教委からおりてくる物は現場の声とかけ離れているのか不思議です。何よりも、まず、子どもの為に目をむけて。
- この取り組みが保健・福祉・障害、医療・介護も含め、企業も街ぐるみでつながっているオール稚内、今回のシンポジウムに参加して、取り組める、解決できると思えました。一市民として、私も力になりたいと思います。良いシンポジウムを企画して頂きありがとうございます。
- 貧困について多くの方が集まって考える機会を今後も継続していけると良いと思います。運営の皆さんお疲れさまでした。ありがとうございました。
- 教育連携会議に期待します。
- 「幼保～大」までの連携を図る土壌が稚内にある事の素晴らしさを改めて感じました。
- 学校に相談室、直接子どもが来れる場所、色々な方法を教えてくれるような場所を作る事が出来たらと思っています。全てが解決できるような流れが一か所に行くことで全てにつながる場所を学校の中に作ってほしいです。親だけが相談出来る場所ではなく、子どもも困ったと言える場所、先生ではなく、ボランティアや民生児童委員、SSWがいつもいる部屋（教室）があるといいと思っています。必ず学校区（子どもが歩いて行ける所）に均等に作ってほしい。
- 幼・保のレベルでの実態、子どもや家庭の様子、取り組みが聞きたかったです。
- シンポジストの人選に偏りがあった。教育関係者ばかりだったので、学校で取り組む話が多かった。貧困対策とは街ぐるみで行うためには、色々な立場の意見を聞きたかった。
- 貧困と不登校が結びついているということは大きな問題だと思います。どうにか周りの大人が子ども達を支えてやらなければと。
- 議会は子どもの事を数字でしか見ない、学力テストなど見えるものでしか判断しない、もっと現場を見てほしい、貧困がわかると思う。管理職も会議はもちろん実際の子ども顔を見てほしい、机上の空論すぎて話にならない、だから、今日のシンポジウムは期待を持って参加しました。日本とスロバキアが同じレベルだという事に驚きましたが、それを打開するためにも、連携会議などで実際に動き出している事を知りました。日本は教育をないがしろにしすぎている、財政の腰は重いのに「やれ」ということが多すぎる、矛盾を感じる。何とか変わってほしいけれど、一教員の声だけでは変わらないから、こういうシンポジウムはどんどん開いて発信してほしいです。
- 貧困の問題はすぐには解決出来ない、スモールステップで今年度はこれを、次年度はこれをという具合に具体的な数値目標を市民に明示して稚内市の取り組みを進めてほしい。講演・シンポジウムではない取り組みが必要。次の段階に着手すべきだと考える。
- 今、取り組んでいる事の充実。もっともっとネットワークを強く太くする決意と可能性を感じた素敵なシンポジウムでした。ありがとうございました。私も一歩前へ頑張ります。
- 貧困にスポットライトが当たって、困っている度合で周囲の力の入れ具合に差が出てはいけない。皆、大事に扱ってください。困っても困ってなくても同じに扱って子どもは思う。
- とても良い講演会、シンポジウムと思いました。昨年資料を読んで参加しました。
- 貧困・障害は差別を受けたり理解されずに孤立していくような社会が日本には根強くあります。支援の情報も施設も不足しています。弱者は後回しにされていると感じる事も多々あります。稚内市のようにみんなで何とかしましょう、広げていこう、と取り組んでいることはすごく意義のあるものだと思います。松本先生がおっしゃったようにいろんな角度から分析して共有し合って、前進させていきたいものです。

- 様々な立場の方々のお話が聞けて良かったです。幼稚園・保育園の立場からのお話も聞いてみたいと思いました。
- 貧困だけでは、色々な事が重なり合って起きる問題として受け止めて、市民の皆が意識していく必要がある。
- 参加して良かったです。勉強になりました。
- とても勉強になりました。関心を持ち続けていきたいです。
- 貧困に対して単に経済的な理由に限らず、様々な要因を把握し、適切な子どもへの対応というものを考えなければならないと再認識できました。
- 幼小中高大の連携の土壌があるのは、歴史ある子育て運動が現代に引き継がれているからだと感じました。また、子育て運動が稚内に誇るべきものだと思います。
- 子どもの貧困、親の貧困が少しずつでも減少していくよう地域の方も含めて考えていかなければならないと思いました。
- 皆が連携していく事が本当に大切な事だと思います。自分も一緒にやれる事はやっていこうと思います。
- とても勉強になりました。シンポジウムの方々の表示がずれていました。気になりました。
- 貧困問題と地域・社会の課題の大切さがよく伝わってきました。講演と更にシンポジウムを聞いてわかりました。稚内って素晴らしいとしみじみ思いました。自分でも何が出来るか考えたいと思います。
- 昨年も思ったがシンポジストの話は半分にして教育関係者以外での動きや実際に子どもが浮き出てくるような話を聞きたい。昨年からどう進化したのか・・・幼保小中高大の日本で初の連携は素晴らしいと思う。長年の教育運動の賜物と思う。思うが、最後の松本先生の社会福祉の相談、つながる人の輪が次に目指す事の一つだと思った。
- 大人の考えが聞けた。前向きに考えているように感じた。
- 子ども食堂の実現を期待したい。
- こんなにたくさんの人達が集まって（立場の違う人が集まって）、話を聞き共通の目標が持てた事が大変良かったです。自分達の取り組みが意味ある事だと感じました。
- 幼から大学まで皆で子ども達の事を考える事の大切さを改めて感じました。これから更に具体的な対策が行われると思いますが今後も色々聞かせてもらいたいと思いました。ありがとうございました。とても時間が短いと感じました。もう少し時間をとって、じっくり考えたいので平日でなくても開催してほしいです。
- 貧困の実態、現実、そういう中で支える人、見守る、救う制度、組織で何をしているのか。そうした事を知る機会も合わせて持てたら良かったと思う。講演短めに、シンポジストは3人位、現場からの報告と取り組み、という構成だとわかり易いと思った。
- 講演+行政に対する質疑、という思い切った内容でもよい。
- 「貧困の連鎖を止めるのは教育」という若林先生の言葉、その通りだと思います。そのため、もう少しお金の事だけでなく、成長できるための各学校のスクラムを組んだ取り組みが必要だと思います。小中高大で一貫した理念作りが必要です。
- 一人でも多くに現況を知ってもらう事がねらいだったのかな？
- ビジュアルノベルを見終えた後、何かしたい、何か出来ると思った人、動き出したいと思った人がいたような気がします。
- 前回のシンポジウムでは、医療、労働、教育など各分野の方がシンポジストでしたが、今回は全て教育の方でした。次回は、教育以外の分野では何をしようとしているのか、どんな現状なのか聞いてみたいです。
- 改めて考えさせられたことが色々ありました。シンポジウムでの話が今後実行させられる事と私自身も地域や社会に出来る事を行いたいと思いました。

- 特定の人達だけでなく広く市民が貧困について考える事が大切だと思います。今後も定期的に継続してほしいです。
- 30年以上札幌に住んでいて宗谷には2年前に来ました。宗谷、稚内の地域や人々の温かさがとても好きになりました。僕は教員なので、宗谷、稚内の子ども達にとって楽しい学校を作れるように努力したいと思いました。楽しい学校づくりと貧困対策をつなげて考えていきたいと思ひます。
- 仕事後の参加でしたが丁度良い時間配分だった。
- 貧困に対するとても良い講演会でした。ありがとうございました。
- 昨年に続いて2回目の参加でしたが、たくさんの方が集まったという点だけでも充分、この取り組みについて関心の高さを感じる事が出来ました。松本先生の講演がとても良かったです。こうした学びの場が今後も続くと良いな、と思ひます。こうしたつながりが、それぞれの地区での取り組みへと発展するのではないかと感じます。
- 稚内街づくりの観点から、この会議が立ち上がっているという点が理解出来ました。市のマクロ的事業としては、是非、小中学校の給食費が完全無償化になるといいと思ひます。出来れば、その財源が出来るだけ地元で還元されていく仕組みが出来ると更にいいと思ひます。例えば、地域振興券での支給など。
- 会場準備ありがとうございました。
- それぞれの先生方のお話を聞き、教育指導の面を改めて考え直せるよいシンポジウムとなりました。
- 2回目となり昨年ほどの新鮮味は感じられませんが、松本先生のお話はやはりもう少し長く聞きたかったな一と、これは昨年同様感じました。これからの未来が連携に愛があふれる稚内でありますように。
- どこまで連携して支援出来るのか疑問であるが全体が共通の認識のもとに貧困を断ち切れる事を望む。
- とても良かったです。協力できるところは一緒に取り組みたいと思ひます。受け止める力を培う、協力しますよ。私はそういう活動をしたいし、しているので、街づくり、人づくりとても大切です。稚内の街を住み良い街に、病める心が元気になるように行政とともに一緒になって活動していきたいものです。
- それぞれの校長先生方が教育に関するお話を頂いて、とても熱心に稚内市全体で貧困に対して考えている事がわかりました。加藤先生のお話の中にも少し出てきましたが、子ども食堂についても深いお話を聞きたいと思ひました。
- 来年も機会があれば出席したいと思ひます。
- 貧困という言葉に拘らず、広い目で困っている子どもの力になりたいと思ひました。
- 「貧困」という中には単に経済的問題だけでなく、養育者の問題（メンタル）やいじめなど「子ども」に本当の意味で焦点を当て、必要な関わりを考えて動く事の大切さを改めて感じました。家族のあり方が変わっていく中で、虐待予防も含めた長期的な支援が重要と思ひます。本日は貴重な講演をありがとうございました。
- 人選も含めてボリュームのある重厚な講演、シンポジウムでした。今日は参加者としてインプットばかりでしたが、自分も自分の立場でインプット、アウトプットともにしていけたらと思ひます。
- このネットワークの網をより多くの市民、地域に是非広げていきたいものです。
- たくさんの方が参加しているので、これからの稚内の子ども達にとって幸せな気持ちが増える事を期待します。
- 教育を受ける事は経済的格差があっても、どの子どもにも平等に与えられて権利ですが、教育を受ける事（学校に行く事）自体が子どもにとって負担となってる現状を解消していかなければならないと思ひました。子どもの内面的な面からも保護者負担金という経済的な面からも、教育現場が課題解決に向けてやるべき事が多分にあると感じました。

- 「生徒と心から向き合える（初心）」教師になろうと決意した時を思い出しました。”生徒はどうしたいのか”を聞き一緒に考える事を頑張っていきたいと再度決意出来ました。今、目の前にいる生徒の心を受け止めていきます。とても、貴重なお話を聞いて良かったです。ありがとうございました。
- 仁、智の立場でのビデオはとても引き込まれるものでした。それぞれで考え、感じている事は異なるため、本人の意志に耳を傾けるように意識していきたいと感じました。
- 松本先生のお話をお聞きする事が出来て、本当に勉強になりました。今後の活動に生かしていきたいと思いました。
- 今、学校に通う子ども達がお金にとらわれず、行きたい所に行ける、そして、やりたい事がやれる世の中であってほしいと思いました。
- 地域で本気で取り組んでいたら素晴らしいですね。稚内のこの取り組みをもっと知ってほしいと思います。細やかな学校の取り組みが、理解、知られていない事が残念です。
- 会場が狭いと思います。
- 日本でまだ無い取り組みという事で、稚内の事を誇りに思います。貧困が一つでもなくなりますように。
- 日本全国の子どもの貧困について知られたのは良かったです。今の稚内市の子どもの貧困について、もっと知りたかったです。
- 資料などをもう少し多くほしいと思いました。
- 毎回、思います。市にとって子どもにとって大事と思う、こんな機会に市長や副市長があいさつだけで退席というのはとても残念です。本気で取り組む気があるなら、きちんと参加するのが礼儀だと思います。経済が絡まないのは挨拶だけって、残念過ぎると思います。でも、産まれてから大人になるまでの教育機関が繋がったのは、もの凄い事だと思います。今後もつながり続けてほしいです。プライバシー的にはどうかと思いますが、家族がわかるのはスゴイ事です。お寺さんいるのも心強いですね。
- 今回、学んだ事を深めたり、広げたり、発展させたいです。次につながる本、文献等を紹介して頂きたいです。
- 子どもの貧困の実態も、もう少しお聞きしたかったです。
- 「子どもの貧困」が題目なので、学校関係者に限らず、社協やNPO、民生児童委員の方も呼んでもよいのではないかと。
- 子ども達にも聞かせたい。
- 面白かったです。
- 何となく漠然と考えていた貧困問題や対策に向けた取り組みのイメージや必要性が深められる機会となった。
- ありがとうございます。
- シンポジストが増えたけれど、幼保や中学の代表の話も次はあるといいですね。子ども食堂の取り組みが始まるとの事、嬉しいです。大学の奨学金（給付型）の普及を切に祈ります。
- シンポジウムの時間配分を厳守させて下さい！時間を守れない人間が先生なんて残念です。稚内大谷高校良いですね！子どもを安心して預けられそうです。
- 幼小中高大がつながる連携会議が出来た事を誇りに思い、一人ひとりが何が出来るか、どのようにしたら対策をとれるのか、そして実践していく意志を持つ事だと思います。
- 大変勉強になりました。
- 旭川で子ども食堂が開かれ注目していましたが、地域の人々の参加できる場が稚内にも出来るといいと思っている。
- とても勉強になりました。これからもこのような学習の場を是非作ってください。
- 子どもの貧困問題は深いと感じました。自分が現在出来る事から始めなければと思いました。貴重な時間ありがとうございました。
- 教育と福祉の連携を深めるためのネットワークが必要である。
- 教育連携会議の話し合いの中身をもう少し見え易いように、市民の意見を聞いたら良いと思う。（会議の中身に反映させる必要はないが）

- シンポジストは現場のクラス担当をする 10 年くらい経験がある人を出してほしかった。
- とてもいい話を聞けました。この取り組みを今後も続けて行ってほしいと思いました。ありがとうございました。
- 貧困、不平等を解決出来ないかもしれないけど、「つながり」を持つ社会を作る事が改善へむけての前進になる事を感じさせてくれました。ありがとうございました。
- 時間を守るのは社会人としての最低のルールです。そのルールすら守れない人々に地域をリードしていく力があるのか疑問を感じる時間でした。稚内の子どもの困り感が全く伝わりませんでした。残念です。標準ではなく”稚内の子”の姿を知りたかったです。
- 子どもが子どもらしく暮らせる社会のために、行政のつながり、人と人のつながりの大切さも感じました。
- 学校に行くのが楽しい”楽行”を目指して、また頑張ります。元気を頂きました。ありがとうございました。
- 講演が良かったです。参加した人が良かったと思う事、学んだ事、得た事を広めようとする事が、このような活動には不可欠だと思います。シンポジウムでは、北星学園学長のしぼった話はわかり易かったです。
- 子ども食堂の動きが聞きたかった。
- 教職員を強制参加させるのはやめてほしい。保護者のみで。ただでさえ劣悪な勤務状況なのに。話が長くなると老いるという事がわかりました。時間もしっかり守りましょう。
- 今後、貧困対策の講演には参加していきたいと思いました。
- 多くの人が子どもの家庭状況、背景、そんな事を知るきっかけをくれて良かったです。ともすれば大人ですら「ただのサボリ」と捉えてしまう不登校。そうではないケースがある事を多くの人知ることがいいと思います。保護者向けの資料があると学んだ事を学校で広げられたので我がままですがあると嬉しいです。
- 今日、参加して良かったです。自分主導で子どもと関わっている事が多いと反省しました。子どもの思いを受け止め、丁寧に関われるよう、これから尽力したいと思います。
- 稚内市の教育、福祉に関して力を入れている事がわかった。
- 各家庭での用もあるなかでの参加なので、予定されていた時間内に収めてほしい。
- あまり遅い時間になる設定だと、参加が厳しいなと思いました。
- 個別の取り組みと更に必要な視点をシンポジスト、松本先生から学ぶ事が出来た。すぐには解決しない問題なので、長期的に関心を寄せ続ける必要がある事が確認された。
- 関係者の皆様ありがとうございました。我が子との接し方を今一度考え直しました。勉強になりました。我が子に一方的に何かを言うだけで息子と向き合って話をあまりしてませんでした。参加して大変良かったです。来年も松本先生の講演をお願いします。
- 地域がこのようにたくさん集まり貧困対策に対して考えている事に驚きました。人とつながる力(相談する力)、大人同志がつながる力を身につけるといっても大事だと感じました。(孤立させない) 大人と子の支援のつながりも大切にしたいと感じました。
- これほどの人が集まる事に稚内の凄さを感じました。我が子主義が広がっている今、皆で子どもを育てる空気が広がるといいですね。本日はありがとうございました。
- 講演の松本先生も言っているように対策がしっかりととられているのがわかりました。これだけしっかりとっているのですから安心です。あとは学力向上を目指す事だと思います。
- 学校や教育サイドで頑張っているという事はわかりましたが、経済や福祉の関係機関はどんな事をしているのでしょうか。教育をしっかり教えるというのは、将来、子ども達が困らないようにという事で、今の貧困家庭を助けるのは福祉サイドの取り組みだと思います。

- 松本先生の話はとても簡単な表現ながらも、凄くわかりやすかったです。貧困という表現の中にイメージしていたものが、先生の説明でもっと広く多くの視点という状況を含むものだとわかり大変勉強になりました。
- 不登校の生徒が感じているかもしれない事を考える時間となり、今後、自分でも出来る声かけ、働きかけを考える事が出来ました。「学びたい」と思えた子どもの願いが叶う制度が整っていくと良いなと思いました。

2 子どもの貧困対策プロジェクト会議 記録 (1) 議事録

稚内市教育連携会議 結成会議 (2016. 5. 23)

◆表教育長挨拶

- 全国的に子どもの貧困が大きな課題になっている。稚内でも看過できない状況である。
- 平成 27 年度、稚内市子どもの貧困対策プロジェクトを立ち上げ、検討をしてきた。
- 子どもの貧困対策本部会議、プロジェクト会議での協議、シンポジウムの開催を通じて、「稚内市子どもの貧困対策に関する提言」をまとめ、市長に提出した。
- 提言でも示している通り、教育の連携は極めて重要である。幼保から大までのネットワークは益々重要になっている。
- 昨年度最後の会議において、「教育連携会議」を呼びかけ、ここを中心に子どもの貧困を考えていきたい。この主旨に賛同をいただきたい。

◆当面の取り組み 平間信雄コーディネーターからの説明

- 稚内市教育連携会議の代表委員について
 - ・ 稚内市教育委員会教育長 表 純一
 - ・ 稚内市校長会 会長 鎌田 正之
 - ・ 稚内高等学校 校長 若林 利行
 - ・ 稚内大谷高等学校校長 山下 優
 - ・ 稚内北星学園大学学長 斉藤 吉広
 - プロジェクト会議について

稚内市教育連携会議設置要項の（構成）第 3 の 2 を注目してほしい。

「連携会議の下、第 2 に規定する事業を推進するため、稚内市子どもの貧困対策プロジェクト会議（以下「プロジェクト会議」という。）を設置する。」
 - 今後の日程について
 - ・ 6 月 23 日 第 1 回子どもの貧困対策プロジェクト会議
 - ・ 8 月 23 日 第 2 回子どもの貧困対策プロジェクト会議

この会議までに、市内 4 中学校区にあるネットワークを充実させる意味から、高等学校でのプロジェクトメンバーの増員を検討いただきたい。（4 名を）

稚内養護学校からもプロジェクトメンバーとして 1 名を出していただきたい。

 - ・ 11 月 22 日 シンポジウム
- 昨年もお世話になった北大の松本伊智朗先生には、今年度もご協力を仰ぎたい。先生の都合で 11 月 22 日と定めたい。

第 1 回子どもの貧困対策プロジェクト会議 (2016. 6. 23)

- 教育長挨拶（子どもの貧困対策と稚内市教育連携会議の設置について）
 - ・ 委嘱状を交付させていただいた。引き続き力添えをお願いしたい。
 - ・ 昨年度、子どもの貧困問題で本部会議を設置してスタートした。手探りの状況だが、問題意識の共有は

できた。プロジェクト会議での論議で提言をまとめ、市長への提出ができた。

- ・ 今年度は、子どもたちの現状に立ち向かう「稚内市教育連携会議」を立ち上げた。4つのネットワークを生かし、高校（稚内養護学校）からも参加していただき、提言の充実に向けて論議や新たな対策について協議をしたい。

○研究・協議の進め方について（平間コーディネーターから説明）

- ・ 稚内市教育連携会議に魂を入れる検討と研究を進めたい。4地域のネットワークでのつながりを単位にして展望をつかみたい。
- ・ プロジェクトメンバーについて、提言責任者（声問小吉崎校長）には引き続き提言書にまとめ上げる仕事をお願いしたい。
- ・ 3つの課題について、現状の報告をお願いしたい。
 - ① 研究紀要について（若原稚内北星学園大学准教授）来週には印刷所に回せる段階にきている。
 - ② シンポジウムについて（加藤相談所長）昨年度もお世話になった松本先生との連携のうえ、11月22日に今年度のシンポジウムを開催したい。
 - ③ 「子ども食堂」について（藤本主任児童委員）全国的に展開されてきている子ども食堂を稚内でも提案したい。
- ・ 今日の協議では、
 - ① 地区ごとチームメンバーのつながりづくりをまずお願いしたい。（自己紹介など）
 - ② チームのメンバーとして、高校（稚内養護学校）、大学からの参加で、何を期待するのか等を話し合っていたきたい。
 - ③ 提言の⑤～⑩について、夢のある検討をお願いしたい。

○全体交流

【北地区】（稚内高校定時制山田教頭）

- ・ 役職、立場で貧困の関わりが違ってくる。制度に関わっては勉強したい。
- ・ 貧困の問題では、親の金の使い方を改善することが、永遠の課題と言えるだろう。
- ・ 定時制に通う子どもが働いても、その賃金は家庭にそのまま入っているという現状がある。

【南地区】（市立病院桜井医療SW）

- ・ 4名での話し合い。出席者から福祉的な話し合いになった。
- ・ 大学からの参加は歓迎したい。ただ、小・中・高より、少し変わるように思う。同じ目線では考えられないと思う。
- ・ ライフステージによって、どの子ども同じスタートができるようにすることが大事。

【東地区】（東小学校林教頭）

- ・ 6人メンバーで4人が昨年度からの引き続きで、「頑張ろう！」と意思統一した。
- ・ 大きく考えると基本は、子どもへの支援、連鎖を断ち切ることが大事。
- ・ 「生まれてからず〜と、稚内で」を考えると高校、大学の先生の思いを聞くことは大切だと思う。

【潮見が丘地区】（潮見が丘中学校網谷校長）

- ・ 潮見が丘地区の子育てネットは、小・中・民生委員に幼稚園も加えて、大谷高校にも声をかけ、地域に大学もあり、自然な形で連携しやすい。
- ・ 貧困問題だけでなく、子どもへの内なる力を育てることを考えると、大学の役割は大きい。

○まとめ（教育長）

- ・ 子どもの貧困は永遠の課題。それに立ち向かいことが大切だ。子どもたちが立ち向かう力（内なる力）を育てることが私たちの課題だ。
- ・ 少なくとも高校までは行ってほしい。高校で学び直すチャンスを与えたい。
- ・ 行政も一緒に進めていきたい。1年間、よろしくお願ひしたい。

第2回子どもの貧困対策プロジェクト会議（2016.8.23）

○教育長挨拶

- ・ 昨年度から進めてきた子どもの貧困問題について、様々な方々に大きな関心を持っていただいた。その成果が「研究紀要」としてまとめられた。
- ・ 今年度は、子どもたちの現状に立ち向かう「稚内市教育連携会議」を立ち上げ、幼保から小中高大までの連携で課題解決を目指したい。
- ・ 高校からのプロジェクト会議への参加の充実、さらに稚内養護学校からの参加もあり、関係者のつながりがより充実した。地域のネットワークの実践的体制づくりの大きな力になっている。
- ・ 子どもの貧困の連鎖を断ち切るのは、「高校を卒業して自立すること」だと考えている。この問題に対して具体的な一歩を踏み出すためにお力添えをいただきたい。

○研究・協議の進め方について（平間コーディネーターから説明）

- ・ はじめに「研究紀要」担当（代表）である若原先生からの特別報告

- ・ 研究紀要は2部構成になっている。第1部は、昨年の取り組みであるシンポジウムや提言について整理した。
- ・ 第2部は稚内の子ども・若者についての白書として31名の方に執筆をお願いした。ネットワークづくりの基盤になると考えている。
- ・ 今年度は、子どもの貧困の実態把握のための調査活動を行いたい。具体策はみなさんと今後検討したい。

- ・ 5月23日に稚内市教育連携会議を立ち上げ、子どもの貧困を克服するための組織として研究協議を進めることになった。
- ・ 6月23日には、第1回プロジェクト会議で、稚内養護学校、2つの高校さらに大学に4つの地域別ネットワークを意識した委員の選出をお願いした。今回新たなメンバーを迎えることができた。したがって、地区別ネットワークの活動の在り方を研究できる体制ができあがった。
- ・ この後の研究協議では、10月11日の第3回プロジェクト会議も含めて、「18の提言」のうち主に「2. 幼保小中高のライフステージに応じた子どもの支援に取り組みましょう」について各地区ごとの連携体制を作ることによって何ができるのか、仮説を立てて研究協議をお願いしたい。
- ・ 地区別ネットワークの今後の連携を考える場合、『地区別コーディネーター』の存在と役割が大きい。来年度は委員皆さんが地区別コーディネーターとして役割を発揮していただくようお願いしたい。

○全体交流

【東地区】（声問小学校吉崎校長）

- ・ 「18の提言」の2.の⑤⑦について協議をした。
- ・ 課題を抱える家庭は地域の中であって、子どもは互いに関わり合って温かな支援は可能ではないか。それにチャレンジしよう、ということを確認合った。

【北地区】（稚内中央小学校船木校長）

- ・ 東地区と同様に、2.の⑤⑦を中心に協議をした。
- ・ 家庭の支援を考える場合、家庭の状況を掴むことが重要だ。今の子どもは外見ではわからない。家庭環境を掴むうえで、幼保小中のように縦のつながりと、守秘義務の問題はあるが行政など横のつながりも大切だ。

【南地区】（稚内南小学校飯田校長）

- ・ 自己紹介をして、「次回会った時に論議をしよう！」ということにした。4人の出席だったが、それぞれが、困ったときには（助けてくれる）つながりを持っていることを大切にして、今の仕事の内容を紹介を合った。
- ・ シンポジウムでの発言で、稚内高校定時制の長谷川先生の苦勞がわかった。9月5日の南地区ネットワーク会議には、高校からの参加をお願いしている。

【潮見が丘地区】（潮見が丘中学校網谷校長）

- ・ 潮見が丘地区の連携で何ができるかを協議した。
 - ① 潮見が丘地区ネットワーク会議に、今年は幼稚園、大学も参加してもらっている。潮見が丘地区には幼稚園から大学までである地域の特徴を生かして。
 - ② 小学校入学時、中学校入学時など節目に行政の支援制度が見えるようにすることも大切だ。実現したい。
 - ③ 経済問題などでこまり感があった場合、相談できる人を作ることが大切だ。「みんなで考えること」を大切にしたい。

○まとめ（教育長）

- ・ 活発な議論があった。感謝したい。
- ・ 家庭教育であっても情報の共有、つなげていくことは大切だ。行政としても施策に生かしていきたい。
- ・ 集まった情報を相互に交換して細かくして行くことも大切だ。ネットワークの目を小さくしていく取り組みをさらに強めたい。南地区の取り組み（ネットワークに高校も参加）に学びたい。
- ・ 今後も引き続きお願いしたい。

第3回子どもの貧困対策プロジェクト会議（2016.10.11）

○教育長挨拶

- ・ 8月23日のプロジェクト会議、9月14日の教育連携会議で、①地区別のネットワーク会議を中心に活動を進める、②課題の共有化、と教育連携が語られた。
- ・ 先日の稚内北星大学のCOCのシンポジウムがあったが、その中でも教育での地域との関わり、貧困問題が語られた。
- ・ 議会でも、全国的に先駆けた取り組みを進めていると報告している。

- ・ 【資料 3】にもあるように、教育の縦の連携は充実してきている。もうひとつは、行政、福祉、医療など横の連携を考えていかなければならないだろう。
- ・ 貧困問題にメスを入れるのが私の努めだと考えている。

○研究・協議（説明／平間教育相談アドバイザー）

はじめに報告をお願いしたい。

- (1) 子どもの貧困対策シンポジウムについて（加藤教育相談所長）
 - ・ シンポジウムの目的、日時、内容について、特に、今年は松本先生の講演と教育連携会議のメンバーをシンポジストにしたシンポジウムを考えたい。
 - ・ 会場を文化センター小ホールにして、250名を目標にしたい。
- (2) 研究紀要について（若原稚内北星大学准教授）
 - ・ 平成 28 年度からの 2 カ年で、子どもの実態把握のためのアンケート調査を実施し、平成 29 年度には、研究紀要としてまとめたい。

【資料 3】に基づいて説明

- ・ 『18 項目の提言』では、中学校区単位のネットワークで子どもをサポートすること重点施策にすることを呼びかけています。
- ・ 第 2 回プロジェクト会議では、中学校区ごとの子どものサポート体制の在り方や具体策の「地区別プラン」に研究をした。
- ・ 第 3 回も引き続き研究協議をお願いしたい。
- ・ 今後、11 月 16 日に地区別責任者会議を開き、地区別プランをまとめたい。12 月 15 日か 16 日には教育連携会議を開催し、12 月 22 日には、市長に提言書として報告（提出）したい。

○全体交流

【潮見が丘地区】網谷潮見が丘中学校長

- ・ 田澤子ども課長がライフサイクルでの子ども支援をまとめてくれた。研究紀要などで情報提供の手だてを考えると活用できるのでは。
- ・ 潮見が丘地区のまとまりの良さ、幼から大まであることを生かして、町内会（地域）どんなことをしているのか情報交換、交流することを進めたい。

【東地区】林稚内東小学校教頭

- ・ 家庭教育、困窮家庭の支援は大きな課題。守秘義務のことはあるが、子どもを知ることが第一だ。ネットワークや町内会（育成部）と連携していくことが大事だ。
- ・ 就学前からの支援、妊娠期の支援も重要だ。
- ・ 子育てファイルの活用を具体化すること、学校の頑張りを見せるときだ。

【北地区】船木稚内中央小学校長

- ・ 乳幼児期の情報を得て、サポートをどう進めるかが重要だ。長く幼児教育を受けられる施策が必要。幼児教育をサポートすることでは保健師、助産師との連携を、民生児童委員の役割も大きい。
- ・ 高校までどう情報を引き継ぐかも重要。情報管理の課題はあるが。

【南地区】飯田稚内南小学校長

- ・ 南地区のサポート会議が充実してきている。稚内高校定時制の先生、ひかり幼稚園長の出席で広がり生まれた。ネットワーク会議で、教育分野以外のプロジェクトメンバーもおり制度を学ぶことも考えたい。このようなことが（子どもの貧困問題での）コーディネーターを作ることに。
- ・ 小学校時代からのキャリア教育も大事だ。稚内は魅力ある街であることを知る上でも。

○総 括（教育長）

- ・ 『課題は地域にあり、解決する力も地域にある』～行政にも「協働」（いっしょにやろう）というのがあるが、ネットワークと共に進める必要があると感じた。
- ・ 小さな網にして子ども支援を進めることがネットワーク。地区別ネットワーク活動を深化させて子どもの貧困を断ち切ろう。

子どもの貧困 連鎖を断ち切る

子どもの貧困

“全市的”体制で

稚内市 教育連携会議が発足

稚内市教育連携会議（事務局・市教委）が23日に設立された。稚内の子どもの貧困の連鎖を断ち切るため、幼稚園・保育所（園）、小中学校、養護学校、高校、大学など公私立の枠組みを超えて対等・平等に市内の教育を語り合い、連携・協力の和を広げるための組織、メンバーは“全市的連携体制”で、貧困の連鎖を断ち切りたいとしている。（川村竜也）

稚内市子どもの貧困対策本部会議が昨年12月、工藤弘市長に提出した「稚内市子どもの貧困対策に関する提言」の18項目に及ぶ具体的な対策（提言）があり、その一つとして、切れ目のない幼保小中高大の学校連携と一貫体制を目標とする「稚内市教育連携会議」を立ち上げることにしていた。回会議は、事務局の市教委をはじめ、保育園協会、幼稚園協会、市校長会、稚内高校、稚内大倉高校、稚内北星学園大学、社協、市連や各12団体で構成。稚内市の教育・福祉連携の強化をはじめ、子どもの貧困と教育に関する情報交換、各種団体と協働した子どもの困窮や悩みへの連携、協力、地域や保護者と交流・協力を広げる取組みの提唱などを目的と目指す。

子どもの貧困対策本部会議は既に解散し、今後は毎月28日（予定）に「子どもの貧困対策プロジェクト会議」を立ち上げ、回本部会議が示した18項目の対策（提言）についてより

具体的な連携計画を確立。分野・地域・年次別に達成目標と、アクションプラン（戦略など具体的な施策）の研究や実践、検証を行う。このほか、11月24日に子どもの貧困対策市民シンポジウムを開催することになっている。

日刊宗谷（2016年5月25日）

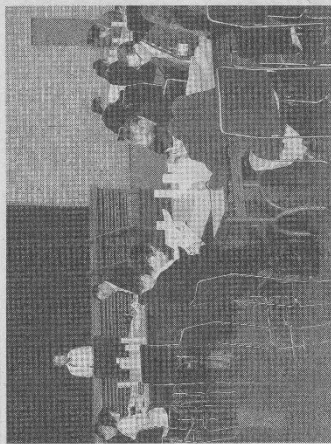
子どもの貧困 連鎖を断ち切る

子どもの貧困

18項目の提言 実施初年度

プロジェクト会議初会合

第1回稚内市子どもの貧困対策プロジェクト会議は28日、総合文化センターで開かれた。5月28日に設立した稚内市教育連携会議で、同日プロジェクト会議を設置すると決めた当初の会合で、関係者が集まり、初会合が開かれた。はじめに、回プロジェクト会議委員に挨拶状を交付したあと、表紙一教育長は「子どもが生まれた環境で、人生を左右されてはならない。貧困の連鎖を断ち切るためにも、皆さんの力ををお願いしたい」と述べ、続いて、コーディネ



第1回稚内市子どもの貧困対策プロジェクト会議

ーターの立間真雄教育「28年度は学びの支援相談アドバイザーがネットワークの充実

を旨とする18項目の提言の、実施初年度と連携し子どもの貧困の連鎖を断ち切る全市的連携体制の確立、強化などを図るために設立した同連携会議の概要を説明。今後はプ

ロジェクト会議を回開くほか、11月に子どもの貧困対策市民シンポジウムを開催することにした。その後は研究協議に移り、全体交流で意見を交わした。回プロジェクト会議は、解散した稚内市子どもの貧困対策本部会議が昨年12月、工藤弘市長に提出した「稚内市子どもの貧困対策に関する提言」の18項目に及ぶ具体的な対策について、より具体的

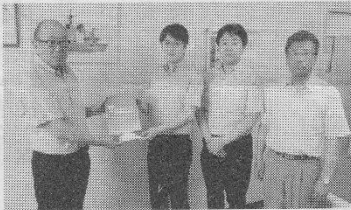
な連携計画を確立。分野・地域・年次別に達成目標と、アクションプラン（戦略など具体的な施策）の研究や実践、検証を行うことになっている。（川村竜也）

日刊宗谷（2016年6月25日）

子ども貧困問題
で教育長に報告

稚内市子どもの貧困
対策本部会議及びプロ
ジェクト会議は1日、
表教育長に、完成した
貧困問題プロジェクト
研究紀要についてにつ
いて報告した。

市では、昨年度から
子どもの貧困対策とし
て、本部会議やプロジ
ェクト会議を設置し、
貧困の現状や教育との
関係などについて調査
を行っており、120
ページに亘る冊子には
貧困対策に関する提言



書やプロジェクトの記
録など昨年1年間に亘
る活動内容のほか、幼
児～大学生までの子ど
もたちに係わる教育関
係者によるレポートが
まとめられている。

稚内市適応指導教室

の曾我部室長、稚内北
星大学の若原准教授ら
から報告書を受け取っ
た表教育長は「次に取
り組むための目安にな
るのでしっかりと対策
していきたい」などと
話していた。

稚内プレス (2016年8月6日)

貧困の連鎖断ち切ろう

市教委 子ども、若者研究成果報告

稚内市子どもの貧困
対策プロジェクト会議
では1日、表純一教育
長に、子どもの貧困対
策本部会議及び同プロ
ジェクト会議が進めて
きた27年度の取組みを
取りまとめた研究紀要
「報告書」「わっかな
いの子ども・若者20
15」を手渡した。

子どもの貧困対策に関
する提言書のほか、同
対策市民シンポジウム、
27年度同対策プロジェ
クト会議など27年度の
取組みが盛り込まれて
いる。

また、市内小学校長
など31人の執筆者によ
る稚内の子ども・若者
レポート集も2部に掲
載。作成責任者の若原
幸範稚内北星学園大准
教授は「多くの参加が
あり心強く、効率的に
作成できた」などと話
した。

表教育長は「作成に
よって次の課題に焦点
を合わせられる。我々
もしっかりと課題に対
応するために、皆で勉
強し合える機会を与え
てくれた。大変感謝し
ている」などと述べた。



冊子を受取る表教育長(左)

日刊宗谷 (2016年8月3日)



子供の貧困解決 地域と協働で

稚内で教育関係者らシンポジウム

【稚内】子供の貧困問題を市民ぐるみで考えるシンポジウムが22日、稚内総合文化センターで開かれた。市内の校長ら教育関係者6人が、貧困家庭対策などについてそれぞれ提言し、市民と情報を共有した。市と市教委が主催。2回目の今年は約220人が参加した。子供の貧困問題の解決策として稚内高の若林利行校長は、教育で貧困の連鎖を食い止める重要性を指摘。「人間形成として教育課程や生徒指導に重点を置きたい」と話した。また市校長会の鎌田正之会長は、虐待の恐れのある子供がいる家庭などを対象に支援する「見守り家庭」が、市内の東地区ではここ10年で20軒増えている現状を説明。「学校と地域の福祉が協働することが重要だ」と強調した。シンポジウムに先立ち

子供の貧困問題を研究する北大大学院の松本伊智朗教授が講演。貧困に悩む子供への支援について「二方向的に支援するのではなく、支援方法などを）子供と一緒に考えることが重要。稚内にはそれができる土壌があると述べた。（山田まきの）

北海道新聞（2016年11月24日）

連鎖を絶ち切る

稚内市 市教委 貧困対策のシンポジウム開く

中と市教委主催の子どもの貧困対策講演・シンポジウムは22日夜、文化センターで開かれ、参加者たちは子供の貧困問題についての情報を交換した。

昨年と同様の貧困対策シンポジウム



には、教育関係者ら市民220人余りが出席。青山副市長が子供の貧困の連鎖を絶ち切るためにも市民ぐるみの支援や、稚内市で進めていきたいなどと挨拶した後、北大大学院の松本伊智朗教授が写真が話しした。貧困によって孤立化する家族や貧困に悩む子供への支援などに対して松本教授は「二方向的に支援するのではなく、子供と一緒に支援方法について考えることが重要であり、稚内にはそれに取り組む土壌がある」と述べた。

引き続き、鎌田正之（東小校長・市校長会会長）、若林利行（稚内高校長）、山下優（天谷高校長）、斉藤吉広（稚内北専大学学長）さんと、市教委のら氏が、それぞれの立場で貧困状況に対する提言を行っ

た。中、鎌田校長が虐待の恐れがある子供がいる家庭を対象に支援する見守り家庭が東地区ではこの10年間で増えている現状を説明し、「学校と地域の福祉が協働することが重要」と述べた。

稚内プレス（2016年11月24日）

連鎖を断ち切る

子どもの貧困 教育・福祉が連携し

稚内市子どもの貧困対策講演・シンポジウム(稚内市、市教委主催)は22日、総合文化センターで開き、教育関係者や一般市民ら約220人が参加。松本伊智朗北海道大学大学院教授の講演や、市内校長ら教育関係者も人によるシンポジウムで市民ぐるみで取り組むべき貧困対策を考えた。子どもの貧困問題を研究している松本教授は「貧困を子どもの視点から考え、一方的に支援するのではなく、

子どもと一緒に(対策などを)考えることが重要」と強調。また「生活はすぐに変わらないが、子どもが『支援をされた』という経験が確実にできる。それが有るか無いかで、その先の人生は違ってくる」と話した。その後は松本教授のほか、斉藤吉広稚内北星学園大学学長、若林利行稚内高校校長、山下稚内大谷高校校長、鎌田正之市校長会会長(東小校長)、表純一教

育長のも氏によるシンポジウム。このうち鎌田会長は「地域の交流行事を通して、不登校だった子どもが個別だ



子どもの貧困対策シンポジウム

が学校に来られるようになってくる。こうした機会を増やすために、教育と福祉の連携が大切」などと話した。若林校長は対策について「連鎖を断ち切るのにはやはり教育、人間

形成として教育課程と生徒指導、地域に関わった教育課程などに重点を置き、稚内高校の学びが地域をつくる好循環を生み出したい」と話した。(川村竜也)

オール稚内で活動に

子どもの貧困対策 工藤市長に提言書

稚内市教育連携会議では28日、市長応接室で工藤市長に対し「稚内市子どもの貧困対策に関する提言書」を提出した。工藤市長は「子育て運動に取組む

稚内市にとって、貧困対策は幅広い市民運動になる。むしろ我々が先頭に立って引っ張っていききたい」と述べた。提言書は同会議代表

委員の鎌田正之氏(稚内市校長会会長)、山下優氏(稚内大谷高校校長)、斉藤吉広氏(稚内北星学園大学学長)のほか、東地区提



工藤市長に提言書を提出する山下氏(右)

言責任者の若崎健一(問小校長)、コトネイタの平間信雄教育相談アドバイザーの5氏が提出。山下氏は「18項目の提言を具現化出来る準備が整い、オール稚内での活動にするため、特段のご配慮をお願いしたい」と話した。

稚内市では昨年5月、子どもの貧困対策本部会議と同対策プロジェクト会議を設置し、貧困が世代を超えて連鎖することのないよう、必要な環境整備と教育機会の均等の推進を目指し、子どもの貧困の現状を調査・研究。今年度からは稚内市教育

連携会議を立ち上げ、北・南・東・潮見が丘の4地区毎に、それぞれの特色や実績に応じた取組みを推進するための研究結果を「四地区ネットワークプラン」としてまとめた。提言は子育てファイ

ル活用推進地区を目標とすことや、生活実態の把握と支援、地域の連携力強化など、地区毎に5〜8項目の取組みなどを掲げ、年明け早々出来る取組みから実行していきたいと考えている。(川村竜也)

日刊宗谷 (2016年12月29日)

日刊宗谷 (2016年11月25日)

地区毎の貧困対策プラン

教育連携会議が市長に提言書

市内教育連携会議の代表委員(鎌田正之東小校長、山下優大谷高校長、斉藤吉広稚内北星大学学長、若林利行稚内高校長)は28日午後、市内市に子ども貧困対策に関する提言書を出した。

市では、貧困が世代を超えて連鎖することのないよう必要な環境整備と教育機会の均等推進を目指し昨年5月「子どもの貧困対策本部会議」と「プロジェクト会議」を設置し、昨年12月に「18の提言」をまとめた。

本年度は新たに、幼保小中高大の連携を契機とする子ども支援



貧困対策プランを提出した山下大谷高校長ら

体制の構築▽南地区では、医療・福祉分野との連携強化を生かしたネットワーク地区になり得ること。高校との連携強化や夢を育てるキャリア教育▽東地区は親の孤立感に着目し「孤育て」させない街づくりを目指し子育てファイル活用推進地区を目指す▽潮見が丘地区は、学園地区の良さを生かした行動連携の「モデル地区」になり得ること。大学までを視野に入れた子ども支援体制づくりが可能な地区であること。これらを重点に取り組んでいくとした。

稚内プレス (2016年12月29日)

先ず試験オープン

地域食卓 東活拠センターで始まる



調理する支援スタッフの女性たち

近年、貧困が様々な事情で全国的に食事がままならない子供たちが増えており、その要因として厳しい経済情勢による家計の困難や保護者の共働きで、子供たちが一人で食事をしたり、満足に食事ができないのを防ぐために全国各地で食卓が開設されている。

そのような背景を含め稚内では民生児童委員として活動している南地区児童部会長の藤本さんと子育てネット「わかホム」の藤谷千賀子さん、稚内北星大学の若原幸範准教授を中心に、子供たちに加え大人暮らしの片寄

った食事を摂る大人も含め地域住民がらっと語り交流出来る場として昨年12月に市内で初めて実行委員会を設立した。

おためしオープンには支援者20人余りが参加し、市内の企業から提供を受けた食材や寄付金から購入した食材を使用し、五目うどんと市産品の品が振る

舞われ、訪れた学童に通う子供たちや地域住民からは、手作りの味を満喫し、午後からは稚内北星大学の学生や稚内定時制の生徒たちと一緒に遊んでいた。藤本さんは「皆さんの協力もあって開設することが出来ました。

今後、誰もがらっと立ち寄れる場所にしていきたい」と話し、今後は、アレルギー対応メニューの事前発表など1年4回開催していきたい」とし、市民や企業の支援協力を呼びかけていきたいとしている。

地域の子供たちの食や成長を支えようとする市民有志の団体「地域食卓」らと(試験オープンした。

藤本英文代表)による地域食卓は28日、東地区活動拠点センターで

稚内プレス (2017年1月28日)

稚内です「子ども食堂」

【稚内】十分な食事ができていない子どもたちに無料の食事や居場所を提供しようと、市内の児童委員藤本英文さん(64)らでつくる実行委員会が、子ども食堂「地域食堂ふらっと」を28日正午から東地区活動拠点センター(潮見3)で開く。子ども食堂の開設は全国的に広まっているが、宗谷管内では初めて。今後、年に数回開催する予定で、実行委は「誰もがふらっと立ち寄り、多世代が交流できる場所にしたい」と意気込む。

(広田まさの)

宗谷で初開催

子ども食堂は数年前から首都圏を中心に全国的に拡大している。共働き世帯の増加や子どもの貧困の深刻化などにより、子どもが1人で食事したり、満足に食事できなかったりするのを防ぐのが狙い。道内では札幌や旭川、帯広などで開設されている。

市によると、市内には共働き世帯が約3800世帯あるという。藤本さんは子育て支援に携わる中で、市内でも親

が食事を作らない家庭や、食事の習慣が身に付いていない子どもがいるなど稚内の実情を見てきた。この経験から「家庭だけでなく地域の力で子どもたちの成長を支えたい」と、市内の子育て支援団体「わかホーム」のメンバー2人と昨年、実行委を立ち上げた。子ども食堂を開くことにした。

28日は正午から午後2時まで、五目うどんなど約50食分を無料で提供する。予約不要で誰でも利用でき、食事だけでなく子どもたちが遊べる場所もある。

実行委、50食提供 「世代交流の場にも」

15502へ。

藤本さん ☎0162・22・

15502へ。

第II部

平成 29 年度 稚内市子どもの貧困対策プロジェクト記録

子どもの貧困連鎖 **STOP** 講習会

資料集



日 時 平成 29 年 8 月 17 日

会 場 稚内北星学園大学

主 催

稚内市教育委員会 稚内北星学園大学 稚内市教育連携会議

- 子育ての街・稚内で『子どもの貧困対策講座』がはじめて実現！

稚内北星学園大学
会場 新館 1301 号室

8/17 (木) 特別講習会のおさそい

子どもの貧困連鎖 STOP 講習会

□ 開会式・オリエンテーション 9:30～9:45



□ 第一講座 9:50～10:30

『ひとりぼっちにさせない北の街を』

講師 表 純一 氏 稚内市教育委員会教育長

□ 第二講座 10:40～11:30

『子どもの貧困と大人の課題』

講師 若原 幸範 氏 稚内北星学園大学准教授



□ 第三講座 11:40～12:30

『誰もが』ひとりぼっちにならない居場所づくり
～ 旭川の事例から

講師 清水 冬樹 氏 旭川大学 幼児教育学科 准教授

★昼食を斡旋します。700 円です。希望者は申し込みをお願いします。

□ 第四講座 13:30～14:20

『日本の現状と対策を考える』

講師 山野 良一 氏 名寄市立大学 社会保育学科 教授



□ 第五講座 14:30～15:20

『地区別コーディネーター』の出番です！



講師 平間 信雄 氏 稚内市教育相談アドバイザー

□ 修了式 15:30～16:00

『地域連携コーディネーター』資格証書が授与されます

- ◆ 主催 : 稚内市教育委員会 稚内北星学園大学 稚内市教育連携会議
- ◆ 申し込み先・お問い合わせ先 : 稚内市教育委員会学校教育課 (23-6519)

 **稚内北星学園大学**
Wakkanai Hokusei Gakuen University

  文部科学省
地(知)の拠点

第一講座

ひとりぼっちにさせない北の街を

講師 **表 純一** 稚内市教育委員会教育長

「ひとりぼっちにさせない北の街を」

稚内市教育長 表 純一

1. 私の履歴（何者かというと）

- ・昭和 28 年（1953）9 月生まれ 63 歳
- ・稚内北小学校 稚内中学校 稚内高校 大学卒業
- ・昭和 51 年（1976）市役所入所
大規模草地・課税課市民税係・下水道課・教育委員会学校教育課
こども課・行政管理課・政策経営室・教育部長・建設産業部長・総務部長
教育長（平成 24 年 11 月）
- ・妻 子供 4 人（社会人） 孫 5 人

2. 私が経験した「貧困と地域の力」

● ケース

小学校 1 年生男児（知的に課題あり＝境界線）

姉 2 人同じ小学校在籍

父＝定職は続かないが仕事はしている パチンコ好き サラ金借金あり

母＝知的に課題あり（重度） パートをしている

○ ケース会議に参加した機関

- ・保険課（保健師）・福祉課保護係（生活保護）・福祉課福祉係（障害者）
- ・児童家庭課（児童福祉）・民生児童委員・主任児童委員・児童館厚生員
- ・市立病院医療相談室／児童相談所・小学校・教育委員会（学校教育課）

3. こども課の誕生（組織改革）

●こども課の主な担当業務

- ・子ども子育て支援に関すること
- ・児童手当及び児童扶養手当
- ・保育の実施に関すること
- ・私立保育所の運営経費の補助
- ・私立幼稚園の運営補助及び幼稚園児への支援
- ・市立保育所及びへき地保育所の運営
- ・児童館の運営
- ・学童保育所の運営
- ・児童家庭相談
- ・ファミリーサポートセンターの運営

●教育相談スタッフ会議のメンバー

- ・教育部長（座長）・教育相談所長・教育相談アドバイザー・スクールカウンセラー・SSW・適応指導教室・こども課・社会教育課・学校教育課

4. ひとりぼっちにさせない北の街を

●稚内市幼保小高大連携会議（教育連携会議）

（目的）稚内市の子どもの貧困の連鎖を断ち切るため、保育所、幼稚園、小学校、中学校、養護学校、高等学校、大学が公私立の枠組みを超えて連携し、PTA／民生児童委員との協力関係を強め、対等平等に語り合い、連携・協力の輪を広げていくことを目的とする。

（構成団体）教育委員会・私立幼稚園協会・私立保育園協会・校長会・稚内高校・大谷高校・養護学校・稚内北星大学・社会福祉協議会・市連P・稚高PTA・大谷PTA

第二講座

子どもの貧困と大人の課題

講師 **若原 幸範** 稚内北星学園大学准教授

子どもの貧困と大人の課題

～稚内市における子どもの貧困対策の意味～

若原 幸範（稚内北星学園大学）

1. はじめに

(1) 論点

- 地域における子どもの貧困対策とは？
 - 地域づくりの問題であり、地域の大人のあり方が問われる課題である
- 稚内市において子どもの貧困対策に取り組むことの意味とは？
 - 子育て運動から出発し、子育て運動そのものを発展する実践となる

(2) 内容

- 子どもの貧困と大人のあり方
- 子育て運動からの出発
- 稚内市における子どもの貧困対策の方向性～子育て運動の拡張～

2. 子どもの貧困と大人のあり方

(1) 稚内市における子どもの貧困問題に対する基本認識

- 子どもの貧困は地域づくりの問題である
 - 子どもの貧困対策というと、困っている子どもがどこにいるか、ということを一先懸命探してですね、この子に何をするかということに目が行きがちなんですけれども、〔稚内では〕 そうではなくて、これはまちづくりの問題として考えておられるんだということが、とても印象深く感じました。（『2015年度稚内市子どもの貧困対策市民シンポジウム』松本伊智朗氏の発言より）※『わっかないの子ども・若者2015』収録。傍線および〔 〕内は引用者。以下の引用部も同じ。
- なぜ地域づくりか
 - 子どもの貧困＝子どもの権利が保障・現実化されていない状態
 - ✓ その社会のなかで子どもの存在が十分に承認されていない＝社会が子どもを排除している状態
 - 子どもの貧困対策＝子どもの権利を回復する実践
 - ✓ 子どもの権利を現実化し、子どもを十分に包摂・包容する社会をつくる＝地域をつくる実践
- 子どもが育つ地域をつくる
 - 子どもが周囲の人びとに守られながら安心して生活し、健やかに成長することができ、ありのままに自由に発言・活動することができる地域をつくる

(2) 稚内市における子どもの貧困の実際

● 事例①：高校中退と支援チーム

——一人の女の子が夜9時ころ連絡をくれました。中学校を卒業して2年間経った女の子です。「先生相談があるんだ」という連絡でした。その子が夜10時に中学校を訪ねてきてくれました。その子は、家庭は生活保護なんですね。高校を受験して入学したんですけどもうまくいきません。中退します。それから、いろいろ自分で苦勞しながら生きてきました。ただ、僕のところに来る前には、「先日、車に飛び込もうと思ったんだ」と、体を冷たくしながら話してくれました。1時間ちょっとです。僕は中学校の教頭をやっているんですが、卒業生がそうやって相談をしに来てくれる。皆さんもどれだけご存知か分からないですが、生活保護の家庭で自分が頑張って働いても全部家庭の収入ということになってしまふんですね。生活保護はその分、減らされていきます。その中で希望も見いだせない。どうやって生きていったら良いんだろうか。(「2015 市民シンポジウム」吉崎健一氏の発言より)

- 高校をドロップアウトし、学校という拠り所を失った貧困世帯の子どもが身近な相談相手や安心できる居場所を持つことは容易でなく、その生活は過酷である
- そのなかで、努力が報われない体験を積み重ねると、子どもの自尊感情が著しく低下し、将来への見通しを持つことができなくなり、希望を見失っていく

——僕はこの子の相談にどうやって応えたら良いのかなと。一人では到底解決の糸口もありません。僕はただ聞くだけです。そこからどんな人に相談したら良いのかなといろいろ考えて考えて、たどり着いて今日があります。その子はそのあと職業訓練学校に3か月通い、当初は支援チーム〔社会福祉協議会、スクールカウンセラー、ハローワーク、生活自立支援センター〕のなかでは絶対続かないのではないかと話もあったんですが、続くか続かないかではなくて、その子を信じて支援しようと。3か月通って無事卒業して、資格取得も目指して、今もうすぐ面接試験を受けようとしています。まだ10代なんですよ。こういう子たちに稚内の教育連携、連携をキーワードにいろんな人たちが力合わせできるんだということを僕は経験したので… (同前)

- 子どもがかろうじて保持していた「信頼できる大人」との“つながり”から、支援チームが組織された
- 信頼できる大人たちとの関係性に包まれることによって、再び希望を見出すことができた
- ✓ 子どもの貧困対策においては大人の役割・協働が重要である

● 事例②：定時制高校の経験から

—貧困とか定時制の彼らを見ていると、すさまじいような環境だったり過去があったりしますので、どうしても先を見通す力がすごく弱いと感じることが多いんです。(中略)ある生徒は正社員並みの待遇、お金は別なんですけども福利厚生的なことを考えるとすごく良いところに勤めたんですけども、友人が行っている時給が高いバイトの方に目が行ってしまって、後々考えると間違いなくそのの方が良いんですけども、今日の前の時給、目の前のことを考えてやめてしまったということもありました。(中略)進路講話ですとか進路指導のなかで、そういうような非正規社員・正規社員の話はやるんですけども、どうしても「先生の言っていることは分かるけど、まあ何とかなるよ」とか、ある女の子は「いざとなれば女は何とでも食っていけるから」というような考えになってしまう子がいる(中略)ただ、彼らが悪いわけではなく、正しいロールモデルと言うんでしょうか、模範になる行動であったり正しい模範的な行動が少ないのが原因だと思う…(『2015 市民シンポジウム』長谷川裕之氏の発言より)

—貧困の連鎖を止めるということを考えるときには、若年層の妊娠にも目を向けていかなくちゃいけないかなと考えています。(中略)若い結婚をしていくと、どうしてもやはり最終的にはシングルマザーになってしまったりして、また貧困に陥っていくということを目の当たりにしてきました。(中略)生きる希望とか気力を無くしてしまいますので、年頃になっていくとそういうことを相手に求めて異性に出会って行って、どうしても利己的な気持ちになってしまって、男の言うようにお金を渡してしまったりとか、愛情が欲しいから言いなりになってしまったりとかという形で妊娠して行くということがあります。彼らはなかなか正しいロールモデルが持てませんから、生まれた子どもたちも同じような形で育っていく。(同前)

- 貧困状態にある人間(子どもも大人も)は、その日その時をどう生きるかに精いっぱいにならざるを得ない
- 貧困の連鎖の内にある子ども・若者にとっては、将来を見通して適切な選択をするためのモデルとなる身近な大人が存在しない(身近な大人が適切なモデルたりえない)ことが多い

(3) 子どもの貧困問題の本質的課題

- 子どもが育ち、自立していく過程において不可欠な「大人との関係性」の質的・量的な不足が本質的課題のひとつである
 - 子どもの貧困とはすぐれて大人のあり方の課題であり、子どもの貧困対策においては大人のあり方を根本的に問い直すことが求められる
- 稚内市において、子どもを取り巻く大人のあり方を問い続け、子どもが育つ地域づくりに取り組んできたのが「子育て運動」の実践である

3. 子育て運動からの出発

(1) 子育て運動の特徴

- 1978年の非行問題への取り組みを契機にはじまり、現在へ続く家庭・地域・学校の力合わせによる市民ぐるみの子育て運動
- 市長をトップとし、市内のあらゆる教育・子育て関係団体が参加する全市レベルの「子育て推進協議会」と、地域条件の差異をふまえた中学校区を基本単位とする地区レベルの「地区子育て連絡協議会」、より細かい町内会（自治会）レベルの「子育て連絡会」という重層的な組織体制
- 主な活動（毎年継続しているもの）
 - 全市（子育て推進協議会）
 - ✓ 稚内市教育講演会／全市子育て運動交流会
 - 地区（地区子育て連絡協議会／子育て連絡会）
 - ✓ 地区子育て講演会／地区子どもフェスティバル／その他、地区独自の活動

(2) 子育て運動の成果

- 全市レベル・地区レベル・地域レベルの重層的な組織化により、地域に根差した持続的な運動として定着した
- 学校・教師を核とした「親育ち・教師育ち・大人育ち」のための学び合いの活動が定着した
- 「子どものため」で一致して、立場を越えて力を合わせることができる地域文化が醸成された

(3) 子どもの貧困と子育て運動

- 子育て運動が最初に向きあった非行問題の背景には地域経済の悪化＝地域の大人の貧困化があった
- 子育て運動は直接には「子どもの育ち」を支える実践であるが、その内実では、根本課題として子どもを育てる・教育する側に立つ大人の貧困に向きあわざるをえない

——稚内市では、「子育て」は「親育ち」「教師育ち」という「大人育ち」の営みでもあるという視点を大切に、『子育て運動』を進めてきました。市民ぐるみの「呼びかけ合い」「語り合い」「気づき合い」「育ち合い」を大事にしてきました。困った子は「困っている子」、その背後には「困っている親」がいます。そこに手をさしのべる必要があります。そんなことから地域・学校・関係機関などのつながりを強め、サポート体制を作り出し、具体的な支援を進めてきました。（『わっかないの子ども・若者2015』第Ⅱ部5(1)菅野剛氏レポートより）

- 「困っている子」の背後には「困っている親」がいるということは、「子どもが困っている地域」は「大人が困っている地域」である
 - 教育とは「自然生長的な形成の過程を望ましい方向に向かって目的意識的に統禦するいとなみ」である（宮原誠一・教育学者）
 - ✓ 【超訳】子どもは自分が置かれた環境で社会的生活を送る中で、自然と成長していくものである。社会には、そんな強い人間形成力があるのだ。その中で、教育にできることは、子どもが豊かに育っていけることを願って望ましい環境を整えることである。
- 子どもを取り巻く地域のあり様・大人のあり様は、環境因子・成長モデルとして、子どもに対して強い形成力を持つ
 - 子育て運動は、子どもにとって望ましくない環境である「地域の貧困＝大人の貧困」を克服すべき課題とせざるを得ない
 - ✓ 具体的には、子どもを取り巻く大人の関係性の不全・欠如、大人の側の子育て・教育に関する力量の潜在化・未形成が課題になってきた
- 子育て運動の実践は、家庭・地域・学校の垣根を越えた、子どもを取り巻く大人の連携構築＝社会関係の変革＝地域づくりを進めてきた
 - 子どもを真ん中におき、子どもたちを取り巻いている「親育ち」「教師育ち」「大人育ち」を目指す「学び合い」「力合わせ」を追求し、子どもを育てる側の大人の側の力量形成と関係性の再構築に取り組んできた
- 稚内市における子どもの貧困対策は子育て運動から出発する

——経済的格差と子どもの貧困は、子どもの生きづらさとなって表れています。同時に、大人社会の疲弊が、子どもたちの人間関係づくりにも影響を与えています。30年以上続いている「子育て運動」を基本に、子どもたちを取り巻く環境をより良くしていくための大人の知恵の出し合いが求められています。

（『わっかないの子ども・若者2015』第Ⅱ部1(2)①大島朗氏レポートより）

4. 稚内市における子どもの貧困対策の方向性～子育て運動の拡張～

(1) 子どもの貧困問題の深化と子育て運動の臨界

- 現代の子どもの貧困は、従来と質的に異なる困難な課題を示している
 - 昔から貧困はあったんですけど、特に子どもの貧困ということが近年、この10年くらいでしょうか、大変深刻になってきました。それがなぜかということで良く語られるのは、やはり景気が悪くなって、経済のパフォーマンスが悪くなってきたということが一つあります。（中略）もう一つは子どもを育てていることが、家族の方に負担がかかることが多くなってきた。（中略）この2世代くらいで起こったことは、単に核家族化といよりも、親族網の急速な縮小と、地域の関係の希薄化であります。そうすると、昔は親族とか地域で子どものことに多少関わっていたのが、全部家族だけになってきます。（中略）そうすると、お金を出すということも含めて、親に対する負担が大きくなればなるほど、（中略）親の状態がストレートに子どもに跳ね返りやすくなってきている。おそらく、景気が悪くなってきただけでな

くて、親の状態がストレートに子どもに跳ね返りやすくなってきているので、子どもの方にいろんな影響が出やすくなってきている…（『2015 市民シンポジウム』松本伊智朗氏の発言より）

- 子育て運動の長年の努力をもってしてもなお、地域の子どもの貧困が深刻化しているということは、子育て運動の無力を意味するものではない
 - 子ども・子育てをめぐる課題が質的に変化し、子どもの貧困問題として現れているのであり、子育て運動にも質的な転換が求められる

(2) 子育て運動の拡張・発展としての子どもの貧困対策～課題・対象・主体の再設定～

- 課題：子どもの学習権保障（憲法 23 条・26 条）から生存権保障（25 条）への拡張
 - 従来の子育て運動の直接的課題は子どもの学ぶ権利、適切な教育・子育てを受ける権利を保障するという教育的課題にあったが、現在は子どもの貧困という教育以前の福祉的課題へのアプローチが求められる

✓ 基本方向：教育・医療・福祉の連携
✓ 実践展開：地区子ども支援ネットワーク、地域医療を考える稚内市民会議など
- 対象：児童・生徒期から乳幼児期・青年期への拡張
 - 従来の子育て運動の直接的対象は学校（特に小中学校）に通っている世代の子ども（家庭）だったが、子どもの貧困対策においては世代間連鎖の問題を含め、より広い世代を対象にする必要がある

✓ 基本方向：幼保小中高大連携
✓ 実践展開：教育連携会議、子育てファイル、地域企業や就労支援機関との連携など
- 主体：職員主体から市民主体への拡張
 - 従来の子育て運動の直接的主体は教職員や行政職員であったが、子どもの貧困のように社会的課題が複雑多様化し新しい課題が次々に現れてくる現代社会においては、時代の変化に敏感で柔軟で新しい発想と実践力を持つ市民団体・個人（NPO やボランティアなど）の積極的な参加が求められる

✓ 基本方向：地区内連携のコーディネート、市民団体の育成（社会教育）
✓ 実践展開：地域連携コーディネーターの養成、地域食堂ふらっと、子育てネットわかホームなど

第三講座

「誰もが」ひとりぼっちにならない居場所づくり

～旭川の事例から

講師 清水 冬樹 旭川大学准教授



「誰もが」ひとりぼっちにならない居場所づくり 旭川市の事例から

旭川大学短期大学部幼児教育学科 清水 冬樹
旭川おとな食堂



1

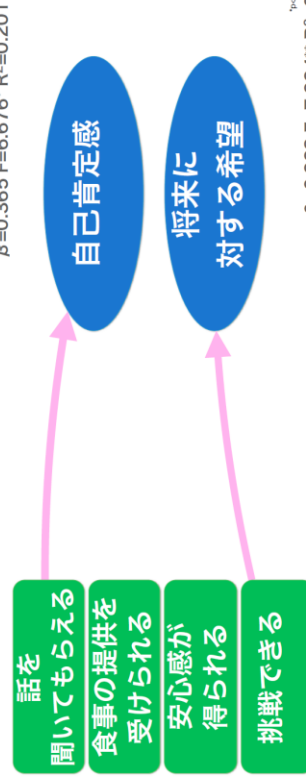
今日のお話の順番

1. 自己紹介を兼ねた私の失敗談
2. 初めての子ども食堂
3. 旭川おとな食堂の役割
4. 「誰もが」を再考する

2

子どもの居場所づくりの必要性とその効果

学習支援の場の役割



$\beta = 0.365$ $F = 6.676^*$ $R^2 = 0.201$

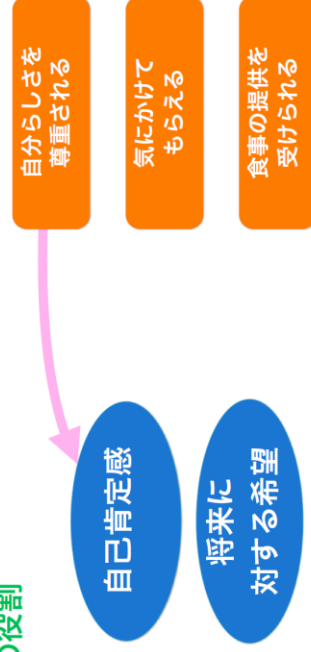
$\beta = 0.328$ $F = 7.934^{**}$ $R^2 = 0.201$

平成27年度 厚生労働省 子ども・子育て支援推進調査研究事業 課題12 「東日本大震災による被災児童等に対する支援に関する研究」報告書より抜粋
旭川北高等学校

38

子どもの居場所づくりの必要性とその効果

学校の役割



$\beta = 0.421$ $F = 12.180^*$ $R^2 = 0.235$

平成27年度 厚生労働省 子ども・子育て支援推進調査研究事業 課題12 「東日本大震災による被災児童等に対する支援に関する研究」報告書より抜粋
旭川北高等学校

39

旭川の子どもたちの実態

ひとり親世帯

31.0% 平成27年10月1日現在、国勢調査結果から1%は18歳未満の子ともがいる世帯における割合

9.6% 全国平均は
平成27年度 国勢調査結果から

中絶率

16.3% 平成27年度現在 旭川市子育て支援部母子係継続担当からデータ提供

平成25年度現在全国平均は**7%**
厚生労働省衛生行政報告例の概況から

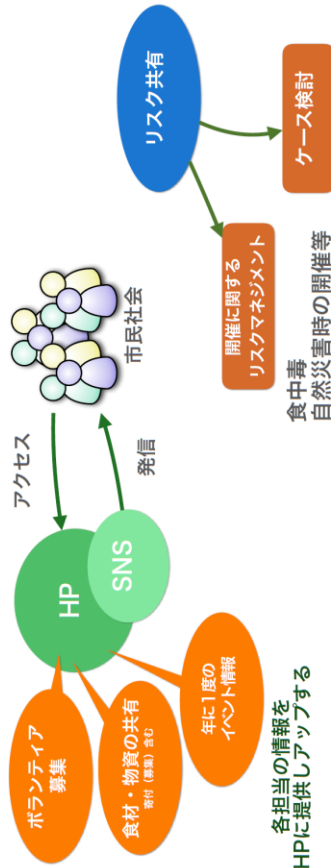
子育て世帯の生活保護率

32.7% 平成29年5月1日に現在、旭川市は18歳未満の子ともがいる世帯、沖縄県は20歳未満の割合

平成26年3月現在沖縄県は**23.8%**
http://www.e-cas.go.jp/okawa/2/keisei-hokoku/saiyou/okawa_kodomo-joumu.pdf
国勢調査ならびに旭川市からデータ提供を受け算出

旭川は食堂

63



各担当の情報をHPに提供しアップする

情報とリスクの共有
関係者のみ
当面はクロスSTの開催
SVとして
児相・子総相の招聘(したい)

65

旭川おとな食堂

ミッション

私たちは、すべての子どもたちが今を大切にし、未来に対する希望を掴み取ることができるとともに、市民としてできる支援、具体的には子ども食堂や学習支援、プレーパークなど子どもたちの命と向き合うことができるとともに多様な子どもたちの居場所づくりを促進し、おとなたちもつながり合う地域社会を、この旭川・道北地区に作り出します。

手段

居場所づくりに必要な物の共有

支援に関する勉強の場

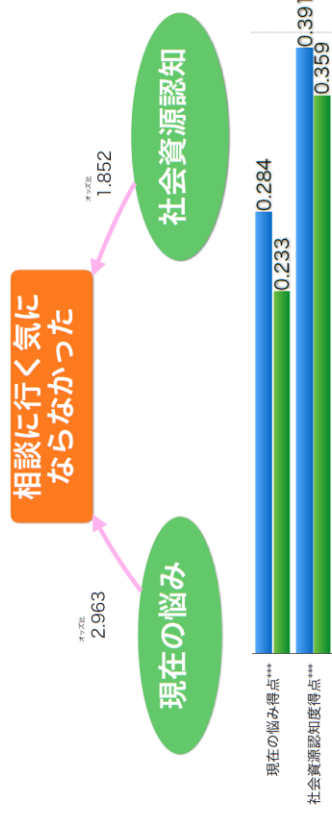
リスクマネジメント

居場所づくりの啓発

旭川は食堂

64

困っている人たちがほど、相談にはいかない

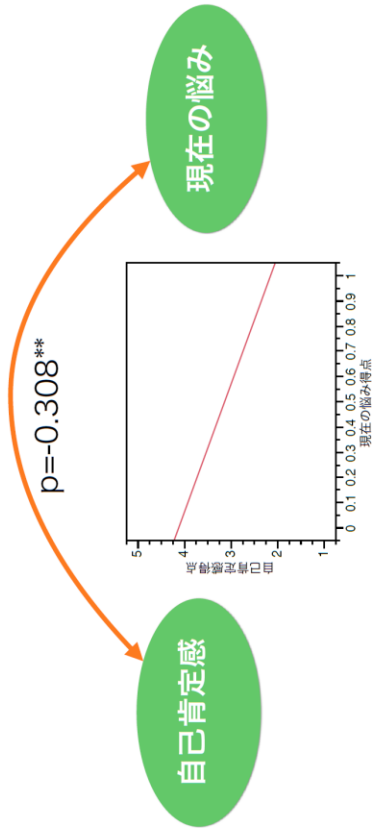


調査時期 (2018.4.8調査) 「利用」とつながらぬ母子家庭の母親にのみ、自治体職員における2次分析を通じて、「福祉社会関係研究」

旭川は食堂

66

困っている人たちほど、相談にはいかない



清水本輝 (2016) 文献「性別別、とつながらない母子家庭の母親たちへの本質的悩点、自治体職員における2次元分析を通じて」、『福祉社会開発研究』旭川大学

3.旭川おとな食堂の役割

子ども支援の3大原則

総合的

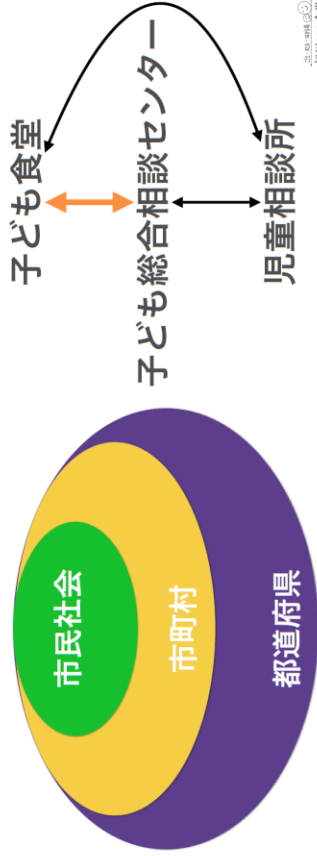
継続的

重層的

旭川大学
旭川おとな食堂

3.旭川おとな食堂の役割

重層的



旭川大学
旭川おとな食堂

ご清聴ありがとうございました

ご質問等は fuyuki124@me.com でもお受けします

旭川大学
旭川おとな食堂

第四講座

日本の現状と対策を考える

講師 **山野 良一** 名寄市立大学教授

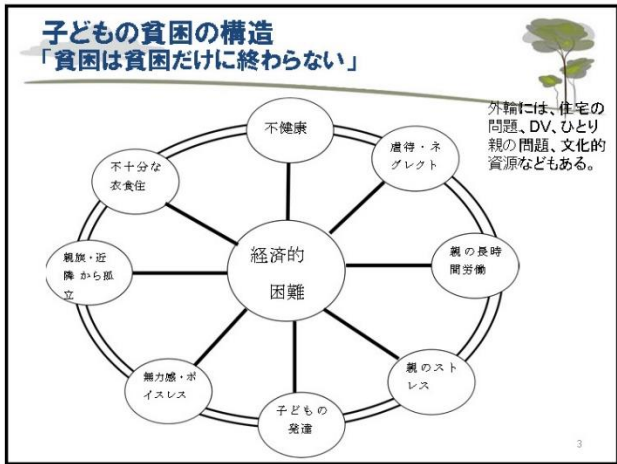
稚内市 50分

「子どもの貧困連鎖STOP講習会」 日本の現状と対策を考える

名寄市立大学教員
元神奈川県児童相談所児童福祉司
「なくそう！子どもの貧困」
全国ネットワーク世話人
山野良一

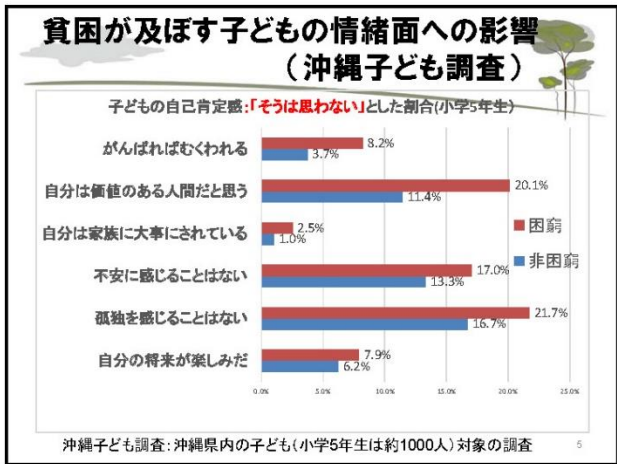
今日の主なテーマ

- 子どもの貧困とは？
「貧困は貧困だけに終わらない」
- 日本の子どもの貧困をどう考えたらよいか
- 卒業クライシスから見たもの-教育費の観点から
- 子どもの貧困解決に向けて
子どもの貧困対策法・大綱について
モデル条例案や沖縄の動きから考える



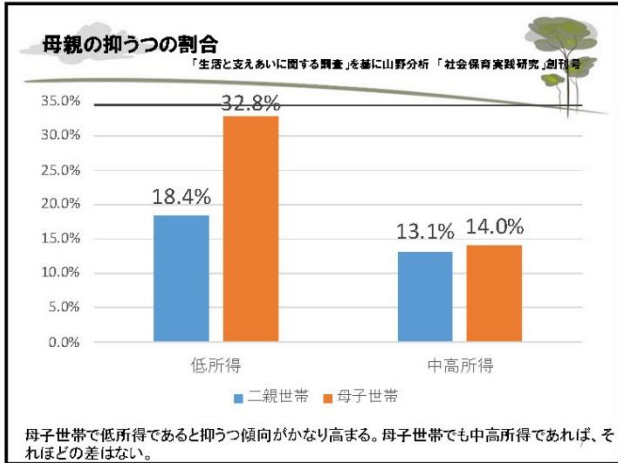
沖縄子ども調査

- 小学校1年の保護者、小学校5年生の子どもと保護者、中学2年生の子どもと保護者に対する学校通しのアンケート調査。
- 全県下、5圏域の子ども人口比に合わせたサンプル調査(回答率約70%)
- 各学年1000人ぐらいのサンプル数
- 保護者の所得によって貧困か貧困でないか分ける。
- 約30%の貧困率(税務調査によっても)



小児科医・和田浩先生の言葉 「子どもの貧困ハンドブック」

- 貧困を抱えた親子は貧困だけを抱えているわけではありません。虐待、家庭内暴力、一人親、外国人、慢性疾患、精神疾患、依存症、発達障害、不安定雇用、若年出産など。私たちにはこうした点はよく見えるのですが、その背景に貧困があるという点が見えにくいのです。
- 私たちの中には「貧乏だけど健気な親子」というイメージがあり、そういう場合には自然に援助してあげたくなります。そうした健気な親子も多いのですが、そうでない場合も多いのです。

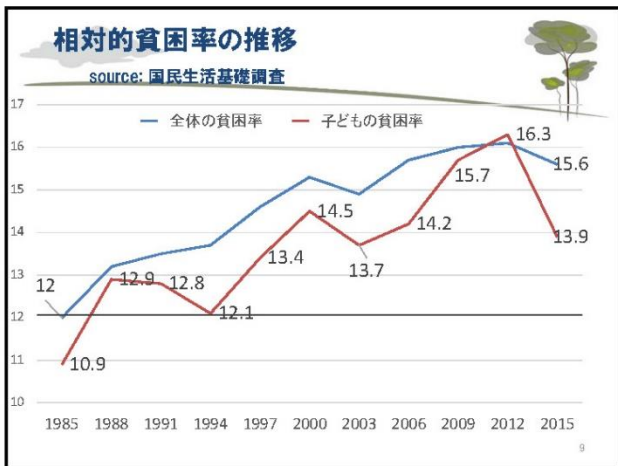


2.日本の子どもの貧困をどう考えたらよいか

日本の子どもの貧困問題の特徴

1. 継続的な貧困率の上昇
2. 貧困家庭における就労率の高さ (ワーキングプアの多さ)
3. ひとり親家庭の貧困率の高さ
4. 母親(女性)の貧困
5. 所得再分配機能の課題
6. 教育費などの私費負担分の高さ

*詳細は、拙著「子どもに貧困を押しつける国・日本」光文社新書を参考にしてください。

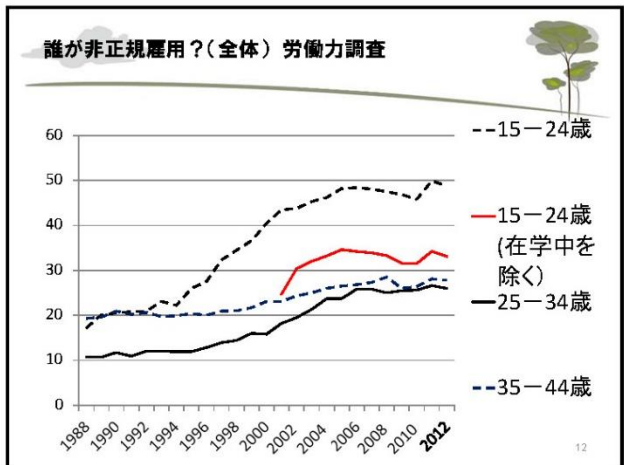


最新の子どもの相対的貧困率の発表 (H29年6月)

- 子どもは、13.9%。全体の数値は、15.6%。前回(2012年)の子どもの貧困率は16.3%だったので、2.4%の改善。
- 7人にひとりの子どもが貧困、日本全体では人口規模で約300万人もの子どもたち。30人クラスには4人が貧困。
- 改善の理由は、ひとつは景気の改善とされる。
- 全般的には高い水準が続く。その原因のひとつは、親たちの非正規労働化・低所得化

子どもの貧困はなぜ深刻化したのか？を問うことは非常に重要

- 不況のせい
- 労働の問題
 - 賃金の低さ
 - 非正規雇用の問題
 - ⇒労働問題をまず改善、従として困った子ども・家族の支援
- 支援の少なさ
 - 現金給付(児童手当・児童扶養手当...)
 - 現物給付(教育費・保育料...)
 - ⇒まずは、子ども・子育て施策を充実させることにプライオリティが置かれるべき



子どもの相対的貧困率の求め方

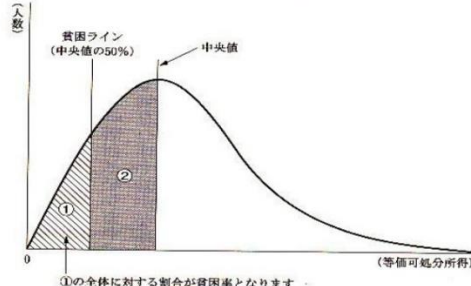
- 世帯の可処分所得を求める
*可処分所得(手取り所得)
=家族の給料(税引き前)
-(税金+社会保障料)+社会保障給付金
- 1を世帯の人数で調整する→一人当たりの額にする
- 2をひとりひとり並べ、その中央値(真ん中の人の金額)の半分を貧困ラインとし、それ以下の世帯に属する子どもの割合。

○親子二人で173万 親 月 15万足らず
子三人で211万 親 月 18万足らず
子四人で245万円 月 20万あまり
(2011年)

13

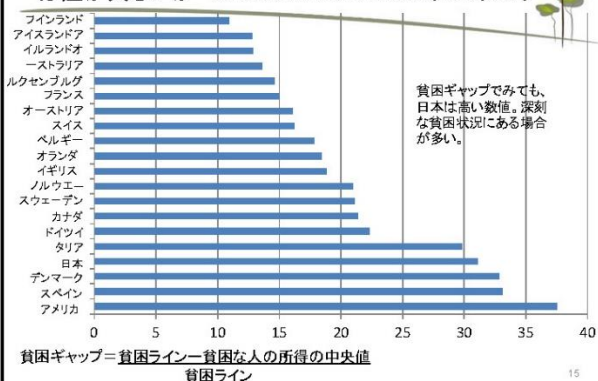
一人あたりの可処分所得 (等価可処分所得)の概念図

図表1-3 等価可処分所得の分布の概念図



14

貧困ギャップ: 貧困な人の所得の中央値と貧困ライン は差が大きいか source: UNICEF(2010) Measuring child poverty



15

貧困な子どもを持つ家庭の所得の中央値

- 親子2人の世帯では、年額で約122万円程度、月額で10万円あまり
- また親子4人の世帯でも、年額で176万円、月額で15万足らず
- この額からはすでに税金等は除かれています、児童手当、児童扶養手当はすでに含まれた額。
- そうした子どもたちが、**貧困な子どもの約半数に及んでいる。**

16

山野(2014)

「子どもに貧困を押しつける国・日本」

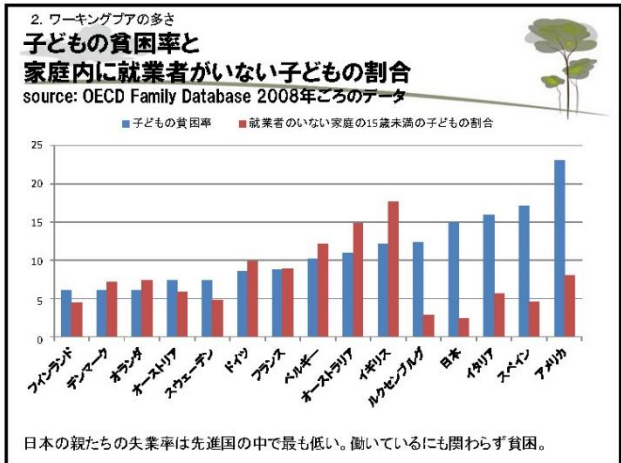
- さらに、現代の子どもたちは消費社会に暮らしています。リッジが指摘するように、低所得家庭の子どもたちも他の子どもと同じように消費文化に染まっており、ブランドものの衣類や流行のアクセサリーを身にまといたいと望んでいます。それは、いじめや差別から身を守るためにも大切であり、仲間集団に溶けこみ自尊心を保つ手段でもあるからです。
- 現代の日本において、人並みのおしゃれができないとか、修学旅行に参加できない子どもや若者は、周りの人は普通にそうした経験ができるのに、自分ひとりだけが周囲とは違う存在として取り残されてしまうという感じになってしまいます。そこでは、貧困というだけ、必要なものが買えないというだけでいじめや差別が生まれるかもしれませんし、自分が貧困であること、お金の困っていることを他の人に知られたくないのだと思います。さらに言えば、その結果として、友人などとのつながりが切れたり孤立しがちになり、本当にひとりぼっちで貧困に陥ってしまうのです。



貧困と貧乏 『貧困児童:子どもの貧困からの脱出』 (加藤彰彦)

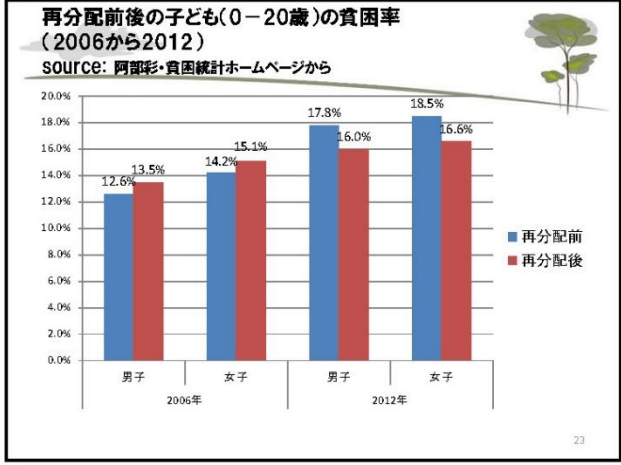
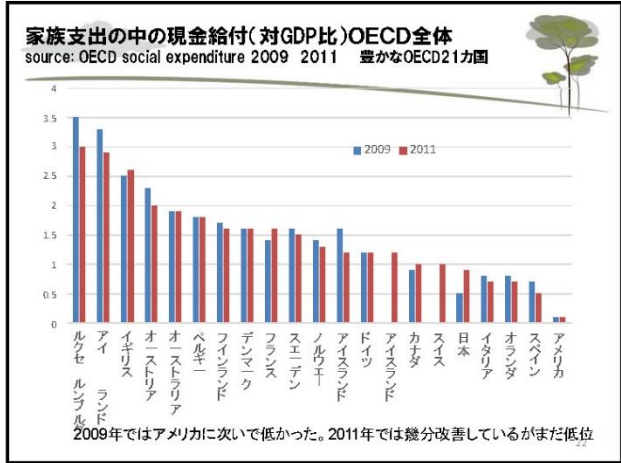
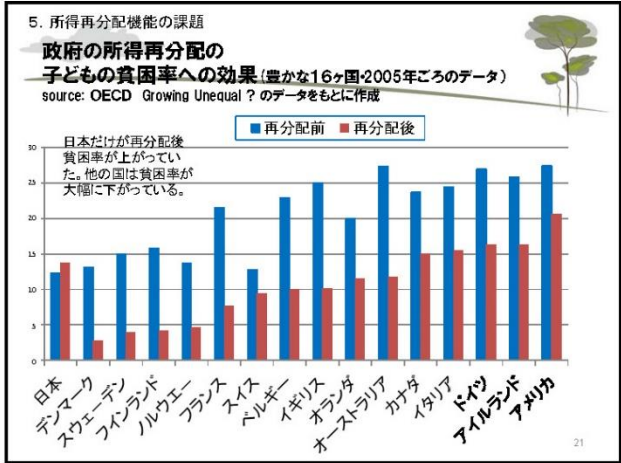
- ()には、同じような仲間がいて互いに支えあい、助け合っていくイメージがある。つまり、金はないが人間関係があり、何とかなっていくというプラスのイメージである。
 - ()には、経済的、財政的な貧しさを土台にして、その人を支える人間関係や支援者がいないための孤立感も付随していると感じる。
- ★「苦しい、辛い、助けてといえない社会に、いつの間にか私たちは生きている」
- お金にとらわれること自体が問題なんじゃないか(貨幣への疎外/貨幣からの疎外) 見田宗介
 - 消費社会、市場原理が進行していくと、...

18



2011年全国母子世帯等調査

	母子世帯	父子世帯	児童のいる世帯全体
就労率 (%)	84.4	92.3	
従業上の地位 (%)			
<small>働いている場合の内数</small> 正規従業員 派遣・パート その他(自営など)	40.2 51.9 7.9	69.3 9.9 20.9	
親自身の平均就労収入	181万円	360万円	
親自身の平均収入	223万円	380万円	
平均世帯収入	291万円	455万円	658万円



3. 卒業クライシスから見たもの

「卒業クライシスって何?」(2010年)

- 主に、この春高校を卒業する生徒たちが直面しているさまざまな危機のことです。今年は就職内定率が前年より大きく下がり、働きたくても仕事がない、かといって進学もままならない、といったことが社会問題化しています。中でも最も懸念されているのは、不況による親の収入減で学費を滞納して卒業式に出られなかったり、卒業資格が得られない生徒が多いのではないかと問題です。(毎日新聞2010年3月2日)

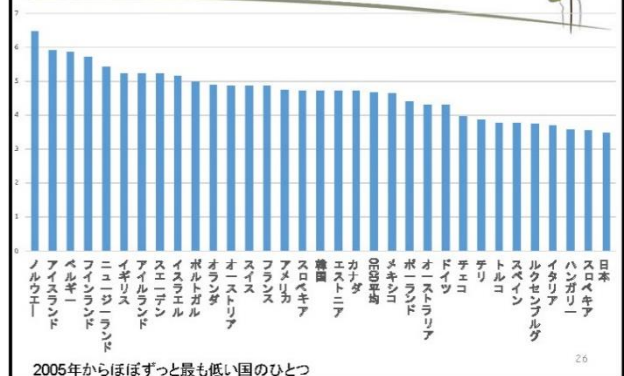
国際人権規約A規約13条

- (b)種々の形態の中等教育(技術的及び職業的中等教育を含む。)は、すべての適当な方法により、特に、無償教育の漸進的な導入により、一般的に利用可能であり、かつ、すべての者に対して機会が与えられるものとする。
- (c)高等教育は、すべての適当な方法により、特に、無償教育の漸進的な導入により、能力に応じ、すべての者に対して均等に機会が与えられるものとする。
- 批准していない(留保していた)のは、日本とマダガスカルだけだったが、ようやく2012年秋に日本は留保撤回した。

高等教育は、この場合、大学、短大など、中等教育(高校)の授業料無償化(公立)にあわせて批准したが、高等教育は奨学金制度のわずかな改善を除くとほとんど改善はない。

OECD公財政教育支出(対GDP比) OECD全体

source: 2015 Education at a Glance table B2.3 より作成 データは2012年のもの



先進国の中で一番大学に行きにくい国・日本

(Global Higher Education Rankings 2010: Affordability and Accessibility in Comparative Perspective)

- アメリカ、オーストラリア、イギリス、日本など先進国とメキシコ、ラトビアなど中進国の15か国の調査
- アメリカの学費は高いが、生活費を含めたり、奨学金を考慮に入れたりすると、日本の場合、アメリカ平均以上のコストになる(1人当たりの所得の中央値比)
- コスト(1人当たりの所得の中央値比)では、メキシコに次いで2位
- 給付型の奨学金がほとんどないのは、日本だけ。
- 税金による補助も決して多くない。
- 結局、学生たちの自己負担分の割合の大きさは、先進国で1番。

過重な教育費負担

(2011「文部科学白書」より) 家族依存社会と自己責任論

高等教育(大学等)費の家計負担の割合

(日本)	51%
(アメリカ)	33%
(イギリス)	27%
(フランス)	10%
(デンマーク)	3%

- 家族依存社会: 教育費などの公的負担が少なく、家族の経済力によって子どもの進学機会などが左右される社会。

- 貧困問題の自己責任論: 貧困の原因を、個人の努力不足や怠惰な生活からくるものとする。

子供の未来応援基金(国民運動)

- 草の根で支援を行っているNPO等に対して支援を実施
- 生きる力を育み貧困の連鎖を断つ場の提供を検討



寄付金をはじめとする企業や個人等からの提供リソースを基金として結集し、「未来応援ネットワーク」事業等を実施する。

★NHKの報道によれば、この1年間で合わせて個人、企業から6億9155万円が集まった。しかし、この基金にNPOなど535の団体が求めた支援金は18億3000万円で、寄付額の2.5倍以上。支援するのは86団体にとどまる見通し。

子どもの貧困対策推進法および大綱の課題(山野の個人的な見解として)

- 全党一致で成立、「貧困」の名がついた初めての法律
- 当事者の声が届いた法律
- 子どもの貧困問題を世の中に周知させるには、活用できる法律(例:自殺対策基本法)
- 課題も多い
 - 数値目標が盛り込まれなかった。
 - 教育に偏りすぎている。
 - 保育、医療など乳幼児期に関わる点がほとんど触れられていない。
 - 市町村の役割は?
 - 国主導の動き、市民主体のものではない。

子どもの貧困対策:自治体の役割

(1)支援の充実

- 個別支援の充実: 必要なケースの把握、社会資源にどうつなげるか
- ネットワークの構築: 個別支援の充実のための礎
- NPOなど民間団体の支援

(2)自治体の体制作り

- 社会的な合意形成、周知
- これまでの施策、相談体制の改善
- 新たに必要な施策づくり(居場所作り、SSWr)
- 実態調査
- 計画策定
- 評価

(3)さらに

- 条例作り
- 国などへの要望

31

新たな施策とこれまでの施策の見直し

- これまでの支援の見直し
 - 窓口対応の問題はないか
 - 縦割りになっていないか
 - 困っている人の気持ちに寄り添っているか
 - 現在ある、子ども関係の社会資源は十分なのか(保育所・学童保育・児童館・学校……などなどの充実)
- 新たな施策
 - 調査、計画策定、指標、評価
 - 居場所作り(子ども食堂)、SSWr
 - NPOの支援
 - 条例作り

32

モデル条例案から考える

日弁連法務研究財団
子どもの貧困対策推進条例 研究班

- 日弁連弁護士、「なくそう!子どもの貧困」全国ネットワーク、豊島子どもwakuwakuネットワークなどとの協働
- 各自治体で子どもの貧困対策を推進するに当たり、制定されるべきモデル条例案を策定する。

★条例制定により期待される効果

- 貧困の中にある子どもの支援は、子どもと保護者の暮らしと気持ちの安定につながります。子どもの支援のために自治体と地域住民が協力することは、子どもと保護者が暮らす地域のつながりを強めます。
- 子どもの貧困対策により、貧困の連鎖を防ぐことができれば、未来の納税者が増えることになります。
- 貧困対策の充実、住民みんなにとって、いざというときの安心になります。貧困対策が充実すれば、子育て世帯が住みたい町になり、少子化を防ぐことができるでしょう

33

モデル条例案の内容 (自治体でやるべきことが盛り込まれている)

- 究極目的:子どもの権利の保障
- 早期発見
- 市区町村、相談機関、子どもに関わる機関等の責務
- 子どもの貧困対策行動計画
- 指標・改善目標
- (毎年1回の実態調査
- 子ども・保護者等の声を重視すること
- 民間団体の支援・地域の担い手の育成
- 相談体制
- 評価・検証

★詳細は、日弁連法務研究財団 子どもの貧困対策推進条例 研究班 窓口 東京パブリック法律事務所 飯田 健太郎 弁護士 「子どもの貧困ハンドブック」に連絡先など情報あり

34

相談体制(子どもの貧困対策推進モデル条例 報告書)

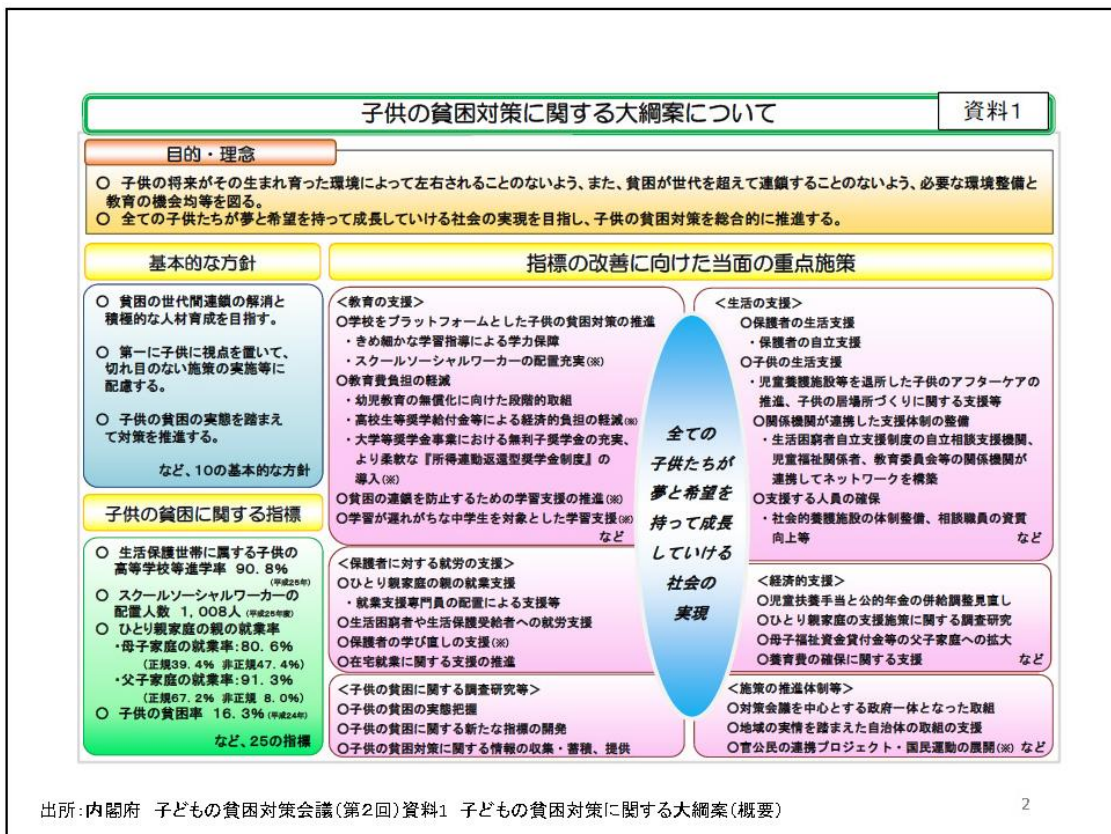
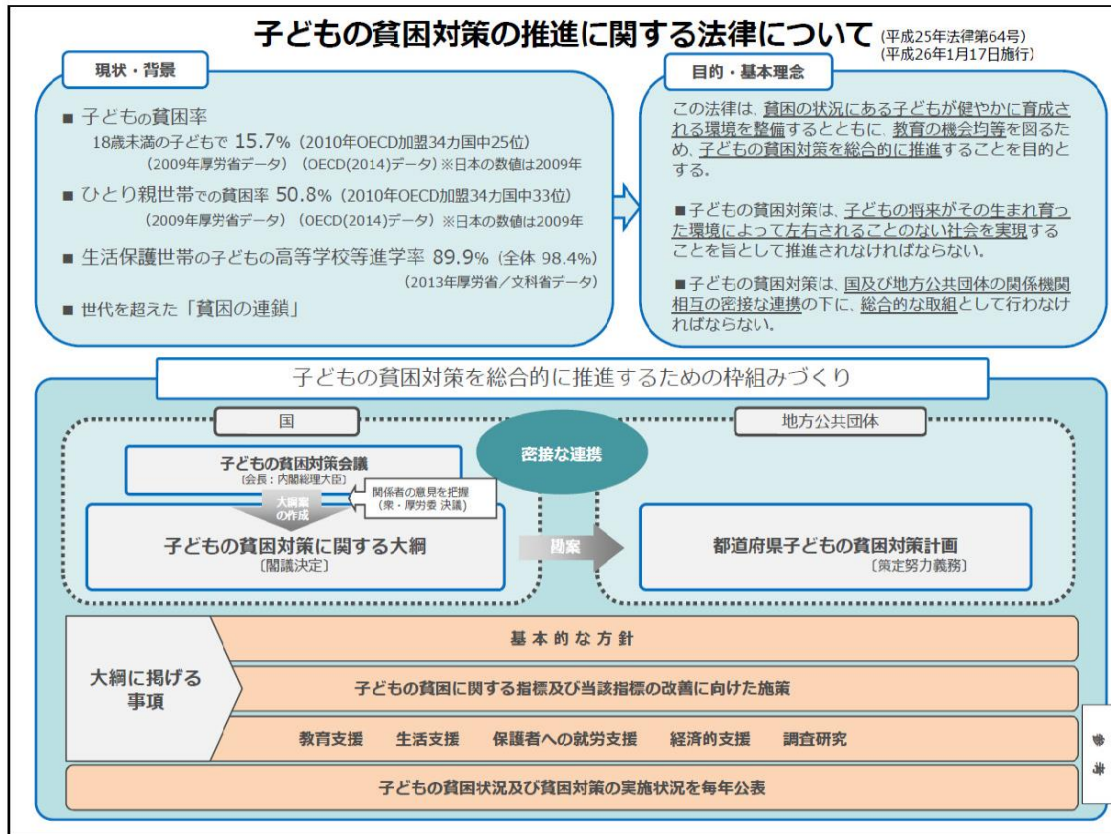
助言・教示義務

- 次に、相談者はすべての制度を知らないのが通常です。相談担当者は、相談者が利用可能な制度をできる限り広範囲に教示し、その内容を丁寧に説明する義務があります。その際、相談担当者は、担当窓口が所管しない施策についても、相談者が該当しうるか否か検討し、該当しうる施策を相談者に紹介すべきです。
- そして、相談者が申請可能な制度があれば、単に相談で終わらせるのではなく、申請を促す義務があります。児童扶養手当など、多くの支援制度は申請主義・非遡及主義をとっています。そのため、当事者が申請しなければ支給につながりません。子どもの場合は、保護者の申請が必要です。子どもの貧困の解消のため、積極的に申請を促すべきです。
- 相談者が利用可能な制度を利用するため、他の相談窓口に行くことが必要であれば、情報提供すべきです。

35

沖縄県の動きから考える

- 沖縄県子どもの貧困実態調査(昨年開始、数年間継続)
- 沖縄県子どもの貧困対策計画 (特徴) 実態調査のデータ活用
 - 指標と削減目標
 - ライフステージごとの施策(乳幼児期…)
- 県「子どもの貧困対策推進基金」(6年で30億円)
 - 各市町村へ配分(1)就学援助の充実(2)放課後児童クラブの利用料の負担軽減(3)子どもの貧困対策に関する独自事業など
 - *就学援助についてはテレビコマーシャルなど
- 沖縄県の「子どもの貧困率削減目標」の制定
 - 現在29.9% → 10% (2030年)「沖縄子どもの未来県民会議」での決定。本会議には、経済界(商工会議所など)、労働関係、教育関係、福祉関係なども参加している。
 - 県庁に専従の子どもの貧困対策部門
 - 県議会に子どもの貧困対策特別委員会
 - 児童養護施設の子どもの大学進学率の改善(約50%)



第五講座

「地区別コーディネーター」の出番です！

講師 **平間 信雄** 稚内市教育相談アドバイザー

『地区別コーディネーター』の 出番です！

稚内市子どもの貧困対策プロジェクト会議
コーディネーター

平間 信雄

稚内の良さ



稚内に来てびっくりしたこと



- フットワークが軽い！
- 組織が違うのに手を組んでいる
- 言うほど簡単でないのになぜできるんだろう

大分大学医学部3年
佐々木啓佑

稚内に来てびっくりしたこと



- 人とのつながりが近い
- 連携がすごい
- たいへんな話でなく、あったかい話がいい！
- また来て勉強したい

北海道大学医学部2年
鳥井 沙南

『連携』で『信頼』を創る街



学校と地域の連携

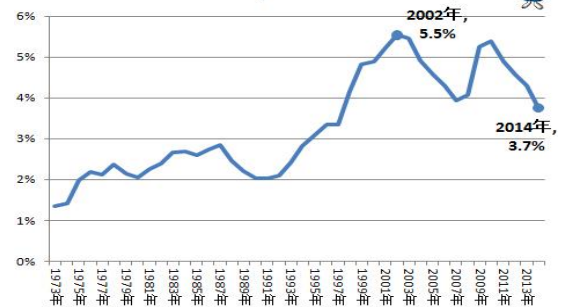


学校と地域の連携をつなぐ団体

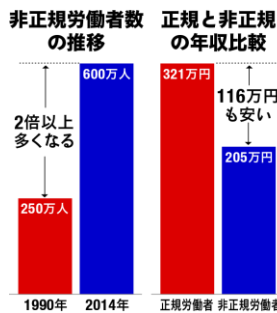
校長会・教頭会・PTA・町内会
 民生児童委員協議会
 子育て連絡協議会
 その他たくさん

貧困を考える視点 仕事がない

完全失業率(男性、1973年～)



貧困を考える視点 生活できない



非正規労働者が大幅に増えたが、賃金が不十分なため、普通に生活できない

貧困を考える視点 仲間がいない

知らないうちに
まじりな状況にっ!

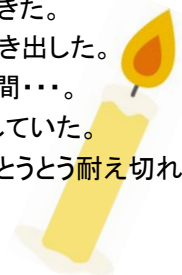


『3ない』が特徴



貧困の実態 ローソクの生活一週間

女子生徒が、保健室に入ってきた。
 その瞬間『わあー!!!』と泣き出した。
 聞けば、電気が止まって一週間…。
 ローソクの明かりの下で暮らしていた。
 食うや食わずの生活の中で、とうとう耐え切れなくなっていた。



借金・離婚・子どもの不登校
ほかにたくさん抱えて・・・



離婚・再婚の繰り返し
子ども3人・養育困難



だれにも相談できない・・・



見えにくい子どもの貧困

1. 1人の担当者だけでは見えにくい
2. 他の困難も抱えている〈複合的〉
3. 本人・親からの発信がない

平成25年 子どもの貧困対策法成立

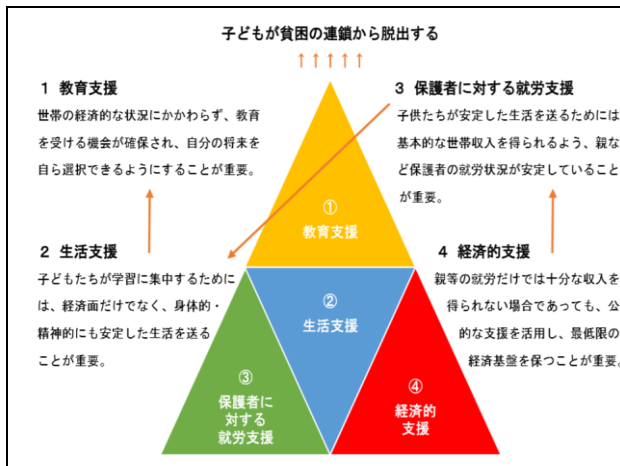
子どもの貧困対策法は、親から子への「貧困の連鎖」を断ち切る第一歩となる法律です。

稚内では、その前から民生委員の人たちも先生たちも地域の人たちも努力していた



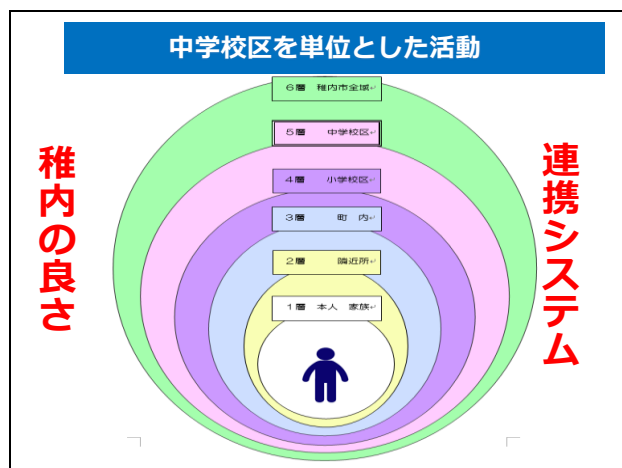
子どものつぶやきから

- 高校に行きたかったけど、働くことにした。
- 家で勉強することはない。勉強机もない。
- お金がかかるから修学旅行には行かない。
- 家に食べる物がない日がある。
- 給食がない夏休みはおなかが減る。
- 自分は将来、フリーターになると思う。
- 高校を中退した。親もそうだった。



- 稚内市貧困対策本部の構成**
- ① 稚内市教育委員会
 - ② 稚内市校長会
 - ③ 稚内高校
 - ④ 稚内大谷高校
 - ⑤ 稚内北星学園大学
 - ⑥ 稚内市社会福祉協議会

- 平成27年 稚内市貧困対策本部の設置**
- 《三つの目標》
- ① 子どもの貧困の連鎖
 - ➡ 市民ぐるみの**支援の連鎖**で断ち切れる
 - ② 貧困の要因は複合的
 - ➡ 関係機関の**相互連携**で**総合的支援体制**
 - ③ 行政がリード、関係機関が協力
 - ➡ **各地区ごとのサポート体制の研究**



アウトリーチ

生活保護申請や生活困窮者相談を役所で待つだけでなく、働きながら貧困に苦しむ市民など、真に必要な人に支援が届くように**アウトリーチ**(積極的に出かけて困っている人を探し、声をかけ、制度につなげる)を強化すること。

- 子どもの貧困対策プロジェクト会議**
- ① 貧困の連鎖を断ち切るための教育、医療、福祉、行政からなる専門委員の**研究組織**
 - ② 小学校、中学校、養護学校、高等学校、大学、が公立私立の枠組みを超えて連携し、PTA・民生児童委員との協力関係を強め、対等かつ平等に語り合い、**つながりの輪を広げる日常的な研究**
 - ③ 四地区のネットワーク強化と地区のつながり強化めざす**研究と提言**
 - ④ 市民への**広報活動・シンポジウムの開催**
 - ⑤ 市民の**合意づくり**

子どもの貧困対策5原則

1. 子どもの現実を見つめる
2. 苦しい気持ちを受け止める
3. 家庭・学校・社会とつながる
4. 中学校区単位に連携する
5. 『子ども支援ネットワーク』を強める

子どもを見る視点

「困った子」は「困っている子」

1. 教育的見地から支援する
2. 児童支援の見地から支援する
3. 子どもが悪い・親が悪い・先生が悪い・地域が悪いなどの子どもを中に挟んだキャッチボールをしない

第一回 子どもの貧困対策シンポジウム



平成27年12月24日
『18項目の提言』

貧困の連鎖を断ち切る課題を市長に提言

『18項目の提言』の最重点

- ① 教育連携会議の発足と子どもサポート
- ② SSW・SCの増員
- ③ 子ども支援ネットワークの充実
- ④ 小・中・高をつなぐコーディネーター配置
- ⑤ 稚内型奨学資金制度の創設・財政支援
- ⑥ 若者の雇用支援



全国的に珍しい「稚内市教育連携会議」誕生

切れ目のない対策
学校間連携と一貫体制のしくみがうまれた

貧困の連鎖を断ち切るため、幼稚園、保育園、小学校、中学校、養護学校、高等学校、大学、が公立私立の枠組みを超えて連携し、PTA・民生児童委員との協力関係を強め、対等かつ平等に語り合い、**連携・協力の輪を広げていく**ことを目的とする。

「稚内市教育連携会議」の構成

- ◆ 稚内市教育委員会
- ◆ 稚内市立幼稚園協会
- ◆ 稚内市立保育園協会
- ◆ 稚内市校長会
- ◆ 稚内市教頭会
- ◆ 稚内高等学校
- ◆ 稚内大谷高等学校
- ◆ 稚内北星学園大学
- ◆ 稚内養護学校
- ◆ 稚内市社会福祉協議会
- ◆ PTA関係団体
- ◆ その他

縦・横の広がり



子ども支援ネットワークの充実

- ① 4地区ごとにある子ども支援のネットワークの良さをもっと生かせないか
- ② 学校教育だけでなく、社会教育・医療・福祉・企業との連携と地域づくりを研究しよう
- ③ 二年間かけて提言を練り上げよう
平成28年⇒市長への提言
平成29年⇒市民への提言
楽しくわかる工夫

平成28年12月28日 『地区別の提言』

貧困の連鎖を断ち切る地区ごとの課題を市長に提言

北地区の提言

1. 「縦横のネットワーク」の追求
2. きめ細かな支援のシステム化
3. 「子育てファイル」のとりくみ研究
4. 子ども支援情報の共有

幼保小中高の連携のまちづくり



南地区の提言

1. 幼小中高参加のネットワークづくり
2. 顔の見える取り組み
3. キャリア教育を充実
4. 稚内を愛する子どもの育成

キャリア教育推進地区



東地区の提言

1. 「孤育て」がキーワード
2. 「子育てファイル」を書くこと
活用することで
「孤育て」をさせない
3. 「子育てファイル」のモニター制度の導入

子育てファイル活用モデル地区



潮見地区の提言

1. 市民理解とつながりの推進
2. 高校も含めた学校間交流の推進
3. 子育て連協をベースに情報の把握と発信
4. ライフストーリーの情報発信

行動連携モデル地区



子どもの貧困対策は孤立化対策

つながらないのを嘆く 3つの特徴

- ① あの親はだらしない
- ② けっこうゼイタクしているんじゃない
- ③ 困っているなら相談すればいいのに

つなぐヒントを考える 3つの視点

- ① 幼保小中高大に伝えよう
- ② 教育委員会に伝えよう
- ③ 教育相談所に知らせよう

ひとりにさせない
専門委員

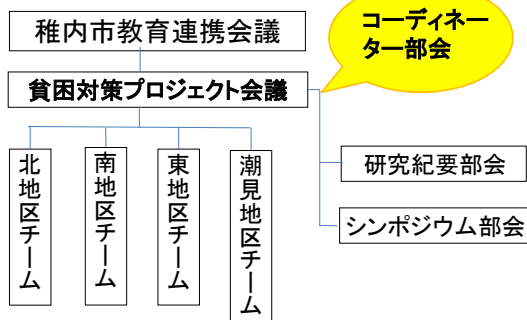
平成29年8月17日 『地区別コーディネーター』

貧困の連鎖を断ち切る
地区ごとの専門委員登録制度の提案
稚内のアウトリーチ体制

① 地区別コーディネーター

1. 各地区ごとの子どもや親のかかえる悩みや課題を受け止め、支援策が生まれるように**学校につなげる地区別専門委員**
2. 関係機関や団体とつながり、子育て家庭を応援する**地区別連携応援団**
3. 任期は4年、修了者に認証書を交付。**オリンピックごとに更新** 2020・・・2024・・・2028・・・

② 地区別コーディネーター研究部会



③ 地区別コーディネーター

1. 稚内教育委員会に登録
2. 4地区ごとの幼保小中高大に名簿紹介
3. 所属は稚内市教育相談所
4. 稚内の「子どもの貧困連鎖ストップ専門委員」
5. 地区の学校・関係機関・団体と連携

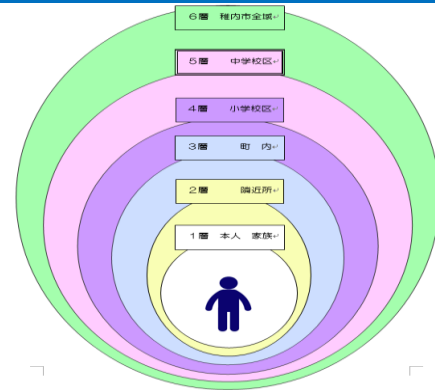
④ 地区別コーディネーター

- 解決者ではなく、紹介者
- 重役でなく、世話役
- 有給でなく、無給
- 地域の『つながりせんせい』



中学校区を単位とした活動

稚内の良さ



連携システム

地域食堂『ふらっと』の誕生

設立の経緯

- 食事がままならない子ども
- 家庭に努力を求めるだけでは限界
- 子育て平和都市宣言の街
- 子どもの食と成長を支える

活動目的

- 栄養バランスの良い食事
- 楽しい食事の場の提供
- 地域の居場所の提供
- 生きる力を高める機会の提供
- 多世代交流の場の提供

卒業したら多額の借金

奨学金は 平均288万



子育てはオール稚内で



ご静聴
ありがとうございました

1 子どもの貧困連鎖 STOP 講習会 (2) 受講者感想

- 稚内に来てびっくりしたことは、教育と福祉が連携した「こども課」が教育委員会にあったことです。本日の話で設置された経過が分かりました。うまくいかないと思いつけていた概念を打ち破られました。稚内の行政は本気であり、本物であると感じました。益々稚内が魅力的な街であると実感しました。学校・家庭・地域・行政の連携の必要性はよく耳にします。稚内市では単なる連携ではなく行動連携ができています。その中に大学があり、その存在意義を認識しました。稚内のことを研究する組織(大学)・研究者が地元において、いっしょに街づくりをしていることは稚内にとって大きな資源であると思いました。(男性・50代)
- 途中、業務の関係で中座しましたが、表教育長の講座で行政と学校と子どもをつなぐ重要性がよくわかりました。こども課の設立の意味も改めて確かめることができました。現場の先生にも聞かせたいですね。山野先生の講座は、全国的・世界的視野で貧困問題を考えることができました。平間先生からは稚内の貧困問題の取り組みについて今後の展望を学ぶことができました。どうもありがとうございました。(男性・50代)
- 市民の中にも『貧困』に対し、しっかりと知識・認識があれば、子どもの貧困・家庭の問題点に気づくことが地域の大人でもできるはずである。他人が他人の家庭の問題に口を出すということは、プライバシーの観点から非常に辛い現代ではあるが子どもを地域で育てるという点からすれば、多少、昔のおせっかいなご近所さんも必要となる。(男性・30代)
- 子どもの貧困問題解決のためにはアウトリーチが大事だと痛感しました。稚内市の教育・医療等の連携の確かさを改めて実感しました。(男性・60代)
- 個人でどう関わられるのか、この集いに参加するたび自問・疑問の繰り返しだった。「地域コーディネーター」の話平間先生から聞いて、初めてイメージが広がり、地域でやっていきたいと思えました。(女性・50代)
- 老いの私ですが、日本の将来を担う子どもたちがすこやかに成長される願いを込めて今後もできることに協力させていただきます。本日の講習会に出席し、関係者の皆様のご努力に敬服しまた感謝いたします。有意義な一日をありがとうございました。私の地域にある学校では毎晩遅くまで校舎に灯りがともっております。子どもたちに対する教育の熱心さに頭が下がる思いであります。関係者の皆様もどうぞ健康に留意されますよう祈っております。(女性・70代)
- 第一講座から第五講座まですべて聞きたかったのですが、業務の都合で午後の四・五講座の参加となりました。山野先生、平間先生ともにわかりやすいお話で勉強になりました。現代の貧困は国民健康保険料を滞納していて医療にかかることができない子どもがいたり、その把握が一層困難になっていると聞きます。そんな中で途切れない支援の取り組みは勇気づけられました。このような機会が続いていくことを期待いたします。(女性・50代)

- 平間さんの話の中で出てきた「稚内だから…。小さい街だからできる」ということについて。たしかに小さい街だからできることはたくさんあると思うが、それが稚内の「強み」だと思うし、同時にそれが日本（主に大きな街）にとっての「弱み」なんだと思った。(男性・20代)
- 親としての子に対する関わり、PTAとしての子どもに対する関わり、地域としての子どもたちに対する関わりなど考えさせられ、とても勉強になりました。医療の取り組みなど知らないこともあり、市民の皆さんがさまざまな取り組みがあることを知って、少しでも子どもの貧困のSTOPにつながればよいと思った。(女性・40代)
- 地域連携コーディネーターの養成講座として、楽しみにしていました。教育行政の立場と役割の発揮、子育て運動の歴史と位置づけ、子どもの居場所づくりの実践や重層的な支援について、全国的な視野から、稚内の実践課題は、と多角的に知ることができ、勉強になりました。準備と運営お疲れさまでした。(男性・60代)
- すべての講座が大変勉強になりました。改めて子どもの貧困に対する意識を高めることができました。市民の一人として身近な人たちに子どもの貧困に対する意識を語って行きたいと思います。ご講演くださった先生方、大変ご苦労様でした。ありがとうございます。(女性・60代)
- 子どもの貧困の連鎖を断ち切る大人の役割について考えさせられました。稚内らしい仕組みづくりのために私も頑張ります。講師の先生方をはじめ運営の皆さんに感謝します。若い人たちがたくさん参加してくれていて元気が出ました。(男性・50代)
- きょうの講演会、参加させていただきありがとうございました。講師の先生方、それぞれのお話を自分の中で繋げてこれからの活動に活かせるようにしたいと思います。プレーパークから医療、学校現場での子どもたちとの関わり、地域、大人、関係機関、行政、こども食堂などたくさんの連携、たくさんの目、たくさんの方で子どもの貧困連鎖がSTOPできるよう自分もその一員として参加できるよう努力したいと思います。講師の先生、スタッフの皆様お疲れさまでした。(女性・50代)
- 貧困は貧困だけに終わらず、いろいろな問題が結びついてくるところに困難性が大きくなる要因があることがよくわかりました。今こそ稚内がつちかってきた連帯力の強さを発揮する時だと感じました。(男性・50代)
- とても良い内容の講習会と思って参加しました。一人ひとりの方の内容はとても大事なことなのですが、もう少しゆっくり一つひとつの固まりとして急がずに時間をかけて持ち時間を大事に使ってほしいと思いました。言葉が流れてしまうようで残念でした（第二講座）。第三講座………具体的内容に関心を持って聞くことができました。大人の人間性、人間観、人として大事にしなければならない姿勢をよい

ものにしなければと思い、子どもの感性のすばらしさ、よい学びをしてもらえるように大人の生き方が正されているのだと思いました。第四講座……いろいろな法律ができ支援を受ける場があるのに、なかなか知らされる場がありません。もっと積極的に学び地域の方たちに伝えていかなければと児童委員として思いました。でもなかなかお宅を訪問しにくい面もあり、工夫しなければなりません。第五講座……とても大事な稚内市のとりくみ。とても力強くうれしく聞きました。今、そしてこれから、私は何ができるでしょうか。稚内の住民であることに感謝。(女性・70代)

- 学校が始まり、午後からの参加になり残念でした。経済的困難をはじめとした貧困の実情と今後の方向性について改めて学ぶことができました。最近感じているのは、親のストレス、地域からの孤立、ネグレクトや発達に関わることです。子どもの成長を阻害する要因をつながりの中で減らしていかなければと思います。学校現場は後追い対応で、体力がなくなってしまう。(男性・50代)
- 子どもの貧困について自分なりに思っていたことより、きょう講習会に参加することにより、ますます多くの学びがあることに考えさせられました。良い社会に一日も早くなつてほしいと思います。とても良い講習会でした。(女性・70代)
- すべての内容が濃い。久しぶりに頭がつかれている感じ。それぞれが本になりそう！本当にありがとうございました。個別の内容については省略。(男性・60代)
- 講師の皆さんのお話から「なぜ貧困について考えるのか」ということはもとより、稚内市がものすごくたくさん関係者の力合わせで子育ての運動が行われてきたことがすごくわかりやすかったです。稚内で子育てすることが恵まれたことなのだというこも感じました。若原先生のお話の中で「大人の連携構築」ということが指摘されていました。その一つの具体として今日の場があるのだと思います。一方で私は教員なので、学校の先生方がこの問題をどう考えるのか、どう実践していくのかを大事にしないでと考えています。例えば、表教育長のお話の中でエピソードとしてあったように、困っている子がいたならばケース会議に出たり、時には他の子には内緒でおにぎりを食べさせるということもあります。しかし、子育て運動への理解がなかなか深まってこなくなっているという課題もあります。そこで、何よりも子どもたちにとっての『社会』である学校が街づくりの視点をもって教育実践をどうしていくのかということこそ大事で、私たち教員はこの部分で頑張ればと考えています。清水先生が「沿岸部の子が大学生というロールモデルを知る」というのを紹介しましたが、それと同じです。稚内という、こんなにも大人たちが子どもの育ちを見ってくれる地域なら、学校の授業づくりの中で地域を知る、大人と共に学ぶことをやっていくことはできるはずですが、しかし、宗谷の市町村の中でもこの視点は弱いのです。例えば総合的学習であるとか、道徳であるとか、分野で言えばキャリア教育とか、特別活動の面などで、先生方が地域の皆さんと実践していくための学校側の（教育課程づくりのような）仕組みや先生方の工夫、学校のこうした実践を育てていく視点も大切にしていきたいと思います。どうしても貧困の分野は学校から見るとひとりひとりの先生にとっては理解が追いついていかない視点だと思います。だ

からこそ先生の授業は子どもの『社会』を広げ、未来を紡ぐ実践なんだよという激励と力合わせも貧困の連鎖を切るひとつの視点になることを願っています。すてきな大人たちと子どもたちが教育実践を通して出会い子どもが「自分も稚内であんな大人になりたい」ってもっともっと思えることはとても大事なことだと思います。(男性・30代)

- 時間の都合があれば全部受講したかったです。自分の身边には貧困問題を抱えている家庭がないので色々な事例を聞いて勉強になりました。(女性・50代)
- 会の運営をされた皆様、お疲れさまでした。また、ありがとうございました。時間を感じさせない内容で、どの講習もとても勉強になりました。全国的、他地域の知見と稚内市の具体的なことが聞けたことで解決の方向性が見え始めたと感じました。大人のつながりや大人が「良くなる」ことが大切だとあらためて感じました。子育て運動の発展によって解決に向かえるのではと感じました。ありがとうございました。(男性・30代)
- 第一講座.....教育長さんの子ども時代の話聞き、伸び伸びと自然豊かな中で過ごされ、成長されたことがその後の仕事(特に教育)に活かされたのだと感じました。こども課の誕生は稚内市の子育てにとって素晴らしい発想であったと思います。第二講座.....若原さんのお話では、市の子育ての歴史に加え、今後の大学としての貧困問題の方向性も聞きたかったです。第三講座.....大学でプレーパークを行っていることに深く興味を持ちました。倉橋そうぞう先生の名を懐かしく聞きました。支援者側が一人ぼっちにならないようにという視点は大切なことだと気づかされました。第四講座.....沖縄の貧困を知り驚きました。テレビCMの『就学援助制度』に目からウロコ！第四講座.....とても分かりやすく学ぶことができました。民生委員として何が出来るだろう...と常に考え続けています。より連携が深まるように私たちの『わっ』のつながりを大切にしていきたいと感じました。関係機関がつながるように学びあい情報共有をしていく方向性を与えられました。本日は第一歩ですね。大変有意義な一日でした!!ありがとうございました。(女性・60代)
- 子どもの貧困の社会的背景が良くわかりました。どうしても「あの親」「あの子」に落ちこんでしまいます。稚内の子育ての歴史、その上に立っての貧困に対するとりくみの到達が良くわかりました。今後の取り組みは連携ですね！『中学校区』ですね！縦・横をどう機能させるのかですね！（男性・40代）
- 「居場所を失う」「ひとりぼっち」というキーワードが心に残りました。貧困の本質というか、一番の問題は孤独、孤立なのかもしれません。心の貧困までなると本当に不幸なのかもしれません。お金がないから、経済的に困っているから自体が大きな問題ではなく、それが心の貧困につながりやすいということに視点を当てて個人としてできること、個人から→チームとしてできることを考えていきたいと感じました。ありがとうございました。(男性・40代)

- とても勉強になりましたが、学校関係者や教員に対してこのような講習会があると良いと思いました。(女性・60代)
- 第三講座の講師(清水)の話が聞きやすかった。今まで子どもの貧困について考えたことがなかった。きょうの講習を受け、学ぶことがたくさんありました。(男性・60代)
- ひとつひとつの講座がもう少し長くてもよかったですと思いました。50分→70分くらいでしょうか?とても勉強になりました。ありがとうございました。(男性・40代)
- いろいろな立場の方々からお話を聞き、貧困問題について学習を深めることができました。稚内はいろいろな面で連携ができていますので、皆で取り組んでいくことができるのかなあとと思います。本日はありがとうございました。(女性・50代)
- おもしろい話をたくさん聞いてあまり眠気はなかったが、少し時間が長いように感じた。終わったシェンカン疲れがどっと来るような感覚。(男性・20代)
- 講師の方々の思い、いま行っていること、やらなければいけないことなど様々な角度からのアプローチ、対策をしている(考えている)ことをお聞きできたことをうれしく思います。それと同時にそれぞれの現状(問題)を知り、本当にたくさんの問題が複雑に絡まっていて貧困問題になることを知りました。(男性・20代)
- 様々な立場から貧困について聞くことができ、大変勉強になりました。貧困はすぐに解決しない大きな問題ですが、連携を大切に、改善にむけて進んでいけるといいと感じました。(女性・70代)
- 現状など非常に勉強になり、また考えさせられました。講師の皆さんありがとうございました。講演内容によって講演時間の長短があってもよいと思います。(男性・40代)
- 貧困についていろいろな側面からお話を聞くことができ、大変勉強になりました。(女性・40代)
- 子供の貧困、昔と今では違いがあるようにおもいます。昔は貧困であっても平等、みんなそうだったし、近所付き合いがあったから安心でした。今は差がありすぎて近所付き合いがありません。あいさつさえありません。まずはあいさつから!!(女性・50代)
- 講義でも貧困について学んだが、改めて色んな角度から貧困について知ることができてとても良かったです。どうにかして貧困の連鎖をストップさせられたら良いと思った。(女性・20代)

- 世界における貧困の実態と比較して日本の貧困状況について知ることができた。稚内市における貧困対策がこれまでどのように取り組まれてきたのか詳しく知ることができました。教育に携わる者として自分が勤める学校で自分ができることを今後も頑張っていこうと感じた。(男性・50代)
- 子どもの貧困について強く深く考えたことはありませんでしたが、稚内でも子どもの貧困が重要な問題とされていると知りました。子どもの貧困は親（家庭内）の問題が多く関わってきているとのこと。経済問題が主に思われる貧困について国も動き出したとのことで、今後もっと色々な面で動き出すことと思います。稚内の貧困対策プロジェクトが動き出していることを知りました。本日はとても勉強になりました。(女性・70代)
- 貧困問題に関する知見を深めることができた。実践の内容や実列を聞くことで身近な貧困問題について考えることができた。(女性・20代)
- 講師の表さんの「稚内市と共に」のお話にあったように私も明治12年から三代目となります。子ども課の取り組み、これからも頑張ってください。課題もいろいろあるでしょうが子ども課のさらなる発展を願っています。教育の充実と言う点では、誰もが主体となり地域作りに関わることが大切だと思います。地域食堂の益々の発展を願っています。日本の経済的困難の土台を解決するため、所得の再配分活動を進めてほしいと思います。地区別の人々との交流を深められる様に「市民の合意づくり」頑張ってください。(男性・70代)

※ 文章の「てにをは」の整理、敬体と常体のスタイル統一など、原文に若干手を加えてある箇所もあります。

■全体講師



松本 伊智朗 氏
(北海道大学大学院教授)

研究テーマは福祉教育で、子どもの貧困がもたらす社会的不利や困難の解決や緩和のためには何が求められているかを探求しています。全国的にも活躍している方です。

■市民への提案

貧困のストップは
地域のつながりを生かすこと

- 東地区
子どもの日常生活を切り取ってみよう
- 北地区
縦横の切れ目のない子育て支援
- 南地区
子育てファイルを活用し、人と人のつながりを
- 中地区
キャリア教育を柱に子どもを育てる

一緒に考えましょう!!



第7回 COC地域活動報告会
11月21日(火) 14:30~16:30
稚内北星学園大学 新館3階



子ども 貧困対策 シンポジウム

稚内北星学園大学 COC地域シンポジウム

平成29年11月21日(火)

18時30分〜

稚内総合文化センター

小ホール

ところ とき

主催：稚内市・稚内市教育委員会（稚内市子どもの貧困問題プロジェクト会議） 稚内北星学園大学
連絡先：稚内市教育委員会（学校教育課 番23-6519） ・ 稚内市教育相談所 番24-4402 ・ 稚内北星学園大学 番32-7511

子どもの貧困対策シンポジウム 潮見が丘地区の取り組み

「子どもの貧困問題解決の足場は各地区活動に！」のテーマのもと、プロジェクト会議を重ねることになった。何も無いところから新たなものを創り出していく作業は苦しさや焦りに満ちていたが、失うものは何もないと開き直り、不安を薄めながら歩みを進めてきた感がある。振り返れば、メンバー各自の思いを交流し、「こうなればいいなあ」という夢を共有する過程そのものが貴重だったことに気づかされる。会議を重ねる度にメンバー同士の距離が縮まっていく楽しさと築かれていく信頼関係が行動プランの中身を豊かにし、「つながり」を意識し一丸となって取り組みを進める大きな力になったように感じた。

1 「主役は子ども達」に足場をおいて

貧困問題に関心をもってもらう上で大切にしたいと思った事は、大人目線ではなく子ども目線からのアプローチという視点だった。「子ども達が語りかける貧困問題」という迫り方だ。こうして、幼稚園児・小学生・中学生・高校生の日常の声を拾い集めるアイデアが生まれた。子ども達が日常生活で感じる喜び、人とのふれ合いやつながり、家族に愛され生きる実感、将来の夢や実現するための努力、ふるさと稚内を思う気持ち等など。子どもの成長に欠かせない日常生活の大切さ、これを阻害する関係にある貧困問題という構図を対比させメッセージ性を高めることをねらいとした。当初は小・中学生を対象にと考えたが、話し合う中で、幼稚園児や高校生も加えた作品づくりに挑戦することになった。嬉しい誤算は、幼稚園・高校のメンバーの力強い後押しが大きな力となった。

2 潮見地区の強みを生かして

貧困問題を訴える子ども達の日常の声を盛り込んだ「啓蒙ポスター」が出発点だったが、潮見地区ならではの強みを生かさずにはない。稚内北星学園大・若原先生にこれらのアイデアを形にするため全面的協力をお願いすることにした。啓蒙ポスターとメッセージの込められた映像作品を若原ゼミの学生が中心になって取り組んでくれた。私達の貧弱なイメージをポスターや映像作品にしていく過程は相当な苦労が伴うものだったと思うが、夏休み明けから11月までの数ヶ月間で精力的に製作活動に取り組んでくれた。発表前の2週間ほど前に自主プロジェクト会議を行い、作品のお披露目と合わせて最終的な修正検討会も学生主体で進められた。「知の拠点事業」を標榜する北星大だが、その存在の大きさを感謝とともに実感した機会でもあった。

3 発展性と広がりをつくる土台づくりに

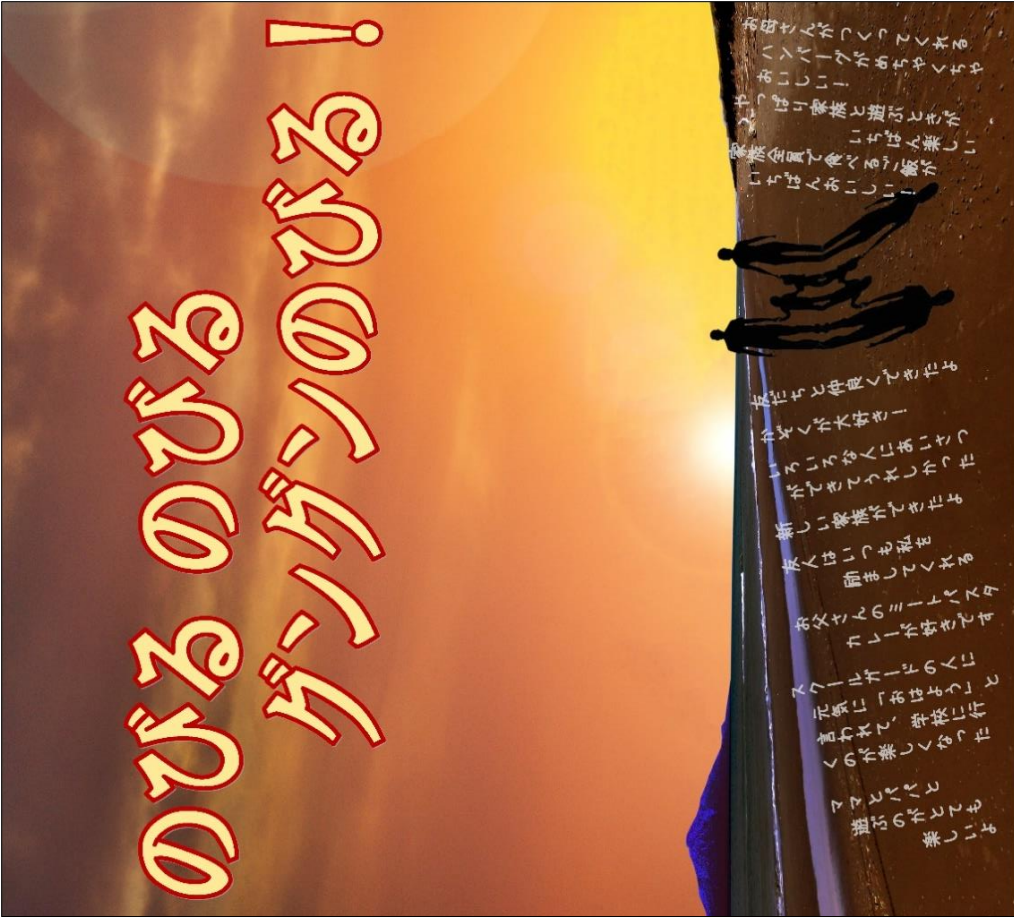
メンバー全員で構想を練り上げ、協力要請の仕込みや準備、映像作品製作のための取材や撮影作業、中間発表会や修正検討会、そして、当日の発表の役割分担まで、メンバー一人ひとりが役割を担い主体的に盛り上げた取り組みとなった。貧困問題への大きなテーマは「つながり」であったが、まずは、縁あって潮見地区のメンバーとなった推進母体内の心合わせは前進したのではと感じる。合わせて、地区の強みである連携力が生かされ、作品の完成には北星大学の教授陣と学生の皆さんの協力が大きな力となった。改めて潮見地区の潜在力と可能性の素晴らしさに気付かされた。今回の成果は、貧困問題を考える入り口としての「アイテム」を準備できたことだと思う。ここを土台に、第2段階の行動プランに移行していきたい。貧困問題を個の問題に矮小化することなく、「将来の稚内を担う子ども達への地域を上げての激励応援活動」にしていかなければと強く感じた。



**みんな
大きく大きく
大きくなあれ!**

子どもたちの小さな幸せ、夢、
希望を私たちは応援します(幼稚園編)

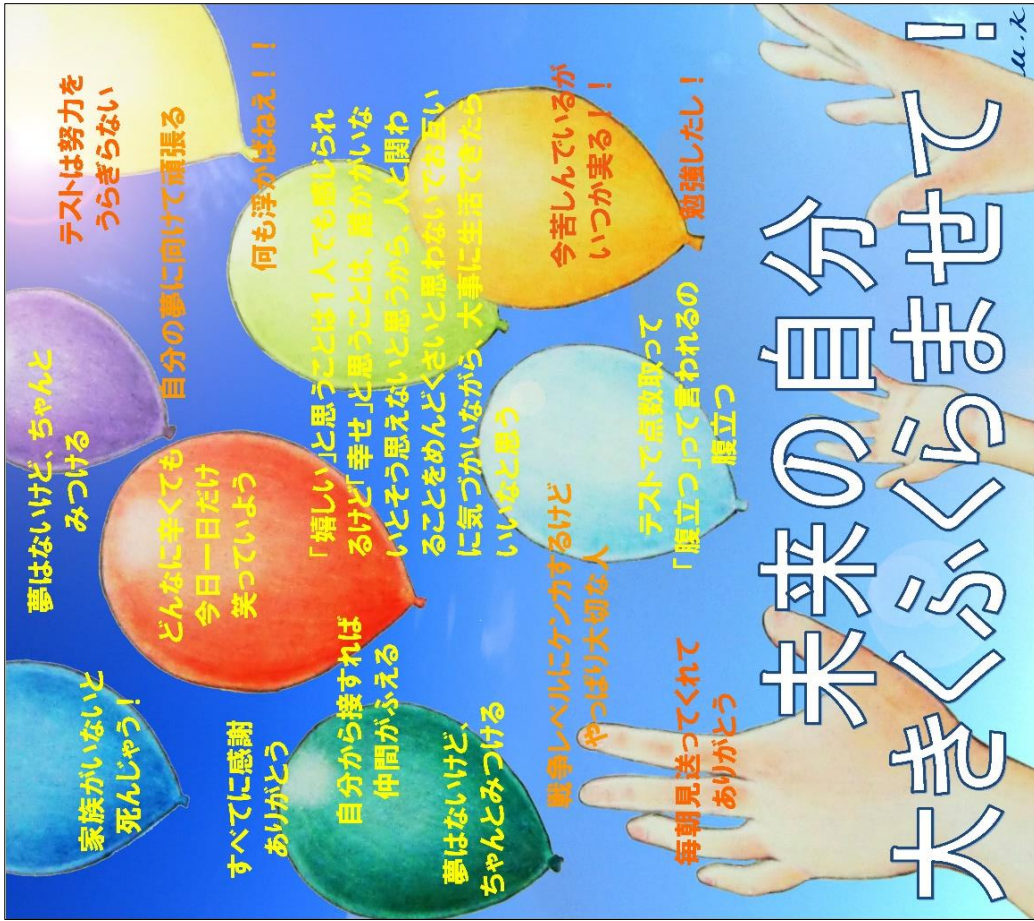
稚内市子どもの貧困対策プロジェクト会議 潮見が丘地区
協力 稚内富岡幼稚園



**のびるのびる
ガンガンのびる!**

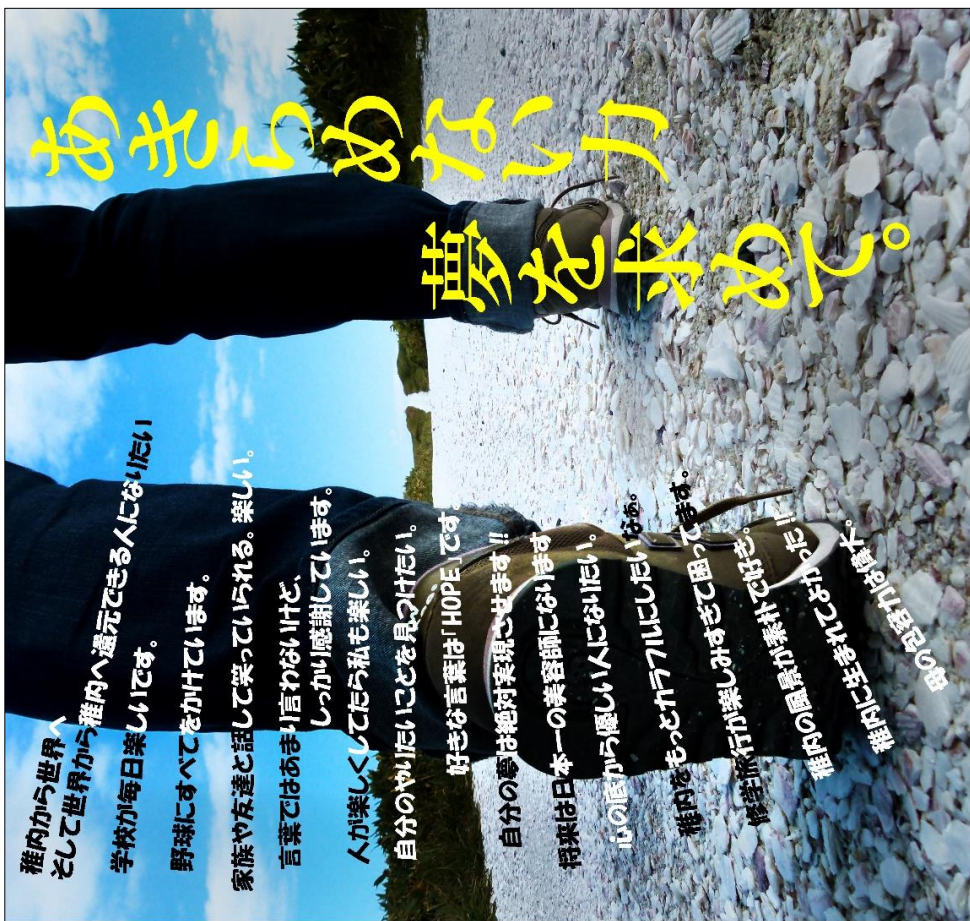
子どもたちの小さな幸せ、夢、
希望を私たちは応援します(小学校編)

稚内市子どもの貧困対策プロジェクト会議 潮見が丘地区
協力 稚内市立潮見が丘小学校



子どもたちの小さな幸せ、夢、希望を私たちは応援します(中学校編)

稚内市子どもの貧困対策プロジェクト会議 潮見が丘地区
協力 稚内市立潮見が丘中学校



あきらめなけり 夢を求めて。

子どもたちの小さな幸せ、夢、希望を私たちは応援します(高校編)

稚内市子どもの貧困対策プロジェクト会議 潮見が丘地区
協力 北海道稚内高等学校・稚内大谷高等学校

「縦・横の連携」で切れ目のない支援を

子どもの貧困を世代を超えて連鎖させないために、教育の果たす役割は大きい。教育費の負担軽減や学習支援により、親の経済状況にかかわらず学習する機会を確保することが重要である。

学校では入学時や進級時に就学援助制度の書類を配付しているが、申請があつて初めて必要としている家庭を把握することができる。「制度を十分理解していないがために、あるいは手続きの煩わしきで、更には困窮状況を明らかにすることを躊躇して、制度を利用していない家庭はないのだろうか。様々な事業や制度は十分に理解され、必要な支援が必要としている人に届いているのだろうか。」—これらの疑問をスタートに、表題をテーマとして研究協議を進めてきた。

調べていくと、行政・教育・医療・福祉の分野で、稚内独自、国や道、民間企業等の、事業や制度、及びサポート機関や施設が数多くあることがわかった。また、「わからない市民便利帳」には、これらの多くの情報が分かりやすく掲載されている。北地区では、乳幼児期から小中学生、高校大学、青年期に至るまでの縦の線と、その時期における横のつながりがより分かりやすく見えるようにとパンフレットにまとめることに取り組んだ。それが、「北地区子育て支援お助け帖」である。掲載内容は以下の通りである。

相談機関・サポート機関一覧／子育て支援事業・制度、教育相談・子育て支援に関する専門機関／経済的支援制度／就学に関わる制度／子育て支援の関連施設／制度等の詳細資料

必要な人が必要な支援や制度を漏れなく利用できるよう、この「お助け帖」を「知る」「知らせる」と、関係機関を「つなぐ」ことに活用していただきたい。また、「子どもが制度を知って自分の将来に夢や希望をもてる」、その一助になることを願っている。

【子どもの学びの応援】に!!

- ・ 様々な支援や制度を活用することにより、学ぶ意欲があれば希望する教育を受けられること。大学への進学も夢ではないこと。社会人として必要な知識や技能、資格を身につけ、経済的に自立できること等、将来への展望をもてることを知ってもらいたい。

【潜在的な、子育て・親支援ニーズの掘り起こし】に!!

- ・ 様々な制度があることを知り、必要な支援を受けられる。
- ・ 「個育て」にならない・させない、つながりづくり。

【相談・サポート機関のネットワーク強化】に!!

- ・ 支援の方策や情報を理解し、相談を受けた際、必要な支援につなげられるよう、関係機関と連携した支援を行う。

「子育てファイルあゆみ」とともに、子どもの成長を見守り、支援として活用され続けることが、私たちの願いである。

＜東地区チーム＞アクションプラン

子育てファイルで、大人が「つながり」、子どもを「ささえる」東地区

I はじめに

稚内市子どもの貧困対策プロジェクト会議において、子どもたちの貧困の連鎖を断ち切るために、基本理念として「『連携』をキーワードに『オール稚内』で取り組みましょう」と提言されました。東地区チームでは、この理念を受けとめ、「オール稚内」の具現化を目指し、福祉、学校教育、社会教育の分野での支援を切り口に、協議・検討を進めてきました。

その中で、「就学前～学校～就労の各段階における各機関での支援」ならびに「学習支援・生活支援」を一貫・連携して推進すること重点に、『孤育てさせない街づくり』をキーワードとして具体策を模索してきました。

II 『孤育てさせない街づくり』を東地区から築きあげる

「孤育て」させないためには、様々な結びつきこそが欠かせませんが、その方策の一つとして、『子育てファイル』を浸透・活用することで、ファイルを通して行政や学校とのつながりだけでなく、人と人とのつながりを築くことにつながると考えました。そこで、東地区は『子育てファイル活用推進地区』（仮称）として、学校と行政が一体となってファイルの積極的な活用を推進してきました。

1 なぜ、子育てファイルなのか

子育てファイルは、平成28年度から配布されている稚内市の子育て支援の取組の一つです。子どもたちの健やかな成長と子育ての支えになることをめざしてつくられました。

東地区は、子育てファイル活用推進モデル地区として、「孤育てさせない街づくり」を重点の一つとしています。ここで言う「孤育て」は、孤立した状態の子育てをあらわした言葉です。そして、平成29年度は「大人がつながり、子どもを支える東地区」をアクションプランのテーマにしました。

誰にも相談できなかつたり、どこからも手がさしのべられていない孤立した子育てをなくすために、人と人とのつながりを増やし、ネットワークを広げる必要があると考え、人と人が、つながるためのツールとして「子育てファイルの活用」に着目しました。

＜稚内市子育てファイル「あゆみ」＞

○H28年度から配布開始

- ・子どもたちの健やかな成長と子育ての支えに
- ・現在は、出生時、4歳児、小学校入学時に配布

※のちに出生時のみ

○子どもの成長を記録～家庭で記録

○子どもの様子を共有

2 「孤育て」させないために…人と人をつなぐ

子育てが孤立した状態になっている親子のまわりには、行政も学校も、そして地域にもたくさんの人々がいますが、つながりが途絶えている、もしくは希薄になっていることが多いものです。そんなときは、見えない壁ができてしまい、ますます誰にも相談できず、救いの手も届かないものだと思います。そこで、子育てファイルを通して、子育てファイルを共通の話題にして、つながりをひろげ、たくさんつながりの中から、手をさしのべたり、情報を得たり、伝えたりすることができるのではないかと考えました。そうなることで、人や制度など、救いの手が何か一つでもとどけられるのではないかと考えています。まずは、保護者どうしのつながりを広げ、強める第一歩として、モニター制度そしてモニター茶話会を企画しました。

Ⅱ モニター茶話会について

モニターを東地区の声間小学校、稚内東小学校で募集しました。書き方や使い方の悩みを交流したり、先輩の声を聞いたり、一緒に使い方を考えていきましょうと呼びかけたところ、声間小から2名、東小から5名の方がモニターになってくださいました。

1 茶話会の様子

茶話会では、まずはじめに、表教育長より、委嘱状が手渡され、「今時、日記のように綴る方は少ないとは思いますが、子どもの成長を記録しながら子どもと向き合っていくことも価値のあることだと思います。」と挨拶していただきました。次に、話題提供として、メンバーの一人でもある稚内市生活福祉部健康づくり課長の細川さんから、ご自分の子育ての経験や保健師の立場からみた子育てファイルについて話題提供していただきました。



その後、意見交流を行いました。まずはじめに自己紹介を兼ねて我が子の自慢できることを交流しました。「いつも笑顔」「めげないところ」「努力家」「やさしさがある」「責任感が強い」等々、お母さん方はわが子の良いところをすぐに見つけていました。そして、子育てファイルの活用について、たくさんのお母さんの意見が交流されました。



- 我が子の自慢（自己紹介）
- 書いてみて思ったこと
- 良いところ、改善点、要望
- 活用が広がるためのアイデア

2 意見交流より

交流では、保護者（使用者）の目線から、実際に記入したり、使ったりした、生の声を聞くことができました。また、今後につながる改善点等の意見もたくさんありました。

3 つながりがみえました

意見交流から、たくさんのつながりも見え、子育てファイルの活用で人と人とのつながりは確実に広げられると確信しました。

- ◎ 子どもと一緒に書く、一緒に選ぶ、ことで「親子のつながり」が深まります。記録を将来、一緒に振り返ることも素敵なことです。
- ◎ 先生と書く。学校で書く、ことで、「保護者どうしや保護者と学校のつながり」が広がります。悩みの共有や情報交換にもつながります。
- ◎ 書いたことを活用することで、学校や関係機関とのつながりが強まります。情報共有は、連携や支援の第一歩です。

<保護者として>

- 配布が母子手帳といっしょだと書き始めやすそう。
- 写真をはることは取り組みやすい。
- 医療機関受診ページは書きやすく、活用しやすい。
- 書いておくといろいろな相談時に役立つ。など

<行政より>

- 赤ちゃん専用ページあります。追加ページできます。
- 配布時期や、より使いやすさを求めて改善を。

<学校では>

- 入学のしおりなど差し込みできるプリントを。
- 参観日等の懇談会で持ち寄って。

Ⅲ おわりに

子どもの貧困問題、また、その連鎖を断ち切るためには、教育や福祉の充実はもちろん、地域や関係機関の緊密な連携は欠かせません。「縦・横・ななめ」のつながりによる教育や支援の充実ができる稚内市の利点を生かした解決の道を今後も探っていきたいと思います。

今はまだ、東地区の中でも小さな一歩ではありますが、このつながりが、東地区はもちろん、市全体にも広がっていくものと信じ、今後もチーム一丸となって取り組んでいきます。

2 第3回稚内市子どもの貧困対策市民シンポジウム (5) 南地区チーム報告

南地区貧困対策プロジェクトチームのネットワークプランの柱は、2つです。

一つ目の柱は、中学校区を単位としたネットワーク機能の充実です。

二つ目の柱は、小学校段階からのキャリア教育の充実で希望を育むです。

南地区 貧困対策プロジェクトチーム

ネットワークプランの柱は 2つ です

1つ目の柱は

中学校区を単位としたネットワーク機能の充実

2つ目の柱は

小学校段階からのキャリア教育の充実で希望を育む

それではまず、一つ目の柱のネットワーク機能の充実について、その歩みに触れたいと思います。

平成23年頃は、小学校・中学校がそれぞれ単独に、不登校児や支援や激励が必要な保護者・家庭に対応しておりました。しかし、不登校児や問題行動を起こす子どもたちを取り巻く状況は様々な要因が絡み合っているため、学校だけの力では限界がある。地域の力や関係機関の力を借りなければ、課題の解決にはたどり着かないと考え、平成23年の10月にまず、「南小学校 子育て支援ネットワーク」を立ち上げました。

メンバーは、校長・教頭・指導部長・養護教諭・担任・主任民生児童委員・SSWという顔ぶれでした。しかし、この時はすでにいずれは中学校区のネットワークをとということも念頭に置いておりました。

平成24年度は、この体制で年間7回のネットワーク会議を開催致しました。

しかし、平成25年度の4回目から、大きな変化が生まれました。かねてから検討してきたネットワークに港小・南中の管理職と教職員も参加し、「南地区 子育て支援ネットワーク」が誕生しました。これにより、兄弟関係の場合など、一つの場で考えることが出来るようになりました。

そして、平成26年度には、更に大きな輪の広がりが見られました。

当時、適応指導教室の室長であった加藤良平先生や行政から子ども課の課長、そして幼稚園・保育所からも参加をいただきました。

平成27年度は、この広がりを見せた体制で、年間10回の開催をすることが出来ました。平成28年度は、ネットワーク機能の充実が図られました。

ネットワーク会議の中で話題になった子は、稚内高校定時制に進学するケースが多いのですが、その定時制の先生が参加していただけるようになり、子どもたちの中学卒業後の様子などもつかむことが出来るようになりました。

また、4回目には、この貧困対策プロジェクトの関係から、特別ゲストとして、福祉・医療の立場から、稚内市生活福祉部社会福祉課長・市立稚内病院医療支援相談室医療SW・稚内市社会福祉協議会自立生活支援センター長のお三方をお招きして、生活支援・医療支援のために、どんなお仕事をされているか。どのような場合に、学校は連携を求めればいいのかなどを学ぶことも出来ました。

そして、平成29年度は、広がりを見せたメンバーで、毎回22~3名が集まり会議を持っております。

一つ目の柱は、ネットワーク機能の充実と言いましたが、充実は図られてきていると自信を持って言えます。ですので、皆さんに強く訴えたいのは、ネットワークの力を頼って下さい。相談して下さい。ということです。

幼保から大学までの参加でネットワーク会議の輪は広がり、機能的になっています。貧困対策プロジェクトの関係性から行政・医療・福祉とのつながりもできています。

どこかに声をかけていただければ、ネットワーク会議や貧困対策プロジェクトを介しながら課題の解決につなげることが出来ます。

自分のことを相談する勇氣、相談する力を出すこと。

そして、みんなが地域コーディネーターとしての役割を担って、困っている人に気づいたら、どこかに相談する。このことを一つの柱の中で強く訴えたいと思います。

2つ目の柱は、小学校段階からのキャリア教育の充実で希望を育むです。

今の子どもたちの自立の課題・現状を考えてみると、自尊感情や学習への意欲の低さ。貧困によって未来に希望を持っていない状態に置かれた児童生徒の存在があります。

ですので、小学校段階から中学校・高校生活に夢を持てるようにすること。自分に自信を持ち、学ぶ意味を理解すること。

多様な職業・生き方を知り、夢や目標を持てるようにすること。すなわち、キャリア教育の充実が大切になってきます。

稚内高校の元紺谷校長先生の講話を聞く機会がありました。稚内高校が単位制に変わることに関わって、幼保小中のキャリア教育の充実を期待するというお話があり、重要性を再認識しました。

キャリア教育を南地区小中連携の柱の一つにしていければと考えています。

今年度を足がかりに、小中9年間の計画的なキャリア教育の研究と実践を積み上げていきたいと思っています。

そのためには、今後も、南小・港小・南中との連携が必要条件です。

あわせて、小学校は2020年度、中学校は2021年度の新学習指導要領の完全実施を見据えた新教育課程への位置づけが大切になってきます。

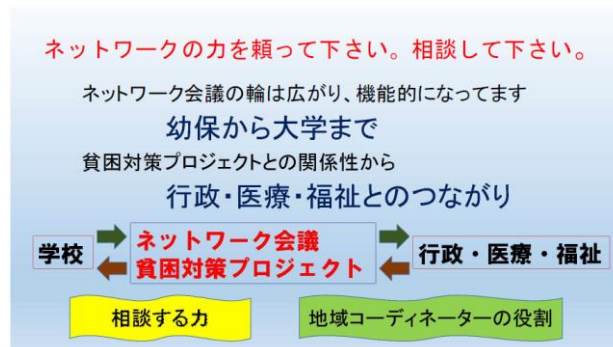
何か新しいことを大上段に構えてやるということではなく、現在、各学校で行われているキャリア教育を整理し、稚内や南地区にある人的資源や特色ある職業を洗い出し、融合させていくということで工夫改善しながら進めていきたいと考えます。

現状、小学校では商店街やバックヤードを含めたお店見学、図書館や郵便局・消防署・警察署などの見学、JA青年部の出前授業、港小学校では港湾見学でドッグを見学したとも聞きました。

中学校では、夢を持つことや職業観に関わる講演を講師を呼んで実施したり、2年生の時には職場体験学習を、3年生の修学旅行の中では専門学校訪問を実施したりしています。そして、今年度は市内の中学生を対象に医療体験講座も実施されました。

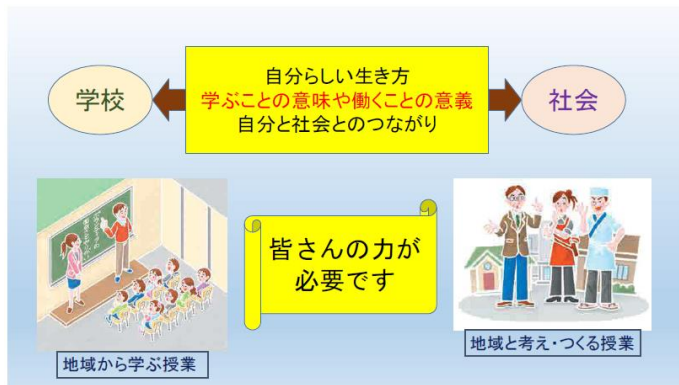
プロジェクトの中では、更に、ふるさとの良さや仕事の価値を知り、希望や目標が持てるキャリア教育の追求が出来るのではないかと話が出ました。

例えば、サハリン航路の仕事や夢を携わっている方に聞いたり、医療と健康のまちづくり応援団の方にお



話をさせていただいたり、建築のお仕事の夢や大変さも聞いてみたいなど考えています。あと、稚内にはニューステーションでも紹介された、稚内信金があります。金融のお仕事の実際などを話していただけると興味深いと思います。また、現役の高校の先生や卒業生・在校生に稚内の高校で身につけることが出来る資格や将来の夢などを語ってもらうことも職業選択に生きてくると考えます。まだまだ、みんなで知恵を出し合えば、様々な取組が出来ると考えます。

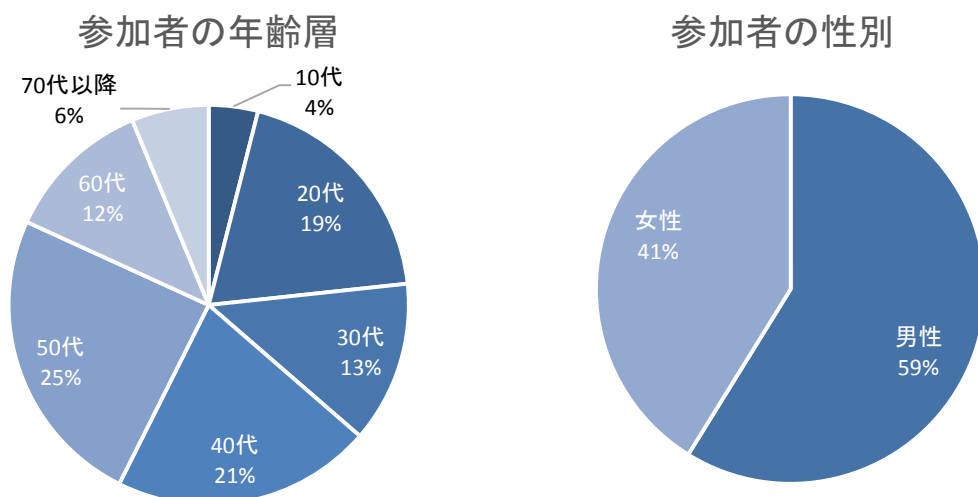
地域から学ぶ授業。地域と考え・つくる授業。学校と社会を結ぶことで、自分らしい生き方を考えたり、学ぶことの意味や働くことの意味を押さえたり、自分と社会のつながりを実感出来ます。キャリア教育の充実のため、学校も頑張りますが、皆さんの力が必要です。



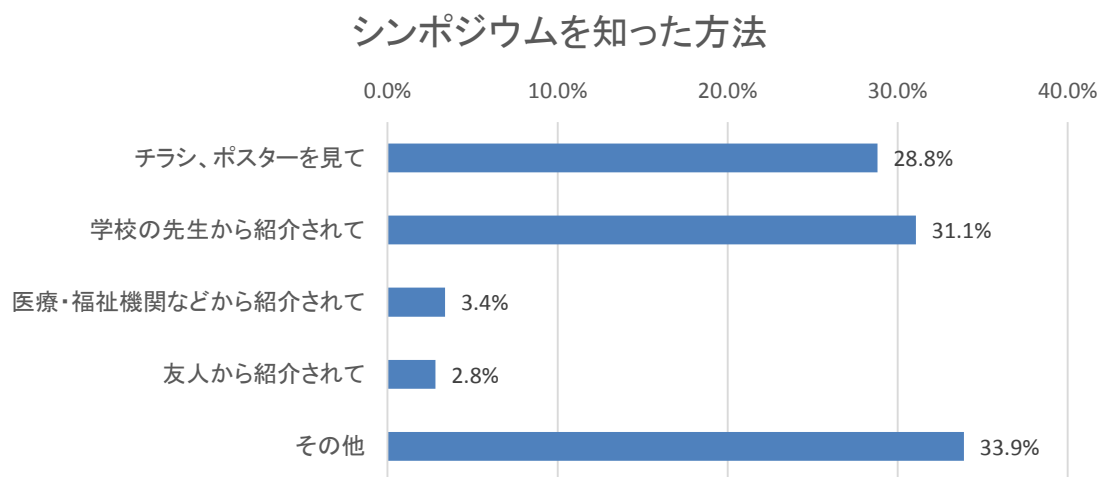
2 第3回稚内市子どもの貧困対策市民シンポジウム (6) 参加者アンケート集計

参加者 220 名
回答数 178 名 (回収率 80.9%)

(1) 年代、性別に○をつけてください。



(2) 本日の講演・シンポジウムをどこで知りましたか。



(3) 本日の講演・シンポジウムの内容について

① 松本先生の講演の感想や意見をお書きください。

- 遠い稚内までお忙しい中来て下さりありがとうございました。
- データで説明いただき、所得と人とのつながりの関係がよく理解できた。人とのつながり、支援策が大切であることをあらためて実感できた。地区の提言がそれぞれ間違っていないこと、現実的に続けていかなければと感じた。
- 時間的に何を聞いたら良いかを途中で残念です。(1回~3回出席)
- 調査結果、お知らせいただきありがとうございます。調査結果からわかることたくさんありました。
- 短い時間でしたが大変良かった。
- 生データを理解いただいて非常にわかりやすく「貧困」に対する理解を深めたと思います。また、「貧困層」と「高額層」との差は金銭だけでなくいろんな面で状況が重なってくるのがわかった。情報発信や現地にあったアプローチの重要性を実感した。
- 何度聞いても(3度目)わかりやすい。頑張ろうと思える話を聞ける。
- 調査からも確実に所得の低い方が支援から漏れやすい現実、そこを地域でカバーしていかなければということを感じた。親が貧困であれば、その子は貧困である。家庭を中心に考えていくことが必要であると思いました。
- 科学的データから今後の取り組みで大切にすべき視点を与えてくれたと思う。進むべき方向は間違いないと確信を持つことができました。
- 4地区の取り組みに圧倒されたと言っていたことが嬉しく思った。稚内に勉強しに来たと言葉にも感動した。
- 所得の関係から見えたことが参考になりました。
- 所得の低い人の方が制度を知らないことが多い。地域がつながりをもって貧困対策を進めるということとても勉強になりました。
- 貧困の連鎖を断ち切るために、で、どうしたらいいのですか。
- 貧困世帯が多い中で制度を利用する事を知らない人が多いと思います。これからも相談を進める事や私も勉強して良い方向になることを願います。
- データをもとに話されて大変勉強になりました。
- 支援についてどのように必要な人に届けるのか、知らせるのか、その仕組みを作り上げることが大切だと言うことが心に残りました。
- 急ぎ足で聞くのがもったいないくらいの内容でした。データに基づいて「負(貧困)」のスパイラルに陥っている家庭(親子)がいるのだらうと感じました。
- とても具体的ですごく良かったです。もう少し長く聞きたいです。
- 貧困問題に立ち向かうとき、つながることの大切さを学びました。
- お忙しい中稚内に来ていただきありがとうございます。短い時間にたくさんのデータを見せていただき感謝申し上げます。
- 貧困のデータで北海道が貧困率が高いのに驚きました。貧困世帯に対して積極的に「つながり」をつくる環境作りの必要性を感じました。
- 「格差」の埋め方をお聞きしたかった。調査結果は予測できるものでした。「時間」との関係性が高いようです。
- 調査の大切さ
- 最新のデータを紹介していただき大変勉強になりました。必要な方を支援につなげることを今後も工夫していきたいと思います。
- 統計から裏付けられる「稚内」の取り組みであることがわかった。
- データが細かくわかりやすかった。
- 調査結果がとても興味深かったです。来年も是非聞きたいです。
- 統計から貧困の姿がよく分かりました。貧困家庭に②のような取り組みが身近にあること、手をさしのべてくれる場所があることを発信していく事が大切だと知りました。

- 困ってる人に情報が届かないのは納得ではききました。「つながる」ことが大切だと改めて思いました。
- 貧困になりがちな各データを見せていただき参考になりました。
- 現状とデータが示されたが、意外なことはなかった。今後の話に期待していたので少し残念に思った。
- 北海道は全国と比べて母子世帯が多いことに驚きました。孤立しがちな所得の低い層への対策は必要だと感じました。
- 各地区の取り組みの熱い話の後で思いがけず松本氏の話がかすんでしまったように感じてしまいましたが、松本氏の謙虚な姿勢に頭が下がる思いです。
- 稚内の取り組みが学校・地域を中心に進んだものであることを証明して下さるような講演でも嬉しく聞いておりました。
- データから見えてくるもの、そこからつなげていくもの大きさを感じた。
- 貧困の問題についてわかりやすくお話して頂いて、ありがとうございます。改めて考えることができました。
- 所得が低いところへの支援が必要ということを改めて感じました。
- もう少し詳しく聞きたかったです。(貧困状況について)
- 実際にデータ、数字でどのぐらい貧困で困っているのか等話が聞け、貧困家庭はなかなかその事を相談できずにいるんだと感じた。
- 相対的貧困に当たる家庭がおかれている状況をデータでわかりやすく解説していただきありがとうございます。特に情報が行き届いていない、相談できないということがわかりました。
- 松本先生のお話、もっと聞きたいです。でも毎回来てくれるので次のお楽しみに。
- もう少し時間がほしいと感じた。
- 短い時間の中、適切なアドバイスありがとうございます。あと 1 時間くらせ話を聞きたかったです。
- 子どもの貧困実態調査等からネットワーク等に貧困率が関係あることに興味深かった。
- データを用いた講義により、孤立させない取り組みが重要と感じました。
- たくさんのデータをもとにわかりやすく説明していただきとても勉強になりました。
- 数字上のわかりやすい説明と統計に基づく理解が深められた。解決・打開策等を聞きたい。
- 貧困との相関関係がよくわかりました。
- 松本先生の「自分も稚内来て勉強になる」という旨のお話を聞いたとき改めて稚内は子育てに対する意識が強いなと思いました。子どもの貧困が根絶されることを願って…………。
- 実際の統計での解説によく分かったと思います。子どもの経験に余り違いがあっては将来に影響を残すのではないかと思いました。
- データの紹介をわかりやすく伝えてもらった。
- 各地区の発表が立派で時間を費やしたようですが松本先生のお話をもう少しゆっくり聞きたかったです。
- 道の調査より、親は子を病院に連れて行っている、連れて行けていないというデータを見た際、親が自分自身はがまんして病院にいけていない結果があった。子どもの問題を考える上で、親が抱えている負担を無視はできない。所得の低い世帯は子どもを任せる人がいない(孤立している)また、制度を知らない場合が多い。
- 松本先生が言っていた稚内の取り組みは、全ての運動・仕組みづくりの学びになりました。データも具体的でわかりやすかったです。ありがとうございます。
- あわただしく話をさせていただきました。いまいちものたりなさを感じました。
- 短い時間の中、多くのことを語ってくれました。もう少し、話を聞いてみたいというのが率直な思いです。お忙しいなかありがとうございます。
- 駆け足だが非常にわかりやすかった。
- データはわかりましたが、ちょっとむずかしく、かつ当たり前の話かなと思いました。

- 調査結果をもとに貧困についてリアルなイメージで考えることができました。
- 遠くから無理をしてきていただいたのもっとたくさんのお話を聞きたかったです。経済的貧困を軽減していく方法を困っている人に伝える方法を見直さなければだめだと思いました。
- データを見的过程中で改めて貧困と子どもたちの症例が関わっていると感じました。貧困で悩んでいる人が支援を受けられるようみんなで協力していきたいと思います。ありがとうございました。
- 現在どのような状況なのかがとてもよく理解できた。子どもの経験の差がさらに貧困の差を広げるのではないかと思った。
- 統計的なデータから今抱えている貧困問題を言葉で表してくれたことで現実味をいっそう感じることができました。
- 客観的な数値を示してくれてありがたく思います。貧困層の人たちにどのように働きかけるのか先行例が示されるとなお良かったです。
- とても良かったです。
- ネットワークのサポートを貧困層にどう届けるかが地域の取り組みであることがよく分かった。貧困層はネットワークにとりこまれにくいということが課題であると認識できた。
- データをもとに話してもらったのでわかりやすかった。経済的な理由から子どもへの教育的影響があるだけでなく、親への影響、また生活経験の差も大きいことがわかった。
- 貧困貧困といわれていますがイマイチピンと来ていなかったのですが、今回のデータは目からウロコでした。貧困の現状はもっと全国的に知られるべきだと思いました。
- もう少し時間があるといい。
- 実際のデータをもとにした講演だったので信頼性の高い話をたくさん聞くことが出来て良かった。遠いところから稚内までいらしていただきありがとうございました。
- わかりやすかったです。つながることの大切さがデータからもわかりました。
- 貧困って単にお金がないだけでなく、休みが取れない、他の人とつながれない、どんどん孤立する、相談の仕方を知らないということがデータで出てるんですね……。確かに現場で支援の必要な家庭と考えられる所に当てはまることが多いと思いました。
- データから状況を整理されていて教えていただいたことであらためてまわりから働きかける体制作り、つながりの大切さを感じました。明日から自分のできることをまわりと相談しながら進めたいと思いました。
- 子どもの貧困を社会で考えてみる。父母が二人で働かなければ家計が成り立たない。この国、母親は子どもが社会へ出発するまでの国の主張と責任に選挙権二票あることを。
- 生活するためになにが必要で何を優先させるのかわかりました。それを支援する必要性を感じました。
- 3年続けてきていただいたこと、知らなかったです。今日は駆け足で訪問していただいてありがとうございました。
- 統計調査から貧困のきざしやサインをキャッチできる感度と少しでも上げられるようになったかもと感じました。「少し」違うことがその背景を知るきっかけになるのは生徒指導と共通するところがあると感じております。
- 貧困を抱えている家庭に対してどんなことができるか学校として、担任としてどんなことができるか気になりました。
- 現実的な講演で良かった。
- 数字のデータが後ろの席だったこともあり、またたくさん細かな資料が多く、頭に入りづらかったです。
- 「貧困な人ほど孤立が進み、支援の制度から遠くにいる」この実態にかみ合った支援が必要。支援は人のネットワークですね！
- 数字が具体的でわかりやすかったです。
- 年収が低いほど負の連鎖になっていることに気づいた。ただ子どものスマホ所持率が年収にかかわらず変化がないのは以外だった。

- 短い中豊富なデータからわかりやすいお話でした。今後の更なる分析が興味深いです。
- データからのお話は大変興味のあるものでした。時間がかぎられていましたが、もっと深く聞きたかった内容でした。
- まだまだ困った子、親が多いですね。これからが大事だと思います。
- データで確認したことで改めて貧困家庭は生きるのが大変だとわかった。「子育てをさせない」という言葉もそうですが、やはりつながりは必要なことですね。
- 所得が低い世帯ほど子育ての悩み等を相談できる人がいないこと、また、北海道は低所得の割合が多いこともデータを通して学ぶことができました。地域の中でのつながりの大切さを痛感できました。
- 低い収入の世帯のデータに興味関心がわいた。
- 所得の少ないひとのつながり希薄さなど調査結果が参考になりました。稚内市ではつながりを大切にする取り組みをしようとしているということも改めてわかりました。
- データは実感と重なる部分が多かった。項目によってはこの地域の方が高いものもあると思う。「あー、そうだろうな」と思うものばかりだがそこから何をするのか、どんなことがあるのか具体的に知りたい。
- 松本先生がとびまわらなくてすむ世の中になればいいなあ！
- 子どもが大きくなるにつれ、我が家も家計が切実になっています。家計のやりくりを考えていけないと子どもの幸せつかめないのかなと思います。夜勤のニーズも社会全体で考えないとダメですね。確かに一人親で夜勤していて生活をなんとかしていかなければならないのは事実です。でもその方たちのおかげで社会全体が回っているのも事実です。社会の仕組み自体を変えていかないとこの問題は永久に解決できないのではないかと思います。
- 貧困について様々なデータを知ることができ、とても興味深かった。
- 何となく人のつながりをつくっていく仕組みが「大切である」と思っていました。松本先生の講話を聞いて、貧困の問題が孤立を招き様々な支援や取り組みを知る機会が少ないことがとてもよく理解でき、先に4地区からの取り組みが大事であることを知ることができました。ありがとうございました。
- データを示していただき勉強になりました。短時間で少しもったいないと感じました。
- 3回目の講演ありがとうございます。たくさんのデータについて生命していただきましたが、集中して聞いていたのですが文字がもう少し大きいとよりわかるような気がします。
- 具体的な資料をもとに北海道および全国の貧困の事情が大変よく分かりました。そして大きなショックを受けました。今後に生かしていきたいと思います。
- 現実に見える状況を伝えていただきました。どうぞこれからも稚内の進むべき方向をしめして下さいますように。
- 松本先生のお話にずいぶん我が街は激励されました。貧困を考える「豊かさ」を感じたひとときでした。
- せっかくでありながら時間が少ない。わざわざ来て下さるのだからもっとしっかり時間をとったらどうか。
- データは現実を明確に表しますね。まさに問題は当事者がそのことを理解していないことです。持たない者をさらに持たなくする……。国の施策の問題。
- さまざまなデータが大変興味深かったです。「あー、そうだよなー」と思うデータが多く、改めて現実と対策を考えなければならないなあと思いました。データが小さくて見づらかったです。手元に同じプリントがあるといいなと思いました。
- もっと詳しい話を聞きたい、この一言につきます！
- 詳細なデータで貧困と子どもたちの生活が結びついていることがよくわかりました。

- 豊富なデータをもとに貧困の実態を学ばせていただきました。毎年きていただき学ばせていただいています。ぜひ来年もきていただきお話をききたいです。
- 調査データにもとづいた実態検証があり、説得力があったと思います。稚内市の活動が良い者だと話されていたのでみんなの力合わせで取り組みが継続できるといいと思いました。
- 北海道の貧困児童の状況が良く分かり、大変勉強になりました。
- 鮮度の高いデータを元に貧困家庭の特徴が分かって良かった。
- リサーチ結果と自分の思惑と同じであった。
- 学校がベースになっている。その裏側での教員の負担が過重なものになっていないか、教員の定数減の中、ボランティア精神だけでは対応できない実態があります。
- テータの裏付けをメインに稚内市の取り組みを応援していただいた。数値があると説得力がある。
- とてもわかりやすかった。
- アンケート結果を見て必要な支援や情報が本来届いてほしい所に届いていないという現状を知りました。個人として何が出来るのかを考えると共に国や行政にどう訴えられるのか、考える良い機会となりました。貴重なお話ありがとうございました。
- 調査を見ながら子どもの貧困の環境を深く感じました。
- 貧困は孤立を生じること、つながりが大事であることを感じました。どのような取り組みが必要であるか、私も一緒に考えてみたいと思いました。
- 理解しやすい講演でした。
- 松本先生が示されたデータは貧困プロジェクトの内容と非常にリンクしていると感じました。
- 低所得の人と所得 1000 万円以上の人とではかなり差が生じる。そして低所得者が人がどうすれば孤立せずに住むかをあらためて考える必要性を感じた。
- 遠い所、お忙しい中、短い時間でしたがわかりやすいお話でした。
- 昨年の道のアンケート結果の解析から、色々な支援制度を知らないのは、所得が低い層に多い、ということは、その周知の充実が一用だと言うことだと思いますが、親にも親になる準備を整えた上で親になってほしいと思います。松本先生、3年連続ありがとうございます。
- 支援が必要な人に支援を届けるには行政や地域とつながることが必要と改めて知りました。もっとゆっくりお話を聞きたかったです。
- 貧困家庭の保護者は孤立していたり、様々な情報を知らずにいるということが改めてわかりました。だからこそ各地区で行っている色々な人がかかわってのネットワーク活動がとても大切であると思います。
- データがほしかった。
- 時間が短かったけど説得力があった。
- 貧困の根に孤立があることがデータでわかり、ネットワークの大切さを強く感じました。
- もう少し聞きたかった。グラフを見ると良く理解でき、支援が必要な人ほど支援の情報が届いていないという問題があること、その解決が大切だと思った。
- データが多く貧困世帯の現状がとてもわかりやすく感じた。特に中2の生徒は思春期の時期であり、将来をよく考える時期でもあると思う。支援制度をよくすることで少し改善につながれば良いと感じた。
- いろんな情報から貧困の状態を調査し、どのような取り組みを行うべきか聞き、貧困対策についても積極的に行っていきたいと思った。
- データを使って貧困層の人々が孤立しがちだということをわかりやすくよく知ることが出来た。子どもの貧困に対して自分が何ができるかを考えていくこと、関心を持つことをまずは第一で考えていくことが大切だと思った。
- 量的データの分析結果は興味深い。当たり前のことをしつかり証明できており、また以外な相関もありそうなデータであるように思います。

- 北海道の貧困の状況や実態を知ることが出来た。貧困によって良い学びができない人も多いなど講義でも知っていたので、実感することになった。
- 貧困世帯である家庭が相談先を知らないという割合が高いことを知った。またそういった現状を改善するために今日学んだことを共有し、少しでも役に立てるようになりたいと思った。
- 具体的な数値を見て、子どもの貧困は親の貧困を解決するところに課題があると感じました。旅行経験のデータをはじめて見たのでとても参考になった。
- 稚内の取り組みにあった資料説明で確信を得た。
- 現在の家庭内の貧困状況についてよくわかった。教育をうけさせるためのお金の準備ができていないのは、所得が高い方であって、低い方ではできていない、しかし、全体だけを見ると準備できている。平均だけを見ても貧困という問題の核は見えないとわかった。
- データに基づき話をしていただき、勉強になりました。もっと聞きたいと思いました。お忙しい中、ありがとうございました。
- データを取る視点が考えられる以外のものもあって参考になった。
- 北海道における様々なデータから貧困対策には何が必要なのかを考えるきっかけとなり、時間・お金など必要な者が明確になったように思う。
- 大変勉強になりました。
- 貧困家庭、支援を必要とする人ほど孤立しやすい……つながりを作ること、支援策や制度が必要とする人に届けられること……大切なことをあらためて感じました。
- データによる講演はわかりやすい。話し方も上手で聞きやすかった。
- データを用いて話して下さったので、貧困が教育などに及ぼす影響について具体的に考えることが出来ました。
- 子どもに目が行きがちだが、その子どもを育てる親にも目を向ける必要があることを学べた。もっと講演を聴きたかった。
- つながること、教育ベースになっている稚内のすごさ再確認。
- データ解析による数字での説明はとてもわかりやすかったです。
- データでの説明であったのはわかりやすかった。もう少し話を聞きたいと思った。
- 資料が多いので、もう少しゆっくりと資料を確認しながら聴きたかった。
- 日本は経済的に豊かで給食費が払えない、暖気・ガス代が支払えないというのはほとんどないと思っていましたが、これだけあることに驚きました。また家庭の金銭状況により子どもたちがうける経験にも大きな差があることを知りました。こういったことが貧困の連鎖にもつながるのではないかと危惧している。

② シンポジストの発言への感想や意見をお書きください。

- ◆ それぞれの地区の取り組みが素晴らしかったです。
- ◆ 各地区の提言はそれぞれ視点は異なり、切り口は違っているが子ども・その親に手をさしのべる内容であったが、画面が小さくて見辛く、スライドが時間の関係で速く、読めないのが残念でしたが、プレゼンターの声のトーンや話し方（練習の成果）が良かった。キーワード「つながり」、全てに共通。
- ◆ 地区の住民との関係性を明らかに。
- ◆ 各地区の取り組み、興味深くききました。ご苦労様です。
- ◆ 各地区工夫よくできてたと思う。
- ◆ 潮見地区 子どもの声を聞き取り、北地区 様々な制度の活用、東地区 子育てファイルの活用、南地区 ネットワークの力を頼って下さい。どの地区のプロジェクトも地区にあった提言をされ動き出している。稚内の子どもの貧困対策をされていること、大変良かったと思う。
- ◆ 地区の「らしさ」が出ていて素晴らしかった。

- ◆ 潮見地区、映像としてとても力強く、子どもたちの日常が伝わる非常にインパクトのある発表でしたが、ただし、「貧困対策にはどのようなつながりがあるか少し見づらかった。抽象なまま終わってしまった印象が残りました。北地区、たくさんの制度があることを知ることができて勉強になりました。ただ、北地区の「子ども貧困」問題は「金」？もう少し具体例を紹介していただけたらいいなあと思いました。東地区、子育てファイルを利用したたくさんの取り組みがわかりました。とてもすてきだと思います。南地区、ネットワークの実際の利用状況を知りたかったです。
- ◆ 潮見地区、連携していく土台が確立されたんだという印象。北地区、「お助け帖」は良いアイデアだと思う。+（プラス）伝統を生かす。東地区、学校と親は「その子・家庭」の状況を把握できやすいのかな？ファイルはツールにすぎないような……大人がつながるイメージが湧かない。南地区、着実に一步一步前進してるんだと思った。具体的だなと思った。
- ◆ 地域の資源を最大限に活用されていると感じました。特に、北星大学との連携、大学生が貧困問題に目を向けて今後も関わりを続けていくことが貧困問題を意識することに役立つと考えました。様々な機関が主体的に関わっていくことが必要だと思いました。
- ◆ 地区の特色にあわせて独自の取り組みが展開されようとしている。何か大きな元気をもらった感じがした。
- ◆ それぞれの地区の取り組みが素晴らしかったです。取り組みにお疲れ様。
- ◆ 4地区それぞれの取り組みがあり、いろいろな観点で考えていくことができるんだと思いました。（解決に向けて）
- ◆ 4地区の取り組みは素晴らしいです。頑張ってください。
- ◆ 各地区の取り組みに感謝ですが、4つの地区がバラバラにならずにそこでもつながっていただけらすてきだなと思いました。
- ◆ 各地区の取り組み内容に興味がつきませんでした。できれば資料を手元に、せめてどこで手に入るのか情報がほしかったです。発表や当日までの準備まで本当にご苦労様でした。
- ◆ 自分の知らないところでとても有意義な活動がされていることを知りました。稚内市全体で今回作成されたもの、活動内容がもっと認知されるとよいと思います。
- ◆ どの提言も力が入った聞き応えのある内容でした。
- ◆ 各地区の特色ある発表を楽しむことができました。
- ◆ 子育てファイル、子育てネットワークの活用など大変参考になることが多かったです。子育てから離れましたが、何か協力できたらと思いました。
- ◆ それぞれが市全体になるといいですね。（映像、どれもすばらしい）
- ◆ 15分は短いでしたが……。北のリーフレットと子育てファイルがほしい。映像は、いろんな方にも理解度が高められるのでとても良いです。ゆっくりの説明であればよりよいと思いました。
- ◆ 4地区とも知恵を出し合った成果。みなさん、お疲れ様でした。
- ◆ それぞれの地区の取り組みを生かすことはそこに住む子どもたちにとって幸せなことです。今後も進化させていくことが大切だと感じました。
- ◆ 各地区で色々な取り組みをしていることが分かった。
- ◆ 各地区の貧困の状況が聞けると思っていました。
- ◆ 各地区のプロジェクトチームの個性が出されていて感心しました。この活動で子どもの貧困対策が進むと良いですね。
- ◆ それぞれでやっていること、一つになるといいと感じた。子育てファイルと貧困のつながりが見えにくいと思った。
- ◆ 3年目の進歩はすばらしい。
- ◆ 各チーム、動画などがあって見やすいなと思いました。特に潮見が地区の動画が素晴らしかったです。

- ◆ 正に、人の顔が見える発表で、貧困に取り組む輪が広がっているのを感じます。この輪がさらに強いものとなりますように。
- ◆ 潮見地区の「稚内から世界へ、世界から稚内へ還元する」という考え方、とてもすてきだと思いました、東地区の子育てファイルの照り組は画期的なものだと思いました。
- ◆ 様々な地区の取り組み方の違いはありましたが、子育てしやすく、つながっていく大切さや子どもの目標や希望を応援する取り組みがすごいなと思った。
- ◆ 映像などを使い、わかりやすいお話でした。
- ◆ 各地区とも実際に行っていることをわかりやすくまとめており、聞きやすかったです。
- ◆ 各地区のネットワークが本当に困っている家庭に届くための具体的な取り組みがイメージできるともとてもいいかなあとと思いました。
- ◆ 日々の活動だけでも大変なのに発表のための準備 etc.大変だったと思います。何かに向かって動いている感じがしっかり伝わりました。ありがとうございました。
- ◆ 各地区ごとに貧困対策として色々工夫したり考えている事が分かった。稚内って本当に「つながり」が出来ているんだと感じた。
- ◆ 各地区の取り組みが今後につながると良いと思います。
- ◆ 人と人のつながりや多様な取り組みの連携で子どもの貧困を断ち切ろうとする努力を感じ取ることができました。各地区の方々、お疲れ様でした。どの発表も楽しく見ました。
- ◆ この貧困対策が素晴らしいものになってきました。この貧困対策の先に街作りに関わる市民の輪になることを願います。
- ◆ みなさんのがんばりに拍手！
- ◆ 自分が高校生のときに奨学金の制度等がよく分かっていなかったのが保護者だけでなく子ども自身に情報を提供するのとても良いと思った。
- ◆ 各々テーマが有りよく作り込まれていた。
- ◆ 各地区の特徴が出た発表でとても良い勉強になりました。
- ◆ 地域のつながり、キャリア教育は大変重要と感じました。
- ◆ どの地区も幼い時期から大学まで子どもの成長をたどってその時期に合った支援をしていこうという思いが強く伝わってきました。
- ◆ 特別な貧困の話断片的に聞いて、この街の対策はどうなっているのかと思っていましたが、各地区でこんなに思いをみつめていることを知り、力強く思いました。これからは相談する方向を教えてください。
- ◆ 各地区ごとに特色ある取り組みをしていることがわかって、稚内ってすごいなあとと思いました。
- ◆ 各地区の提言がすばらしい。取り組みに感心しました。取り組んでいる人たちはそれぞれ知的にも優れている人たち、いわゆる恵まれた人たちだと思います。
- ◆ どの地区も仕事の合間をぬって良い発表になるよう、よく取り組んできたと思いました。これも子どものためだからこそできた事なのかと……。
- ◆ 4つのどの地区も素晴らしい取り組みだと思います。稚内市民すべてがつながりこれがオール稚内の運動なんだと感じました。子ども中心に地域をつくり、大人やすべての機関が支えあっている。全国的にも誇れる素敵な提言だと思います。この取り組みが日常的に普通の活動になるよう稚内市民として協力していきます。
- ◆ 各地区で知らないうちにいろいろな活動をしている事が良い事だと思いました。
- ◆ 稚内市にはこのような子どもを伝えるコミュニティがあることを知りました。私もまたコミュニティの一員であることを自覚するとともに困ったときそのつながりの中に入っていきたいと感じました。
- ◆ 各地区の取り組みや思いを知ることができた。
- ◆ 地区の特徴があつてよかったです。今回参加するまで他の地区のことを知らなかったもので、興味深かったです。キャリア教育には全市的に協力していきたいです。
- ◆ 市内の各地区で様々な活動

- ◆ 各地区ごとに様々な特色があつてびっくりしました。東地区の子育てファイルモニターさんたちの話を聞いてとってもステキだと思いました。
- ◆ 将来のビジョンがはっきり見えた。これからも頑張つてほしいと思った。
- ◆ 4 地区それぞれの活動が地区という決して大きい規模ではないから特徴に寄り添つて進められていることを実感しました。
- ◆ パワーポイントのスライドを紙ベースでいただきたかった。貧困の要因となる障害(発達障害)との関連が欠けていた。
- ◆ それぞれの地区の取り組みの紹介、勉強になりました。ただ、授業公開など行われていないことがこうした情報が広がらないことにつながっているように思います。(南地区のキャリア教育について)
- ◆ 抽象的な内容が多かったが一步ずつ着実に進んでいることがわかった。
- ◆ とても良かったです。
- ◆ 潮見 貧困対策の具体提案を打ち出していきたい。北地区 経済支援について、貧困対策なのだから貸し付けでは手を出さない。国は実質教育の無償かを目指しているのだから給付型でないと意味が無い。貧困のまま大人になり、貧困のまま一生を終えることになる。東地区子育ての取り組みであり貧困問題から外れている。貧困のために人とひとのつながりを持ってない、人とつながることがどういう形で貧困の解決になるのか、その dynamics を考えていただきたい。南地区 ネットワークでどのような貧困対策を講じも解決した事例を1つあげていただきたい。ネットワークの充実が達成され、貧困に対してどのように機能したのか教えていただきたい。
- ◆ 勉強になりました。メンバーが登壇するのは……。
- ◆ 福祉面で充実しているという点や「子育てファイル」の意義を学ぶことができた。親同士、学校間での連携を充実させなくてはいけないことを改めて認識しました。
- ◆ 様々なつながりが増えてきていることがよく分かりました。今後もつながりを増やしていつて地域全体を巻き込んだ活動をしてもらいたいと思います。
- ◆ つながりの大切さを学んだ。
- ◆ 各地区の取り組みが分かった。異なる地区同士での情報を共有できてよかったと思う。また子どもたちや家庭の生の声を聞いたこともよかった。
- ◆ 公教育の役割として貧富の差と闘いながら子どもたちの幸福のために働く、そのために子どもに愛情を注ぐことが必要なのですが、そのために必要な心の余裕が私たち教員にない現状です。慢性的に解決しない人員不足、事務作業の増加、得点評価作業の肥大、その一方で働き方改革の名のもとに勤務時間の縮減だけを機械的に押しつけ、根本的な業務内容の縮減がされない………これも大きな社会問題だと思います。現場は悲鳴を上げています。
- ◆ 子育ての悩み、学校教育の悩み、生活の不安、将来の不安、とまどいなど、さまざまな方々に支えられていること、声に出すことの大切さ、稚内の強さを感じました。
- ◆ 各地区の取り組みがそれぞれの地区の取り組みによってさらに市内的に活動が活発化することを願います。より、市民一人一人、家庭にこれらの活動・取り組みがあるということを知っていただくことが必要だと思います。
- ◆ それぞれの地区が子どもたちのために力をつくしてくれていることに感謝したい。やはり、キーワードは「つながる」でしょうか。みんなとたくさんしゃべり、交流することです。すぐには結果が出なくても、何かヒントをもらえるのではないかと思います。
- ◆ 定期的な活動を期待したい。
- ◆ このような取り組みをしていることは知らなかった。4 地区で様々な取り組みがされており、とても勉強になりました。
- ◆ とても各地区ともわかりやすかったです。良かったです。

- ◆ 各地区とてもすばらしい提言発表だったと思いますが、何か結果はでているのでしょうか。具体的な話を聞いたことがありません……。
- ◆ 4 地区が熱心に取り組んでいることすばらしいと思いました。ネットワークに加えていただき、一緒にできることを考えていきたいと思えます。
- ◆ 「オール稚内」の動きが良く見えた活動紹介でした。支援を必要としている家庭へのアプローチを中心にしている地区、潜在的な貧困層を含む可能性のある対象としてすべての子育て家庭にアプローチしている地区、子育てのツール活用、制度の運用を試行する地区、組織化を整理して活動する地区など特色があって稚内の広さと深さを知ることが出来ました。
- ◆ 子育てファイルを活用してつながりができたり子どもの成長や支援を切れ目無く見ることができるのは良いと思いました。
- ◆ 大変お疲れ様です。今後もよろしくお願ひします。
- ◆ 子どもに希望を与えて実現するお金はどうします？
- ◆ 「つながりの危機」を生まない取り組みが「貧困対策」なのだということがよく分かりました。
- ◆ 各地区の提言からつながりの輪の広がりがよく分かりました。稚内市の一市民として何か自分にもできることはないかと考え、また稚内市の素晴らしさも感じ取ることが出来ました。
- ◆ それぞれの地区が子どもたちのために力をつけてくれていることに感謝したい。やはり、キーワードは「つながる」でしょうか。みんなとたくさんしゃべり、交流することです。すぐには結果が出なくても、何かヒントをもらえるのではないかと思います。特徴があつて良かった。共通点は、子育ては連携（幼・商・中・高・大・家庭・地域・行政・関係機関）さらに連携拡大→医療・福祉・民児協など。いずれも子どもの家庭・地域の貧困の深刻化に答え、素晴らしい実践。そしてさらに今後……。
- ◆ 今年は時間通りで良かった。
- ◆ 詳しくわかり、有効であると感じました。
- ◆ つながりが子どもの子育てにとっても重要だと再認識しました。
- ◆ 各々の地域の特徴を生かした取り組みが面白く興味深かったです。東地区の茶話会はいいい取り組みだと思いました。
- ◆ どこの地区の取り組みもすばらしいものですが、現状スタート地点に立ったところだと思います。これからの成果が楽しみです。
- ◆ 自分の地域以外の取り組みに触れ、稚内市の子育て支援はどのようなものがあるのか？子育てファイルの活用の仕方等学ぶことが出来ました。
- ◆ 各地区の本気度が大変よく伝わりました。北地区の「おたすけ帖」は大変素晴らしいと感じました。
- ◆ 貧困というテーマの解決に様々なアプローチの仕方があることを知った。
- ◆ パワーポイントを使い、映像も含めて手の込んだ準備、お疲れ様でした。
- ◆ 各地区で色々ゆっていることはわかるがだからといって何かが変わってきているという実感はまったくない。ネットワーク会議は情報を出しても何も変わらないし、何が話し合われているのか情報もどってこない。地域の中の学校の教頭すら知らないことは実践としてどうなのか？
- ◆ 各地区の特色を生かした実践を伺えて今後の地域作りなどで参考になりました。これからの地域の子育てでは若い力や意見・考え方がほしいと考えます。上辺だけでなく、若い人たちが住みたいと思える地域を考えていきたいと思ひます。
- ◆ 自分の住んでいる地区の子育て支援の取り組みについて知ることができ良かった。
- ◆ かく地域ごとのアクションが縦横に困っている子や保護者へあたたかく届くように願ひます。
- ◆ いよいよ具体的な子育て運動の一步が見えてきたかな。課題解決が叶うような活動を期待したい。かねてからの子育て運動とのリンクをどうするかも課題ですね。

- ◆ 4 地区ともそれぞれ工夫のある取り組みをされていてとても勉強になりました。キーワードである「つながり」を大切にしながら自分にできることを少しずつでもやっていけたらと思います。
- ◆ 4 地区の個性と豊かさを一度にうかがうことが出来て良かったです。4 地区同士のつながりが続くことが稚内の子どもと共にある家庭に届くことが願われます。ありがとうございました。
- ◆ それぞれが異なる角度からのアプローチは本当に見事でした。稚内の大きな可能性を感じました。財産はやまほどあることが分かりました。
- ◆ 4 地区が様々な貧困対策に取り組んでいることを嬉しく思いました。
- ◆ もっと具体的な貧困の状態や貧困への取り組みが聞けるかと思いましたがどこもきれいごとだったりそもそも苦しい大学紹介、意識高い系の親のファイルづくりなど「……………」となる内容だった。本当に苦しんでいる家庭や子への支援が本気でできているのでしょうか。
- ◆ 各地区の特色があり、知らない取り組みも多数あり、市全体の動きもわかりよかったです。
- ◆ それぞれの地区で強みを生かした活動をしていることがわかりました。もっと地域の人や保護者の皆さんにも知ってもらいたいです。
- ◆ 各地区での取り組みの様子を知る機会が出来ました。貧困対策という部分がどのように取り組まれているのか、具体的な例があるともっとわかりやすくまた、貧困対策としてどあかかわって行けば良いのかを学べたらいいと思いました。
- ◆ 提案の仕方が工夫されていて聞きやすかったです。もちろん活動の様子もわかりやすく良かったです。
- ◆ 地域の熱意ある取り組みを理解することができました。
- ◆ 特色が明確でよい。
- ◆ 各地区の具体的な取り組みを聞くことができ稚内が地域が一丸となって子どものことを考えているというあたたかさを感じました。
- ◆ 知らないところでこんなにきめ細かく話し合い見守ってくれていたんだなあと改めて知り、ささやかながら自分も参加していこうと思いました。
- ◆ 途中入場ですので……………。ただし実際の現場ではネットワークにつながっていないケースが多いと感じます。
- ◆ どの地区も強みを生かした良い発表だった。取り組みしていることじたいが良かった。
- ◆ スライドが見にくい。
- ◆ 各地区の発表の意味がよくわからなかった。北地区に住んでいるが、はじめて聞く内容ばかり。貧困と何のかんけいがあるのか全く伝わってこなかった。それと苦労して作った資料を発表したい気持ちは分かるが、時間を守ってほしい。時間を守れない発表はだだの苦痛である。それがたとえどんないい発表だとしてもである。
- ◆ 4 地区の提言はそれぞれの思いを強く感じました。具体的に表し、励みになりました。市全体が子どもたちを見守り育てられる街になる様念じます。
- ◆ 子どもの貧困対策に対してそれぞれの地区でこれまでに活動をされていたことを初めて知りました。東地区の取り組みとその様子が一番わかりやすかったです。
- ◆ 各地区の真剣な取り組みはすばらしい。
- ◆ 稚内市に来たばかりで稚内市が教育について注目されているということを知らなく、今回のシンポジウムでたくさんのことを学ぶことが出来た。
- ◆ 子育てファイルの活用を知ることが出来ました。
- ◆ それぞれの地区ごとに様々な方法を用いて家庭や地域をつなぐ方法をみて面白いと思った。
- ◆ 子どもの貧困についての取り組みは四地区とも素晴らしい。具体的に事細かく進めているのに感動しました。少しながら、陰ながら協力したいと思いました。
- ◆ 特に南地区の子育て支援ネットワークの取り組みがすばらしいと思いました。
- ◆ それぞれの地区の特徴に応じたプランを考える

ということはよい方向だと思います。北地区のおたすけ帖は良いと思いますが似たような者はすでにあると思ったのですが。あるものさらに充実させるということは親の情報収集能力や活用能力が低下しているという一面もあるのかも知れません。親を「教育する」ことが必要なのかも知れませんね。

- ◆ 各地区での取り組みの様子を知る機会が出来ました。貧困対策という部分がどのように取り組まれているのか、具体的な例があるともっとわかりやすくまた、貧困対策としてどうかかわって行けば良いのかを学べたらいいと思いました。それぞれ様々な方々が力を合わせて子どもたちのことを考え、取り組みをされていることがわかりました。
- ◆ 映像がんばった。
- ◆ 具体化がものすごく進んでいた。
- ◆ どの地区もすばらしい発表でさすがと思いました。
- ◆ 幼・保・小・中・高・大がネットワークを作っている、さらにそこに医療機関などが加わっている、すばらしいです。
- ◆ 子どもの貧困に関してそれぞれの強みを活かした取り組みを行っている中でどの地区も地域とのつながりに関して強く意識していることが感じられた。大学としてもつながりをもっと強くしていきたいと考える。
- ◆ どの地区を地域の人々を含む社会とのつながりを意識して人で解決しようとしなない、貧困に困っている親子を一人にしないということを強く感じた。
- ◆ 各地区それぞれ実際に取り組んでいることを初めて知った。地域等のつながりが本当に大切であるなと感じた。
- ◆ 自分が住んでいる地区の取り組みや他の地区での取り組みを知る機会となって良かった。少しずつ「大人」がこういった取り組みを知ることが大切であり、今日学んだことを伝えていきたいと思いました。
- ◆ 大学生として大学がとても期待されている場所

だと感じるような発表ばかりでした。学生として大学の勝ちを学生自身が上げることができるように努力していきたいという気持ちになりました。

- ◆ 各地区の特徴がよく出ていた。苦労も感じられたと同時に勇気ももらった。
- ◆ 各地区非常に努力されていることは伝わった。一方で今回は各地区ごとの提言ということであったが、内容を見ると各地区の問題に対するものというよりは市全体であったので分ける必要はないように見えた。また提言というより制作発表だったように見えたので、提言発表→制作発表の方がいいように合っているように思われる。
- ◆ 子どもの将来を見据えた行動をしていることがよく分かりました。様々な見方・考え方を取り入れ、より高い支援体制を築けることを願います。
- ◆ 各地区のネットワークに安心感がわきました。人と人とのつながりで貧困の連鎖をストップさせたい！それを支援する日本国であってほしいですね。
- ◆ たくさんの方がプロジェクトに参加していることを初めて知りました。
- ◆ 仲間・連携がよくとられていると感じた。
- ◆ それぞれ特色ある取り組みになっていました。勉強になりました。
- ◆ それぞれの地区の良さが活かされた特徴的な取り組みだった。
- ◆ 私、今回初めての参加ですが、各地区の発表を聞き、感動しました。私もこれから日々勉強していこうと新たに思いました。また、スライドを使用しての説明なのでとてもわかりやすかった。
- ◆ それぞれの取り組みについて理解が深められてとても有意義でした。
- ◆ 具体的な動き（ポスター・リーフレット・座談会等）が今後役に立つ多くの人がいらっしゃると思いました。
- ◆ つながりを生かすことを通じて子どもの貧困に

対してなにができる（何をしたい）野かが不明瞭。学校としてできること？町内会を巻き込んで出来ること？

- ◆ おたすけ帖が欲しいです。
- ◆ 東地区はモニター・茶話会で生の声を出し、聞く、実際に動いている地域だと思いました。モニターをひろげる、つなげる、大事な事は動くこと。
- ◆ 日頃目に見えない活動についてわかりやすく示され、感心した。大学の学生の頑張りも良かった。
- ◆ どの地区も地に足がついたところからツールを上手に使って、悩みを共有するチームワークができていてすごく良かったと思う。
- ◆ 各地区の取り組みはよくわかり、様々な事が知

③ 全体の感想や意見をお書きください。

- 市長からも子ども・子育ての重要性が語られ、地方行政の役割も重要だが、一番は地域であることを認識した。
- 地区の交流、そして市全体で知ること、大事ですね。多くの人々がかかわることを願います。
- 全体として良かったと思います。
- 初めての参加で、各地区それぞれ力を注ぐすてきな取り組みが進んでいることを知り、とても良かったです。北地区以外では、もっと各地区子どもの現状、どのような問題、そしてその問題に対してどのような対策があるのかをもっと具体的に知ることができたらいいなあと思いました。
- 4 地区共に土台ができつつあり、あとは行動あるのみ。コーディネーターとして頑張ります。学校はプラットホームの大きな役割だと再認識した。
- 多忙な松本先生の話聞くことができ光栄です。
- 大変意義深いシンポジウムだったと思う。
- 稚内市の子ども貧困対策に感心のある方々が大勢いるということに嬉しく思いました。
- 貧困対策、直接関係することが少なかったのも、次回に期待しております。（各地区）

れて良かった。せつかくの取り組みをさらに生かすために地区間の交流も進められれば良いのではないかと感じた。

- ◆ 貧困対策は地区のつながりが大事なことは理解できるが、抜本解決にならないことが再認識された。北地区の実践はより具体性があった。
- ◆ 各地区とも見た目、視覚によるプレゼンがわかりやすかった。
- ◆ 各地区がプロジェクトをつくり取り組んでいることを知りませんでした。せつかくこれだけやっていたらいいので見える化が必要かと思えます。

- 地域の取り組みが聞けて良かった。
- 自分ができる支援について考えていきたいと思えます。
- 子どもを抱えながら貧困で苦しんでいる人たちが安心して暮らせる稚内になったらいいですね。自分のできることからしていきたいです。
- 今回も勉強させていただきました。松本先生のお話、短いですが、もっと聞きたい気がします。
- 寒かったです。プロジェクトチームのメンバーが多職種でいいですね。
- 初めての参加ですが、地域の取り組みを知ることができました。子育てが終わった私でも伝わってくるようにひろがることを願います。
- 「どこかがちがう、何かができる街 稚内」を実感しました。
- 子どもの貧困は育ちと発達の貧困です。まわりの大人が子どもの困り感を共有し、寄り添いながら前に進む力を子どもに持たせたいと思いました。
- 経済力の貧困に対しては様々な制度（入学免除）が確立されるといいと思いますが、家庭の教育力の貧困にどう支援していくか課題だと思います。

- 私たち社会人が子育てに積極的に参加しなければいけないと再認識しました。
- 子どもの貧困問題について各学校を中心にもっと関心が持たれるように望みます。
- 毎回趣の変わった形でのシンポジウムで集う者に新鮮な驚きを与えてくれます。稚内は社会資源の豊かなまちだと思います。十分活用できますようにと願います。
- 子どもたちと日頃関わるので、一人ひとりへの支援、家庭への支援をしっかりと考える機会となりました。
- 稚内が頑張っている事が伝わるシンポジウムでした。
- どんな所であっても結局は「人」なんだと改めて思いました。
- 子どもの貧困についてはどんなに対策を考えてもこれでいいと言うことがなく、これからも色々対策を練っていく必要があると思う。貧困家庭が利用しやすい対策を……。
- あっという間に時間が過ぎました。勉強になりました。みんなのつながりの中で稚内の貧困問題に取り組んでいきたいです。
- 子どもの医療の助成を 22 歳まで拡大を！就学援助制度の充実を今こそ！できることから始めよう！
- 稚内で行われている様々な取り組みが知れるとても良い機会となりました。
- 心ももっと見てほしい。貧しいのは金だけじゃない。こういう取り組みがあるのをうれしく思う。
- 稚内市の貧困対策（子育て対策）が地域の声をもとに成り立っているのがわかった。
- 子育てファイルを学校でお母さんたちや先生たちと一緒にというのはとても良いことだと思います。
- 改めて貧困対策に取り組んでいきます。
- 応援したい！
- 本日参加できたことであらためて貧困の大変さとみんなの協力の大切を感じました。ありがとうございました。
- 発表者の出入りとかの際に通路が少し狭いと感じました。
- モニター会議が小人数の集まりで終わらないことを願っています。同じ街の子どもたちが地区によって教育の質（キャリア教育）が違わないことを願います。
- このような研修・研究の場はとっても大切だと思いました。
- 今後の課題、すばらしい制度がありながらわからない貧困の人たちをどう救えるかだと思います。
- このような研修・研究の場はとっても大切だと思いました。取り組み、感銘を受けました。稚内市の子育て、教育、本当にスゴイことをしていると思います。同じようなことで困っている町に伝えたい。全国的なモデル（手本）にしていきたい内容。今の政府は稚内の運動・活動・取り組みを取り入れるべきだと思いました。参加して良かったです。ありがとうございました。この取り組み、どんどんひろげていきましょう。
- 子どもの貧困について考える良い機会となりました。
- 貧困問題について様々なアプローチを知ることができた。
- 会場の足元が寒いです。毎年席が足りない気がするのですが。
- 貧困について考える良い機会となった。
- このような取り組みが対策を考えるための大きな一歩であるように感じました。
- よりつながりをひろげていくべき。
- 稚内の実態を知りたいです。その上で各地区の取り組み、4 地区の連携で改善が必要だと思いました。
- 子どもの貧困対策は「青春の門」のスタートにある若い男女の価値観のちがいによって生じる結果による「因果」であると思っています。子育ては、何事にも続ける忍耐力。学校は先生が、父母の役割をすることが条件の職場であり、まず先生になることを目標に生きる道を教えるべきだと思います。

- はじめて参加させていただいたが、貧困対策のシナリオが見えたのは南地区だけであった。地区の取り組みに正当性を与える根拠が提示されていなかったのが盲目的につながることを求めネットワークを築いて満足しているように映った。各地区がなぜその取り組みを行うのが貧困問題に対してどのような寄与があるのか、またあったのか実例がほしい。
- 大変素晴らしい実践と発表でした。
- とても勉強になりましたが、できれば休日の前が良かったです。
- 教育にもっとお金をかけるべきではないか。
- 稚内市の実態を踏まえた取り組みが考えられていることがわかり安心した。今後、継続していくことで、各地区での課題が解消されていくことを信じたい。
- 稚内の貧困対策が大変充実していることを改めて実感しました。幼～大学までのサポートがしっかりしており、このことは中高生にもぜひ紹介したいです。
- 子どもたちがすこやかに成長、将来に夢をもって、明るく生活していけるよう、「つながり」を大切にしていこうと思いました。
- 目に見えない貧困が、子どもの貧困だと思います。これからも継続してほしい取り組みでした。ありがとうございました。
- これだけの方が参加し素晴らしいプロジェクトだと思います。学校関係者にはまだ知らない貧困世帯はまだまだまだたくさんあるように感じます。
- 昨年度も講師の松本先生よりお話を聞いて興味深かったです。
- 5分程度で良いので休憩時間がほしい。
- 世帯の所得の改善無しに子どもの貧困対策は考えられないのでは？
- 今、良い意味での「おせっかい」が大切だと思います。こんな事いたら………でしゃばったら………相手にみんなにどう思われるだろうか？と考え触らない方が良くなって離れていく子どもたち、親、地域にならない努力と勇気が自分には必要だなあと感じました。
- 子ども支援の輪が確実に広がっている事がよくわかるシンポジウムでした。
- 市民全体に分かると思います。
- 貧困層への支援は大切なことだと思いますが、それ以外の世帯＝すべての家庭子どもへの支援という意味でも義務教育時の教育費にどれだけの保護者負担を強いているのか、という点にもこのプロジェクトで取り上げてほしいです。
- 大変良かった。
- 貧困問題を解決する確実に簡単な方法はないと再認識した機会となった。でも各地区の取り組みの様な活動が重要であると感じた。
- 格差が少なくなると良いなと思いましたが、現状をすぐに解決するのは不可能なので、そこに対するサポートをしていくしかないのかなと感じました。
- 貧困の問題は普段から感じている問題だが、だから何をするのか、今日ではわからない。
- 4地区の様子はわかりましたが、宗谷沿岸地区や天北・増幌・勇知はどうなっているのか知りたかった。
- 意義ある活動にご尽力されている皆様に敬意を表したいと思います。
- 各地区で取り組んでいる様子がよくわかりました。どの地区にもきっと困り感を抱える子、その背後に子育てに困っている親、経済的な支援をもとめている親がいて、もっと保護者によびかけて行けば良かったです。教員も多いですが、もっと聞かせたり、手をさしのべたりしたいと思いました。担任として人ごとではない発信を自分もできないかなと考えてしまいました。
- 改めて実態を知ることより、大人が力を合わせて子どもに明るい未来に向けがんばる決意がもてました。ありがとうございました。
- 充実した内容と時間でした。ありがとうございました。
- このような会をぜひ定期的に継続してほしいと思います。
- 今後、子どもの貧困に対してどう考えていくべきかということでも有意義な時間でした。

- 呼びかけも一生懸命されている結果でしょう。多くの人の出席は心強く思いました。この想いが結実するよう願います。
- 子どもの貧困は身に感じる状況になっています。市民が改めて年に数回でも貧困について考える機会は貴重です。ありがとうございました。
- 子どもの未来は地域社会の未来です。子どもたちの未来の可能性をせばめないために大人として力を発揮していかなければならない！たくさんの方に知ってほしい、考えてほしいと思いました。
- 北地区の「おたすけ帖」は便利なものだと思います。そうしたツールが他の地区、全市にあるといいなと感じました。
- 報告だけの会にすることなく現実に貧困のある子どもたちがすくわれる組織、取り組みになればいいと思います。
- 稚内の子どもの貧困の状況についてももう少し情報があればと思いました。北海道全体と比べてどのような状況か、また稚内ならではの問題を知りたいと思いました。
- 非常にクオリティの高いものでした。
- 貧困は実際にありますがそのことと子どもの課題のつながりを丁寧にみていく必要があると思います。
- 充実した内容でした。お疲れ様でした。
- 遠い所から来ていただいた先生に 30 分しかないのはどうかと感じた。先生にたいして失礼ではないか。
- 良かったと思います。
- 継続は力です。頑張ってください。
- 貧困層の声を聞くべき。そしたらどんな状況下理解できると思う。思っていることはたくさんある。
- 「つながる」取り組み、継続が重要であることをあらためて感じました。
- よく集まった。
- 勉強になった。今後とも参加したい。
- このようなシンポジウムを行える街はすてきです。
- 改めて実態を知ることより、大人が力を合わせて子どもに明るい未来に向けがんばる決意がもてました。ありがとうございました。貧困問題があることを実感した。たぶん若者が減少する理由は他にもたくさんあると思うが、一つひとつ正確にかつ迅速に対応する必要がある。
- とても中身の濃いシンポジウムでした。
- 子どもの貧困解消には子どもが心豊かに毎日を送ることだと思いますが、共働き世帯のため保育所の充実も大切ですが、過重労働がなくなり、子どもに十分接することのできる労働環境が必要です。
- 子どもに支援を届けるには行政がしっかり仕事をしてくれることが大事だと思います。市や教育委員会のみなさん、よろしくお願いします。
- 北星学園大学の稚内市民、入学金などの免除のシステムがすごい。
- 各地区や松本先生の講演から一学生としても大学としても地域とのつながりを強く持つ必要性がいたと感じた。貧困問題を色々な面から見ることで現状把握や改善事項も多くあるのではないかと考える良い機会であった。ありがとうございました。
- 自分が知らない地域の取り組みを知ることが出来た。稚内市として貧困について考えていくというのを強く感じた。自分もその取り組みに関わっていけるように何か考えていきたい。
- 自分が住んでいるところでこのような数多くの取り組みがおこなわれていることは知らなかった。今回の発表、そして講演はとても勉強になりました。ありがとうございました。
- 初めて参加したが本格的な対策をしていたり、その活動を通して良くなるためにさらなる改善をされていて良いなと思った。学びの中で活用できそう。
- 私は学生という立場から参加させていただきましたが、様々な取り組みをしていることが分かった。教師を目指すという点でも、今後しっかり「貧困」について考えていく必要があると感じた。

- 各地区のみなさん、準備ごろうさまでした。期待しています。市内の未来をつくる子どもたちのために私も一人の大人としてがんばります。
- 稚内の取り組みは他の地域の見本になると思う。
- 各提言者の話し方、声がとても聞きやすかった。
- 知見が広がりました。ありがとうございました。
- 理想を出す、支援機関・方法を提案するのは出来ても、実際に貧困家庭に気づいた時、誰が、どのような声かけをしたらいいのか？一番大事なのは困っている人にとどくのかどうかだと思います。地域・家庭、様々なネットワークがあっても動けなければ意味がないと思います。子どもの色々な面からわかる幼保、学校が気づき、そこからつなげることがまず第一、重要なこと。ネットワーク、チームワークが大事な点。
- この全市での取り組みがいつまでも続くことを願います。ありがとうございました。
- シンポジウムの内容は良かった。今回の参加者は当然と言えば当然だが、教育関係者が多い。今後はこうした内容をいかに興味・関心の薄い層に伝えるかが課題だと考える。
- 内容は興味深いものであったが全体の時間配分をもう一度考えてもらいたいと思った。
- 住民の努力でどれだけ貧困の連鎖をくいとめることができるのか。社会のしくみ、経済格差、雇用問題など政治の力が必要。街作りの観点で貧困問題を考えるのが大事だとしたら行政の役割が重要。
- それぞれの立場においていろいろな角度で考えられている。

3 教育連携会議・子どもの貧困対策プロジェクト会議記録

稚内市教育連携会議（2017. 9. 6）

【出席者】 表 純一・吉田 幸麿・竹田 一美・舘野 薫・林 智宏・元紺谷 尊広・
山下 優・首藤 啓美子・三宮 修

○開会挨拶 表 純一 教育長

- ・ 2学期が始まると、子どもの自殺のことが心配される。稚内では、スムーズに2学期がスタートできて、うれしく思っている。
- ・ 8月31日に、札幌市で子どもの貧困対策計画の骨子案が発表された。我々が進める連携の強化が謳われている。学校が「プラットホーム」であり続けること、幼保・小・中・高・大の連携、そして各地区のネットワークの強化が重要だ。

○議事

(1) 保育所（園）・幼稚園との連携強化について

教育長からの要請に応じて、プロジェクト会議のメンバーに、保育所（園）・幼稚園から4名の代表が出て、各地区のメンバーに加わることになる。

(2) 11・21シンポジウムの取り組みについて

シンポジウムの担当の菅野教育相談所長から、計画案の報告があり、各地区の提言の時間を保障して報告の時間を5分延長して、全体のシンポジウムの時間を20分延長することにする。

(3) 『4地区提言』の内容について

吉崎校長から、第3回プロジェクト会議の検討状況に基づき、提言の内容の報告をする。

(4) 8・17養成講座の報告について

若原先生に代わり、曾我部適応指導教室長から、講習会の内容を報告する。資料集の活用も呼びかける。

(5) 『18の提言』の稚内市としての検討状況について

田中学校教育課長から、稚内市（担当部局）としての検討状況の報告があった。

(6) その他

平間コーディネーターから、「『18項目の提言』の重点化と到達点」について説明があり、意見交換の中で、「給付型奨学金」について、稚内高校、大谷高校とも情報が十分共有されていないとの状況報告があり、稚内養護学校からは特別支援学校のみだが、支援金制度があるとの報告もあった。

○まとめの挨拶 元紺谷尊広 稚内高校長

- ・ 4月に稚内高校に赴任したばかりなので、この間で感じていることを3点にわたって話をする。

①稚内市は魅力的な街だ。学校外で関係者が連携できているということに驚いた。長年の歴史、成果を感じた。

②学校、家庭、地域の連携はよく言われている。それに行政との連携が重要だ。稚内市のこども課の存在に驚いた。福祉と教育のつながりに。

③31年度からの高校の在り方で、稚内高校は単位制になる。新しい制度で安心して入学することが我々の役割と考えている。

稚内市教育連携会議（2018. 2. 8）

【出席者】 表 純一・吉田 幸麿・竹田 一美・舘野 薫・林 智宏・元紺谷 尊広・
山下 優・首藤 啓美子・三宮 修・佐久間 政克

○開会挨拶 表 純一 教育長

- ・ 今年もよろしくお願ひしたい。11月21日の子どもの貧困対策シンポジウムは、市民の皆さんに浸透してきていることを実感した。4地区の提言は、それぞれの視点で教育の力、学校の力を感じた。
- ・ この問題は緒についたばかり。深刻な問題だが市民の中に（解決に向けての考えが）芽生えてきている。教育連携会議の成果と考えている。教育連携の力を感じている。

○議事 代表委員である元紺谷校長の司会で進める。(1)から(3)について、平間コーディネーターから一括説明がある。

(1) 平成30年度の取り組み方針について

「平成30年度子どもの貧困問題対策方針（案）」に基づき説明をする。特に、子どもの貧困対策法5周年の節目の年を迎え、「行政施策」の検証研究に踏み込むことについて説明をする。

- ・ 行政支援策について、稚内市長に要請する。（12月25日予定）
- ・ 「第4回子どもの貧困対策市民シンポジウム」は、これまでの松本先生は長期研修に入るため、山野先生（名寄市立大学）をお願いしたい。

(2) 平成30年度稚内市教育連携会議及びプロジェクトメンバーについて

- ・ 教育連携会議、子どもの貧困対策プロジェクト会議のメンバーは、基本的に引き続きお願ひしたい。

(3) 18項目の重点化と到達について

- ・ 2016年に整理したものにに基づき、成果が生まれている事項と成果が見えていない事項について説明し、平成30年度は「稚内型奨学資金制度」検討に入ることを提案する。

《意見交換》

- ・ 表教育長 稚内型「小中高大あんしん修学資金制度」について、市役所内部だけではなく外部の人も加えて（プロジェクトを立ち上げ）検討をしたい。
- ・ 元紺谷校長 子どもの貧困対策では様々なことが考えられる。それを考えることが大事だ。
- ・ 山下校長 私学の就学資金や奨学金もあり、退学者はゼロになっている。ただ、経済的な考え方が変わってきているのを感じる。

(4) その他

*子どもの貧困対策市民シンポジウムアンケート結果について

担当の菅野教育相談所長から報告。250名に及ぶ参加をいただき、概ね良好な意見をいただいた。4地区の提言などチームとしての力を感じた。松本先生も言っていたが、つながりが大事だ。

《意見交換》

- ・ 元紺谷校長 稚内高校には色々な子どもが入学している。つながりの大切さを感じている。教育長が言っていた学校がプラットフォームになって、学校だけでなく教育相談所など様々な機関の力を借りている。
- ・ 武田園長 北地区ネットワークに参加して、地域が育っている、広がりが生まれているのを感じている。つながりが子どもを守っているのを感じる。

*地域食堂ふらっとについて

代表の藤本主任児童委員から報告。試行開催して1年、東地区活動拠点センターを中心に開催してきた。25名~40名の参加。様々な地域への広がりも見せている。課題になっているのは、野菜の高騰。新聞（通信）も1回発行して、活動を伝えることができた。

*研修収録について

担当の若原准教授から報告。2016年に発刊して、2号目を発刊するために精力的に準備をしている。今回は3部構成で、

第1部 2016年の活動（第2回子どもの貧困対策市民シンポジウムも含めて）

第2部 2017年の活動（第3回子どもの貧困対策市民シンポジウムも含めて）

第3部 子どもの貧困聞き取り調査のまとめ

の内容で、市民のわかりやすいことを大切にしていきたい。年度内の発刊を目指している。

○まとめの挨拶 館野 薫 稚内市校長会会長（稚内港小学校長）

- ・ 稚内市で子どもの貧困対策がスタートしたときは、猿払にいた。
- ・ 子どもの貧困を考えたとき、すべては18項目の枠の中に置かれている。
- ・ 待っているのではなく、自分で動くことが大切だ。もっと自由な発想で子どもたちのことを考えることが大切だ。大人の一生懸命さは、子どもたちに伝わるはずだ。

第1回子ども貧困対策プロジェクト会議（2017.6.20）

◆ 表 教育長 開会挨拶（今年度の方針について）

- ・ 今年度で貧困問題の取り組みも3年目を迎える。稚内での理解が深まっていることに感謝したい。
- ・ 昨年度、幼小中高大までに及ぶ教育連携会議が設置できたことは大きな成果。そのもとでのプロジェクト会議での協議をお願いしたい。教育連携は大きな課題、教育だけでなく福祉、医療など幅広く考えていきたい。子どもの貧困問題が前進して市民に理解が深まることを期待したい。
- ・ 今年度は中学校4地区でのネットワークを基盤に網の目をしっかり作り、教育連携、貧困問題を広く考えていきたい。その成果を市長に提言していきたい。

◆第1部「取り組みのリレー報告」

- (1) 民生児童委員の全国・全道紙面交流のとりくみ 民生児童委員協議会事務局長 中野智彦
稚内は進んだ取り組みだ。会議などでも「もう少し聞かせて！」という場面も多い。
- (2) 11・21 第3回子どもの貧困シンポについて 教育相談所・シンポ企画責任者 菅野 剛
第3回目を実施したい。4地区の発表のあと、松本先生にまとめをお願いすることになった。
- (3) 8・17 地域コーディネーター育成講座について 北星大学准教授・研究紀要責任者 若原幸範
講座講師は第一人者。アンケート調査は終了しているので、聞き取り調査を実施したい。
- (4) 『地域食堂・ふらっと』のとりくみについて 主任児童委員・地域食堂ふらっと代表 藤本英文
定点開催で東活動拠点センターで、出前食堂で地域との連携を深めることも考えたい。
- (5) 四地区アクションプランの市長への提言を市民につなげるために
声問小学校長・プロジェクト政策提言 吉崎 健一
地区単位のアクションプランを持つことが重要。シンポジウム、そして提言したい。

◆第2部「四地区アクションプランに向けての協議」

平間子どもの貧困対策コーディネーターからの説明

「四地区アクションプラン」の提言内容を深めるために、市民理解をキーワードに「つながり」の研究に焦点をあてていただきたい。

- (1) 北地区 船木中央小学校長
 - ・ 「縦横のネットワーク」の具体化を追求したい。人が変わってもきめ細かな支援をシステム化したい。「子育てファイル」の取り組みをイメージ化したい。
 - ・ 広く考えて子ども支援ということで情報を共通にし、だれもが見て分かることを大事にしたい。
- (2) 南地区 佐近南小学校長
 - ・ 幼小中高というようにネットワーク会議に広がりが見られている。さらに学ぶことができきて、顔が見える取り組みになっている。
 - ・ 今年度はキャリア教育を充実させて、夢を語り地元を愛する子どもを育てたい。
- (3) 東地区 林 東小学校教頭
 - ・ 「孤育て」をキーワードに、「子育てファイル」の活用モデル地区にしたい。「子育てファイル」を書くこと、活用することで「孤育て」をさせないようにしたい。
 - ・ 「子育てファイル」のモニター制度も考えたい。
- (4) 潮見が丘地区 網谷潮見が丘中学校長
 - ・ 市民理解とつながりを大事に。高校も入って、学校間交流をさらに進めたい。子育て連協をベースに地域情報の把握と発信を進めたい。
 - ・ シンポジウムでは、稚内の子どもが見えるような取り組み（ライフストーリー）を。

◆ゲストから

○本間子育て推進協事務局長

推進協でも安心して子育てができるように福祉、医療とも連携したい。

○石山勤医協宗谷医院事務

医療と貧困はつながりが深い。オール稚内の取り組みは素晴らしい。

◆総括 表 教育長

- ・ 子どもの貧困の取り組みは創造の分野だ。絶対的な正解はない。あらゆる方向から考えることが大事だ。
- ・ 正解がないことをしっかりとらえること、正解に近づくことを、改めてお願いしたい。

第2回子ども貧困対策プロジェクト会議（2017.7.13）

◆表 教育長 開会挨拶

- ・ この会議の真剣な協議に感謝したい。「8/17 特別講習会」では、私も講座を持ちプレッシャーを感じている。貧困問題の正解はない。みんなが真剣に考えることが大事。
- ・ 貧困連鎖のストップは、教育の無償化が必要。特に、家庭教育と幼児教育が重要だ。
- ・ 相互扶助、ネットワークの大切さを感じる。私も子どもたちが笑顔に変わるように頑張りたい。

◆四地区アクションプランに向けての協議

平間子どもの貧困対策コーディネーターからの説明 その中で、特別報告

○8/17 特別講習会について（若原北星大学准教授）

- ・ 講座のテーマと昼食の対応の変更及び講習会の締め切りについて、報告とお願い

○地域食堂「ふらっと」について（藤本地域食堂「ふらっと」代表）

- ・ 7/15 の STV テレビ「市民ニュース」で活動が放送される予定。定時制の生徒と子どもの関わり、ポスターづくりの様子、スタッフの頑張りが放送されるだろう。

(1) 東地区 林 東小学校教頭

- ・ 親の「孤育てさせない街づくり」を考え、「子育てファイル」活用地区を目指したい。「子育てファイル」は、大人が問われる、大人のテーマだ。
- ・ モニター制度を構想し、モニターを募集したら、応えてくれた親がいた。市教育委員会にも支援をいただき、モニター制度を活用し、「子育てファイル」を充実させたい。

(2) 北地区 船木中央小学校長

- ・ 切れ目のない「縦の連携」が重要だ。学校・家庭の様子、将来の希望、どんな支援を受けていたのかなど、小中学校は要録でつなげていくことが可能だが、高大ではどうしていくか。

- ・ 情報ファイルのようなもので、ネットワークの「見える化」が重要だ。サンプルを持ち寄って、今後の検討を進めていきたい。

(3) 南地区 佐近南小学校長

- ・ ネットワークの充実では、①医療、福祉分野との連携、②幼小高大のさらなる充実、③地域の教育力を高める、④先生方に伝える方策、について深めたい。
- ・ キャリア教育の充実では、プロジェクト会議のメンバーにいない港小学校、南中学校の連携を強めたい。さらに、南地区の人材（医療、福祉分野の方）の活用も考えたい。

(4) 潮見が丘地区 網谷潮見が丘中学校長

- ・ 子どもにスポットをあてて、子どもの思いを言葉でつづっていききたい。ポスターや映像も良い媒体で貧困対策になるのではないか。大学生なら、ライフストーリーという考えもある。
- ・ プロジェクトメンバーのつながりも重要だ。
- ・ 潮見が丘地区子育て連協に、子どもの貧困を位置づけるなどの見直しも必要だ。

◆オブザーバーから

○本間子育て推進協事務局長

- ・ 第1回目の会議に参加して勉強になった。1回目にプランを確認して。2回目ですらに具体的な政策化、動きができていくことはすごい。
- ・ 子どもの貧困は難しい課題、それに向かって協議を深めていることが素晴らしい。
- ・ 私も子育て推進協として頑張っていきたい。

◆表 教育長閉会挨拶（まとめ）

- ・ 真剣な論議、協議ご苦労様でした。感謝したい。「子育てファイル」のモニター制度、できることは支援していきたい。
- ・ 今の世の中、閉塞化、二極化が進んでいる。子どもの貧困問題、地道なところから、教育を根にして幅広い活動をしていきたい。

第3回子ども貧困対策プロジェクト会議（2017.7.13）

◆表 教育長 開会挨拶

- ・ 2学期のスタート、多忙な中お集まりいただき感謝したい。
- ・ 先日（8月17日）、北星学園大学で「子どもの貧困対策講習会」にも多数の参加いただき、支援ネットワークについて語り合ったことに感謝したい。先日の都市教育長会議でも、学校、家庭、地域が連携して深めて行こうという話がされた。稚内の先生方の素晴らしさを感じた。
- ・ 学校の役割、支援ネットワークの充実、活性化のために論議をお願いしたい。

◆四地区アクションプランに向けての協議

平間子どもの貧困対策コーディネーターからの説明（特別報告も含めて）

○「子どもの貧困対策講習会」の報告 若原北星学園大学准教授

- ・ 当初、30名程度を想定していたが、64名の参加で大好評のうちに終了した。1日日程で5講座を開講したが、40名以上がすべての講座を受講していただいた。地域のなかで、さらにつながりを深めていただきたい。
- ・ 講座の感想集を読んでほしい。講座の資料集も今後役立つ内容になっている。データは若原のところにあるので活用をいただきたい。

○市民シンポジウムでの4地区アクションプランの発表順を決める。

①潮見地区 ②北地区 ③東地区 ④南地区

- ・ 次回のプロジェクト会議（9月26日予定）では、プレ発表をしたい。そのために検討のスピードを上げていただきたい。
- ・ 今回のプロジェクト会議では、細かな打ち合わせも含めて、コンクリートの一步手前ということをお願いしたい。

以上の説明を受けて、各地区は小グループに分かれての協議や用具（ポスターにする用紙など）を使っの細かな協議・検討に入る。

(1) 東地区 林 東小学校教頭

- ・ 子育てファイルの活用地区として、子育てファイルを通じてつながりを深めたい。6~7名のモニターも決まっており、茶話会の内容も決まっている。それらの内容を発表したい。
- ・ モニターにお願いする方には、モニター依頼書と子どもの貧困対策講習会と同様のようなファイルも準備したい。

(2) 潮見が丘地区 網谷潮見が丘中学校長

- ・ 幼稚園から高校・大学まである地域なので、子どもの日常の思いや感動をポスターに込めて発表したい。
〈小学校〉友だち、家族、地域の楽しみなどをまとめたい。〈中学校〉まさに反抗期、「未来の自分を膨らませて」をメッセージに。〈高校〉少し大人になって、地域・稚内のことが力になるように。そんなメッセージを作りたい。

(3) 北地区 船木中央小学校長

- ・ 「縦横のきめ細かい支援」を考えて、それぞれの時代（幼保・小・中・高）の子育て情報を子育てファイルにはさめるような物を考えたい。
- ・ 情報をより豊かにする観点から、「Q&A」のようなものも考えたい。

(4) 南地区 佐近南小学校長

- ・ ネットワーク機能の充実では自信を持っている。様々な機関（医療相談室、生活支援センターなど）を活かして宣伝することも大切だろう。
- ・ キャリア教育の充実では南3校と高校の連携・つながりが大切である。子どもたちにこんな力を付けたい、同時に頑張っている子どもを紹介して応援をしてほしい。

◆ 表 教育長閉会挨拶（まとめ）

- ・ 子どもの貧困対策講習会で、私たちが子どもの困っていることを十分把握することの必要性を感じた。こんな支援があるということを示すことも子育てネットワーク・地域ネットワークだろう。
- ・ プロジェクトメンバーがコーディネーターとして、これらに応える発表になるだろうということを確認した。発表に期待している。

第4回子ども貧困対策プロジェクト会議（2017.9.26）

◆委嘱状交付 幼稚園・保育所からの4人の委員への委嘱状交付

◆ 表 教育長 開会挨拶

- ・ お忙しいなか出席いただき感謝したい。
- ・ 幼稚園、保育所から委員として参加いただき、文字通り幼保・小・中・高・大になった。うれしく思っている。
- ・ 消費税、教育について、総選挙になった。私たちは、子どもの貧困問題について考えてきた。今後も、これを大切にしていきたい。これが我々の使命と考えている。
- ・ 11月のシンポジウムに向けて、松本先生を迎えて頑張っていきたい。松本先生には、最初から私たちの取り組みを支えていただいた。感謝したい。

◆四地区アクションプランに向けての協議

(1) オブザーバーの紹介と報告

- 11.21 子どもの貧困対策シンポジウムについて 菅野教育相談所長
- 地域食堂「ふらっと」の取り組みについて 藤本代表

(2) グループ協議と模擬発表

①潮見が丘地区 網谷潮見が丘中学校長

- ・ 子どもの成長を追って、思いや感動を映像で発表。その導入部分を実際の映像で紹介。北星学園大学の学生がオブザーバーとして出席。

②北地区 船木中央小学校長

- ・ きめ細かい支援を考えて、それぞれの子育て支援情報を発表。ポスターを準備して、本番ではポスターをスライドにして紹介しながら発表。

③東地区 林 稚内東小学校教頭

- ・ 「子育てファイル」の活用地区として、7名のモニターも決まっているのでその茶話会の様子も含めて状況を報告。

④南地区 佐近稚内南小学校長

- ・ 2つの柱で発表をする。①南地区のネットワークの広がり。「困ったことは相談を」の視点を大切に。②キャリア教育を小中連携の柱に。

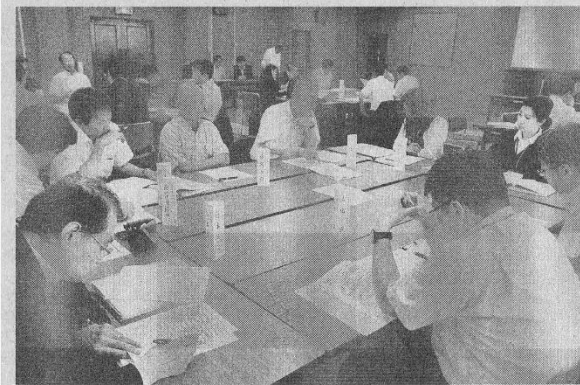
◆講評

(1) オブザーバー 本間子育て推進協議会事務局長（稚内東小中学校長）

- ・ グループの話し合いが具体化して、着実に進んでいることが素晴らしい。
- ・ 潮見が丘地区～映像の導入、映像の力を感じた。北地区～地区だけでなく全市的な視野での発表、期待したい。東地区～モニターの準備は出来ている。やってみないと、というのが率直な感想。南地区～学校教育として期待されていることを感じた。

(2) 表 教育長（閉会挨拶を兼ねて）

- ・ 潮見が丘地区全体の導入部分の映像を見たので、3つの子どもたちの思いや生活の発表に期待したい。使われた映像が稚内でないのが少し残念。
- ・ 北地区きめ細かな制度の報告に期待したい。しかし、それが制度の調査に終わらないで、だれが届けるか、だれが使えるかが心配だ。
- ・ 東地区「子育てファイル」のモニター、人と人のつながりをどうつくるか、当日を楽しみにしたい。
- ・ 南地区ネットワークの強みを期待したい。仕組みの問題だけでなく、具体的な話をしてほしい。キャリア教育でも。
- ・ 11月の発表を期待したい。当日参加した人には、稚内の子育て（運動）に自信を持ってほしい。



第2回子どもの貧困対策プロジェクト会議

稚内市教育連携会議では13日、市正庁で第2回子どもの貧困対策プロジェクト会議を開催。関係者約40人が出席し、11月21日(予定)の「子どもの貧困対策市民シンポジウム」で発表する、四地区アクシヨンプラン(四地区提言)の内容などを地区毎に協議。オール稚内で子どもの貧困の連鎖を断ち切るため、教育や医療・福祉などの

子どもの貧困対策プロジェクト会議 連鎖断ち切る

オール稚内で協議

関係者が知恵を振り絞っている。同連携会議では昨年12月、工藤広市長に対し18項目に及ぶ「稚内市子どもの貧困対策に関する提言」を提出。その中で北、南、東、潮見が丘の4地区毎に、それぞれの特色や実態に応じた取組みを推進するための研究成果を四地区ネットワークプランとしてまとめた。今年度もその研究を

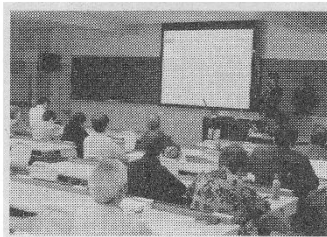
継続。医療・福祉や地域などの様々な「つながり」を研究の焦点にあてて地区毎に具体化。それを四地区アクシヨンプランとしてまとめ、市民シンポジウムで地区毎に発表する。

今回は地区毎に内容を協議。このうち、地域で児童・生徒を見守り、育むための方策として「子育てファイナル活用推進地区」を目指す東地区は、まだ同ファイナルが十分に浸透していないといい、地域に浸透させる方策について意見交換。同ファイナルを通して行政や学校、人と人との繋がりを構築。学校と行政が一体となって同ファイナルの積極的な活用を推進していくなどとした。

表純一教育長は「子どもの貧困については、公的なものとして何を取組んでいくかを考えれば考えるほど難しい。ここして会議で集まる方々からはとても熱意が感じられ、皆さんの声が子どもの笑顔に変わるよう会議を進めていければ」と話した。

なお、第3回プロジェクト会議は8月23日に開く。(川村竜也)

日刊宗谷 (2017年7月16日)



市教委、稚内北星大、稚内市教育連携会議主催の「子どもの貧困連鎖STOP講習会」が17日、稚内北星大で開かれ、参加した

安心して育つ地域作り

子どもの貧困連鎖STOP講習会

教育関係者らは、子どもの貧困問題について情報を共有し知識を深めた。

稚内市子どもの貧困対策本部会議では、平成27年12月に稚内市の街づくりに向けた子ども貧困対策に関する18項目の提言書を作成し、工藤市長に提言した。この中で教育連携会議の発足と子供たちをサポートするコーディネーター配置に向けた取り組みが始まることから開かれた第1回目の地域連携コーディネーター養成講座には、学生や教育関係者70人が参加。表教育長、若原幸範稚内北星大学准教授、清水冬樹旭川大学幼児教育学科准教授、山野良一名寄市立大学社会保育学科教授、平間信雄稚内市教育相談アドバイザーの5氏が講師となり貧困について講話した。

稚内プレス (2017年8月18日)

子ども・若者の貧困

リアルな姿などを調査

関係機関対象に

稚内北星学園大学へ委託

稚内市教委では今月から12月にかけて、市内の子ども・若者の貧困のリアルな姿、支援の実際と現状、子どものプロセスの実際を具体的に示すことを目的に「稚内市における子どもの貧困に関する調査」を実施する。調査やデータの集約・分析は稚内北星学園大学に委託し、その結果などを基に稚内の実態を把握し、子どもの貧困対策を効

果的に推進してきたいとしている。道では昨年10、11月、稚内市を含む道内13市町で「北極圏子どもの生活実態調査」を実施。対象は小学校2、5年生、中学校2年生、高校2年生の保護者。小学校5年生、中学校2年生、高校2年生の見

聞による調査を種々形でより稚内で起きている個別的・具体的な実態を把握しようと調査。稚内市における子ども・若者の貧困問題や育ちのプロセスを、関係者のみならず一般市民にも理解されるような研究成果を示したいとしている。調査は同大学が行い、今月はじめに市教委と契約。本人ではなく、支援などを行っている

関係機関を対象に実施していく。調査結果は明年1、2月で集約・分析し、今年度内に稚内市子どもの貧困問題プロジェクト研究紀要「わっかないの子ども・若者2017」で公表するとしている。(川村晋也)

日刊宗谷 (2017年10月29日)

各地の事例から学ぶ

子どもの貧困連鎖STOP講習会

稚内市教育委員会など主催の子どもの貧困連鎖STOP講習会は17日、稚内北星学園大学で開き、約40人の

市民や教育関係者が参加。稚内の子どもの貧困の連鎖を断ち切るため、地域における対策や方向性、他県の取組などを5人の講師が解説し、大人の在り方、やるべきことなどを学んだ。

全5講座を開講。表紙 教育長が「ひとりぼっちにさせない北の街を」。若原幸範同大学准教授が「子どもの貧困と大人の課題」。清水冬樹旭川大女子大教育学科准教授が「誰もか『ひとりぼっちにほらない居場所づくり』旭川の事例から」。山野良一名寄市立大学社会保育学科教授が「日本の現状と対策を考える」。平間信雄稚内市教育相談アドバイザーが「地区別コ

ーが「地区別コデーネーター」の出版です」とをテーマにそれぞれ講話。このうち山野教授は「単にお金がないことが貧困ではない。家庭の人間関係なども関係する」と強調し、沖縄県が実施する取組を紹介。同県の沖縄子どもの未来県民会議では子どもの貧困率削減目標を設定し、2030

年までに現在の約30%から10%に下げるとし、回会議には経済界、労働関係、教育関係、福祉関係などが参加。また、就学援助を申請する家庭が何らかの理由で少ないことから、CMを制作してテレビで放送。就学援助に対するイメージを変え、利用者を増やそうと取組んでいる

参加者も他県の例、子どもの貧困問題の本質的課題などを学び、自身が出来ることを考えながら真剣に耳を傾けていた。(川村晋也)



子どもの貧困連鎖STOP講習会

子どもの貧困 地域で考えよう

【稚内】子どもの貧困について地域一体で考える「子どもの貧困対策シンポジウム」が21日午後6時半から、稚内総合文化センターで開かれる。

市内の教育、福祉の関係者などでつくる「稚内市子どもの貧困問題プロジェクト会議」と稚内北星学園大学、市の主催。同会議メンバーらが、子どもの貧困を防ぐ地域ぐるみの体制をつくるための具体的な活動方針を地区ごとに発表

21日、稚内でシンポジウム

する。その後、貧困問題に詳しい北大大学院の松本伊智朗教授が、貧困問題を巡る道内の現状などについて講演する。

事務局の市教委は「子どもの貧困に向き合うために動きだしている市内の取り組みを知ってもらい、地域でできることを一緒に考えよう」と来場を呼び掛けている。

入場無料。問い合わせは市教委 ☎0162・23・6519へ。

4地区が提言示す

子どもの貧困対策シンポジウム 松本教授も講演

稚内市、市教委、稚内北星学園大学主催の29年度子どもの貧困対策シンポジウムは、21日午後6時30分から総合文化センターで開く。「貧困のSTOPは地区のつながりを生かすこと」をテーマに、プロジェクトチームによる4地区の提言、松本伊智朗北海道大学大学院教授の講演などが行われる。

稚内市民ぐるみの子どもの貧困対策は、今年で3年目。幼保小高大を繋ぐ稚内市教育連携会議が昨年5月に発足され、稚内市子どもの貧困対策本部会議

(既に解散)が平成27年12月に工藤広市長へ提出した18項目に及ぶ提言に基づいた、市民ぐるみの取組みが前進しつつある。

今年度は、プロジェクトチームによる4地区(北、南、東、潮見)の地域別アクションプランの具体化に向け活動。今回のシンポジウムでは、それぞれの地域の特色や実態に応じた取組みを推進するために市民目線でまとめた「四地区ネットワークプラン」を提言する。

地区ごとの提言は、潮見が「子どもの日常生活を切りとってみよ

う」。北が「たて横の切れ目のない子育て支援」。東は「子育てファイルを活用し人と人とのつながりを」。南は「キャリア教育を柱にして子どもを育てる」。

さらに、松本伊智朗北海道大学大学院教授が「調査結果に見る子どもの貧困」と題して講演。全道・稚内の貧困の状況、今後の取組みのポイント等を説く。

事務局では、稚内の良さを活かした4地区毎のネットワーク強化策に対する研究を深め、学び合う機会に多くの参加を呼びかけている。

夢絶えなない支援を

市教委 子供の貧困対策シンポ

市教委など主催の子どもの貧困対策シンポジウムが21日夜、文化センターで開かれ、参加した教育関係者ら市民240人が情報交換し対応策を考えた。

最初に表教育長が「



支援制度が届かない家庭が多くあり、幼稚園から大学まで連携し地域として手を差し伸べていきたい」と挨拶。続いて潮見、北、東、南の4地区ごとに取り組みできた貧困対策の提言があった。

北地区では支給される手当ての種類や相談先など記載した子育て支援お助け帳について説明し、このリーフレットを広めることで制度利用の大切さを知り経済的理由で子供が夢

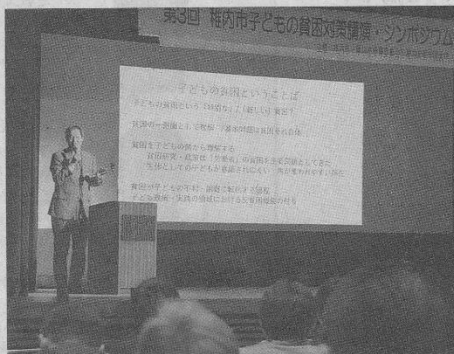
を絶つことがないようになりたいな」と話していた。

北大大学院の松本伊智朗教授が「調査結果に見る子どもの貧困」と題し講話した中、年収300万円以下、1

000万円以上の家庭を様々なデータで比較すると「子供の教育にかかるお金や家族旅行の回数など、低所得層は少なく子供たちの経験に差が出てしまう」などと話していた。

稚内プレス (2017年11月22日)

貧困防止 地域別に提言 稚内でシンポジウム



子どもの貧困の調査について講演する松本教授

【稚内】地域で子どもの貧困について考える「子どもの貧困対策シンポジウム」が21日夜、稚内総合文化センターで開かれた。市民約220人が参加し、市内の4地区の代表による貧困を防ぐための提言と、北大大学院の松本伊智朗教授の講演に聞き入った。

市内の教育や福祉関係者らでつくる「稚内市子どもの貧困問題プロジェクト会議」と市、稚内北星大の主

演。所得の低い家庭の方が、子どもに関する相談先が少なく、支援制度を知らないと答えた人が多かったデータを紹介し「つながりを地域でつくる仕組みが大事」と話した。(岩崎志帆)

北海道新聞 (2017年11月23日)

4地区が提言示す

子どもの貧困対策シンポジウム 決意新たに推進

稚内市子どもの貧困対策シンポジウム・稚内北星学園大学COC地域シンポジウムは21日、総合文化センターで開き、参加した教育関係者や一般市民220人を前に、市内4地区プロジェクトチームが地域の特色や実態に

稚内市子どもの貧困対策シンポジウム・稚内北星学園大学COC地域シンポジウムは21日、総合文化センターで開き、参加した教育関係者や一般市民220人を前に、市内4地区プロジェクトチームが地域の特色や実態に

応じた取組みを推進するための「4地区ネットワークプラン」を提言。地域全体で子どもの貧困の連鎖を断ち切っていく決意を新たに

開会で表純一教育長が「今回の提言に対し市民から意見を頂き、

それを今後の貧困対策にフィードバック出来るようなシンポジウムに出来れば」などと挨拶し、4地区プロジェクトチームがそれぞれ

このうち潮見地区の提言は「子どもの日常生活を切り取ってみよ

う」。幼稚園から高校生までの今を知ることから始め、大人が何を出来るか。何をすべきかを考えるきっかけにするため、子ども達の声と同大学の協力を得て映像化し、ポスターも作成。それを子ども達の貧困問題に対する関心を持ってもらうアイテムとして、積極的に活用していく。同地区責任者の網谷一幸潮見中学校長は「潮見地区は幼保小中高大が揃った稚内の学園地区。この強みを活かし、皆で連携しながら子ども達に温かい気持ちを届けられる取組みを進めたい」と話した。

東地区は「子育てフアイルを活用し、人と人のつながりを」。子育てフアイル活用推進モデル地区として、「孤育て」させないまちづくりを重点に、大人が繋がり子どもを支える地区を目指す。同フアイルの効果的な使い方を保護者が考え合うモニター茶話会を10月14日に東小で開き、人と人の繋がりを確実に広げられると確信。今年度中に2回目の茶話会も開き、フアイルの活用方法などを研究していくとした。

このほか、北地区は「縦・横の切れ目のない子育て支援」。南地



220人が参加した子どもの貧困対策シンポジウム

区は「キャリア教育を柱として子どもを育てる」と提言。それぞれの地区の特色を活かした取組みを進め、子ども達の貧困の連鎖を断ち切ることを目指していくとした。

福祉教育を研究し、子どもの貧困がもたらす社会的不利や困難の解決、緩和するための対策を追求している松本伊智朗北海道大学大学院教授は、「正直、区は「キャリア教育を柱として子どもを育てる」と提言。それぞれの地区の特色を活かした取組みを進め、子ども達の貧困の連鎖を断ち切ることを目指していくとした。

福祉教育を研究し、子どもの貧困がもたらす社会的不利や困難の解決、緩和するための対策を追求している松本伊智朗北海道大学大学院教授は、「正直、

圧倒された。それぞれの地区でこれだけのチームを作り、具体的なアクションを起こしているのが凄い。こんなアクティブな街はそうそうない」と講評。その後は「調査結果に見る子どもの貧困」と題して講演し、全道の貧困状況から見える貧困家庭の特徴などを説いた。

(川村竜也)

日刊宗谷 (2017年11月23日)

第Ⅲ部

稚内市子どもの貧困関連調査報告



稚内市における子どもの貧困の実像

稚内北星学園大学 准教授 若原幸範

はじめに

2016年に北海道は、稚内市を含む13自治体の子ども・保護者約1.9万人（子ども：8,187件、保護者：10,942件）を対象として「北海道子どもの生活実態調査」を実施した。この大規模な調査により、北海道における子どもの貧困の実態が量的（統計的）に把握されたのは画期的なことである。稚内市においても、今後の子どもの貧困対策の重要な基礎データとして活用していくことが求められる。

他方、今回実施した「稚内市子どもの貧困関連調査（以下、本調査）」では、稚内市における子どもの貧困の実態を質的な側面から把握することを試みた。すなわち、稚内市において実際に起こっている子どもの貧困を具体的かつリアルに捉え、問題の本質を抽出する試みである。

本調査においては、稚内市内の教育・福祉・医療の現場で子ども支援に携わる関係者、官民合わせて17名にご協力いただき、各1時間程度のインタビュー（一部、複数名同時での実施を含む）をさせていただいた。なお、本来であれば調査の信頼性を担保するためには一定程度詳細な調査対象者のプロフィールを示すべきだが、調査内容の性質上プライバシーに最大限の配慮が必要であるため、ここではこれ以上のプロフィール一切を秘匿とすることをご了承願いたい。

稚内市における子どもの貧困の実像—エピソードの再構成によるペルソナ構築

はじめに述べたように本調査の目的は、稚内市に

おける子どもの貧困の現実を具体的に示すことにある。しかし、この問題は極めてナイーブな側面を含むため、当事者のプライバシーには最大限の配慮が必要であることは言うまでもない。

インタビューにおいては調査協力者に子どもの貧困に関わる具体的なエピソードを当事者個人が特定されないよう最大限の配慮の上でお話いただいた。その上で、さらに慎重を期すため、ここではお話しいただいたエピソードをそのまま記すのではなく、報告者の判断で複数のエピソードを盛り込んだ架空の人格を創作する形式を取ることにする。

以下に記す具体的事例は、確かに稚内市において起こっている現実である。ただし、それぞれ複数の事例を組み合わせたり、必要な限りで一部を改変したりしているが、困難状況を誇張したり矮小化したりはしていない。また、各事例のプロフィールは全て完全に架空のものである。

A 小学6年生・女子

Aは母子家庭で一人っ子である。母親はAが就学前に離婚し、パートを掛け持ちしながら家計を支えている。祖父母は市内にいるものの、母親との関係は良くない。

5年生の時、1泊2日の宿泊研修があったが、当日の朝、Aは学校へ現れなかった。心配した担任がAの自宅へ様子を見に行くと、母親は仕事に出ておりAが一人で家にいた。特に体調が悪い様子もなく、学校へ来なかった理由を聞くと、1日目の昼食のための弁当を用意してもらえず、恥ずかしいから行きたく

なかったのだと言う。担任は「昼食は何とかするから」と宿泊研修へ誘ったが、結局は欠席した。

後日、母親に事情を聴くと、家事と仕事に追われて余裕をなくしており、弁当が必要であるという連絡を見落としていたのだという。忙しい母親の様子を見て、Aも言い出せなかったのかもしれない。

6年生の修学旅行にはみんなと一緒に参加することが出来、仲間たちとの楽しい思い出をつくることができた。しかし、他の子どもたちが新しい服や靴を買ってもらっているなか、いつもの服装で参加したAは一抹の寂しさを抱えてもまたいたのである。

B 小学2年生・男子

Bは両親と弟との4人家族である。父親は働いているが不安定な就労のため十分な収入は得られず、家計は大変厳しい状況にある。母親は日中パートで働いており、弟は保育園に通っている。

Bは些細なことでも“キレ”やすく、友達に対して汚い言葉をぶつけ、手をあげることも少なくない。Bが通っていた保育園に就学前の状況を尋ねると、保育園時代から同様だったし、Bの弟も同じような状況だという。送り迎えや家庭訪問での様子を見ると、両親とも穏やかな性格で、Bや弟がなぜこのような態度をとるのか、保育園・学校の先生には理由が分からなかった。

ある日、Bの祖父母から学校・保育園に連絡があり、実は父親がアルコール依存症であることが知らされた。働いても働いても楽にならないことへのストレスからか飲酒量が増え、次第に酔って妻や子どもたちに暴言を吐くようになり、近年では手をあげるようにもなっていたという。最近はますます症状が悪化し、仕事にも支障が出るようになった。さらに酷くなった暴言・暴力に耐えかね、母親と子どもたちは祖父母宅で生活することになった。

C 小学4年生・男子

Cは両親と姉との4人家族である。父親は定職に就いており、十分とは言えないものの、それなりに安定した生活を送ることが可能な収入を得ている。母親は専業主婦であり、姉は中学1年生だが、このところ学校を休みがちである。

Cの家族は朝食を食べる習慣がなく、就寝時間も両親に合わせて22時を過ぎることが通常である。姉弟ともに低学年の時からスマホを持たされており、家では四六時中ゲームやインターネットをしている。そのため、学校でのCはいつも眠そうにしており授業に身が入っていない。給食を食べて午後になると少し元気を取り戻すが、晴れた日でも外に出て遊ぶことは少ない。

両親は共にパチンコが趣味であり、週に何度も通っている。その間、姉弟は家でゲームやインターネットをしながら時間をつぶしている。食事はコンビニ弁当など出来合いのものがほとんどで、子どもたちだけで夕食をとることも少なくない。姉弟ともに肥満傾向にある。

両親のパチンコはギャンブル依存が疑われるレベルにあるようだ。母親の子ども時代を知る近隣住民によれば、Cの祖父母もパチンコ好きで借金のある生活をしていたという。

D 小学5年生・女子

Dは母子家庭で小学3年生の弟との3人家族である。母親はDが2年生の時に離婚し、その後パートで働いているが収入は少なく、就学援助を受けている。

Dがひどく体調を崩し市立病院で入院が必要であるとの診察を受けた。しかし、母親は入院費用の不安から何とか通院で治療して欲しいと懇願した。病院側から市の医療費助成の説明を受け、安心して入院を決めたものの、同じ理由で今度は入院中の食事は出さないで欲しいと願い出た。

D の母親は日々の生活に精いっぱい、新聞も市の広報誌もほとんど読むことはない。また、身近に気軽に相談できる人もおらず、この件に限らず本来利用できるはずの各種制度の情報をほとんど持っていなかった。

E 中学3年生・女子

E は母子家庭で小学6年生の弟と3人家族である。発達障害が疑われる母親は職についておらず、近所に住む高齢の祖父母から若干のサポートを受けながら、生活保護を利用して生活している。

E は人づきあいがとても苦手で、小学生時代から友人との関係がうまくいかず休みがちだったが、中学校に入学後まもなく不登校になった。E は発達障害が疑われるが、特に祖父母の反対が強く認定は受けていない。2年生になってから「つばさ学級（適応指導教室）」に通うようになったが、当初はスタッフともあまり話さず、一人で好きな絵を描きながら過ごすことが多かった。それでも少しずつ元気を取り戻し、スタッフや他の子どもたちとの会話も増えている。

母親は当初、E を不登校にってしまったとひどく落ち込んでいた。しかし、送り迎えの機会などにつばさ学級や教育相談所のスタッフとの会話を楽しむようになり、他の親たちとのつながりも広がっていきなめで、E と共に元気と自信を取り戻しているようである。

F 高校1年生・男子

F はアルバイトをしながら定時制高校に通っている。母子家庭で弟と妹の4人家族である。母親は体調を崩しがちで働くことが難しく、生活保護を利用して生活している。

F は中学時代にいじめに遭い、不登校になった。当時の担任の勧めで「つばさ学級」へ通うようになり、少しずつ元気を取り戻し、将来自立して生活するこ

とを目標に定時制高校への進学を決めた。

働きながらの通学は楽ではないが、クラスに友人もでき、意欲を持って学習に取り組んでいる。最近では担任の勧めもあり、主任児童委員の紹介で子ども支援にかかわるボランティア活動に参加している。高齢のボランティアスタッフが多い中で、F は年齢の近い「お兄さん」として子どもたちから大人気である。これまで他人に慕われたり頼られたりする経験の少なかった F は、このボランティア活動にやりがいを感じているようである。

稚内市における子どもの貧困の本質と

その存在形態—システムとしての把握の試み

以上のような諸事例から抽出されるキーワード、すなわち稚内市における子どもの貧困の現実を構成する本質的要素は、①金銭、②時間、③情報、④関係、⑤精神、⑥健康、⑦能力、それぞれの「貧困（不足あるいは不全）」である

①金銭の貧困は、子どもの貧困の最も根本的な要素であり起点の位置にある。金銭は言うまでもなく私たちの生活の土台をなすものであり、その揺らぎは他の諸要素における貧困を誘発するのである。

②時間の貧困は、特に子育てをしながら働く保護者が抱える課題である。金銭的貧困世帯、とりわけひとり親世帯の保護者は仕事と家事・育児に追われ、時間的な余裕を失うことになる。それゆえ、事例 A のように子どもにとって重要な連絡事項を見落とししたり、事例 C のように家事や自分の時間を確保するためスマートフォンに育児を代替させるような現象が起こると考えられる。子どもの側からすれば、家族や友人と共に過ごす時間の喪失として現れる。

③情報の貧困は、本来活用できるはずの社会資源・制度等へのアクセスが制限される事態を指している。時間的な余裕を失うとメディアへのアクセス、とりわけ地域の情報が掲載されている新聞や広報誌に目を通すことが難しくなる（事例 D）。こうしたメディ

アは、テレビ等と異なり家事などをしながらアクセスできないためである。また、④関係の貧困に関わって、日常的に相談したり情報交換できる他者との関係が失われること、また⑤精神の貧困に関わって、自ら情報を探ったり関係機関に相談する意欲を失うことは、情報の貧困に拍車をかけることとなる。

④関係の貧困は、子育ての孤立化に象徴されるような“つながり”の不足である。時間に余裕のない保護者はPTA等の集まりにも参加しにくく、公的機関へ相談する余裕も失われる。情報へのアクセスが限られる中では、なおさら“つながる”機会を得ることは困難となる。それゆえ、多くのことを1人で抱え込むこととなり、精神的な余裕も失い、自信や自己肯定感を低下させていくのである。こうして保護者から人間関係という資源（ソーシャルキャピタル／社会関係資本）を継承できず、さらに“つながる”ということを学ぶ機会も失われれば、子どもへ関係の貧困が連鎖することとなるのである。

⑤精神の貧困は、心の余裕や自信、自己肯定感の喪失を意味する。時間や関係の貧困は保護者の心の余裕を奪い、ひとたび子どもに問題が起これば自分を責めて自信を失ったり、感情のままに子どもに怒りをぶついたり、最悪の場合暴力に至ることもある。心の余裕を失った保護者から適切な愛情を受けられない子どもは、自己肯定感を著しく低下させ、他者との関係づくりに課題を抱える（暴力的な行動をとる、ひきこもる等）傾向が強くなる（事例B、事例Cなど）。

⑥健康の貧困は、生活が乱れることにより栄養の不足・偏りや睡眠の不足、その結果としての心身の病気といった事態を指す（事例Cなど）。さらに、情報の不足も相まって病院の受診を控えるようになると、この事態はさらに深刻化することとなる（事例D）。また、健康のカテゴリーに含めてしまうことには異論もありえようが、「障害」もきわめて重要な要素となる。事例Eのように、子ども本人のみならず保護者が発達障害を持っている（あるいは持っているこ

とが疑われる）ようなケースについては、本調査においても多くの証言があった。祖父母世代も含めた保護者の世間体（④関係の貧困）や障害への無理解（③情報の貧困）といった課題をはじめ、特に障害者への支援制度や就労上の問題が貧困に結びつくことは、いくら強調してもし過ぎることはないだろう。

⑦能力の貧困は、①～⑥の帰結として生じる学力、生活力そして子育て・教育力をはじめとする能力の不足である。同時に、こうした能力の不足は①～⑥の貧困を固定ないし深刻化させ、とりわけ子育て能力の不足は貧困の世代間連鎖の直接的契機となるのである。

これまで述べたことから明らかにように、①～⑦の要素はそれぞれ単独に存在するのではなく、各ケースおよび人格の内部で相互に関連しながら総体（システム）としての子どもの貧困を形作っている。さらには、ひとつの人格における貧困総体は、他の人格における貧困総体との間で関連してもまたいる（例えば親子間の貧困の連鎖がその典型である）。

ただし、論理的には①金銭の貧困と⑦能力の貧困は、他と並列でない固有の位置にある。まず、①金銭の貧困は子どもの貧困総体の理論的起点であり、他の諸要素の土台の位置にある。したがって、原理的に①金銭の貧困の克服なくして、貧困総体の克服はなし得ない。逆に言えば、①金銭の貧困へのアプローチを欠くすべての支援は事の本質を見誤っていることとなる。

そして、⑦能力の貧困は他の諸要素の理論的帰結であり、したがって子どもの貧困総体の具体的性質を示す位置にある。また、⑦能力の貧困は、貧困の悪循環を二重に媒介する。ひとつは他者（ないし社会）の貧困総体との関連における外的循環であり、もうひとつは自己の再生産にかかる内的循環である。前者は貧困の世代間連鎖および社会的排除（排除的な社会構造へ無防備）として現れ、後者は自己の生活困難（縮小再生産）および自己否定として現れる。した

がって、この悪循環を克服する直接的契機は、その媒介項たる諸能力の回復にあることとなる。

以上のことは、差し当たり下図のようにモデル化できるだろう。子どもの貧困問題が複雑で理解しにくく、対策が困難であるのは、子どもの貧困という現象が諸要素間・システム間で関連し合う複雑な形態で存在しているためである。したがって、子どもの貧困対策においては、各ケースにおいて1つの要素あるいは人格のみに着目し、他と切り離して縦割りの対策を講じることは単なる対症療法に過ぎないこ

とになる。必要なのは、各ケース・人格の課題を総体的かつ集团的、そして社会的に捉え、多角的にアプローチする総合的な対策である。

本プロジェクトが基本方針としているように、子どもの貧困対策において「幼保小中高大連携」および「教育・福祉・医療連携」、そして「地域づくりとしてのアプローチ」が重要となる理論的根拠はここにある¹。

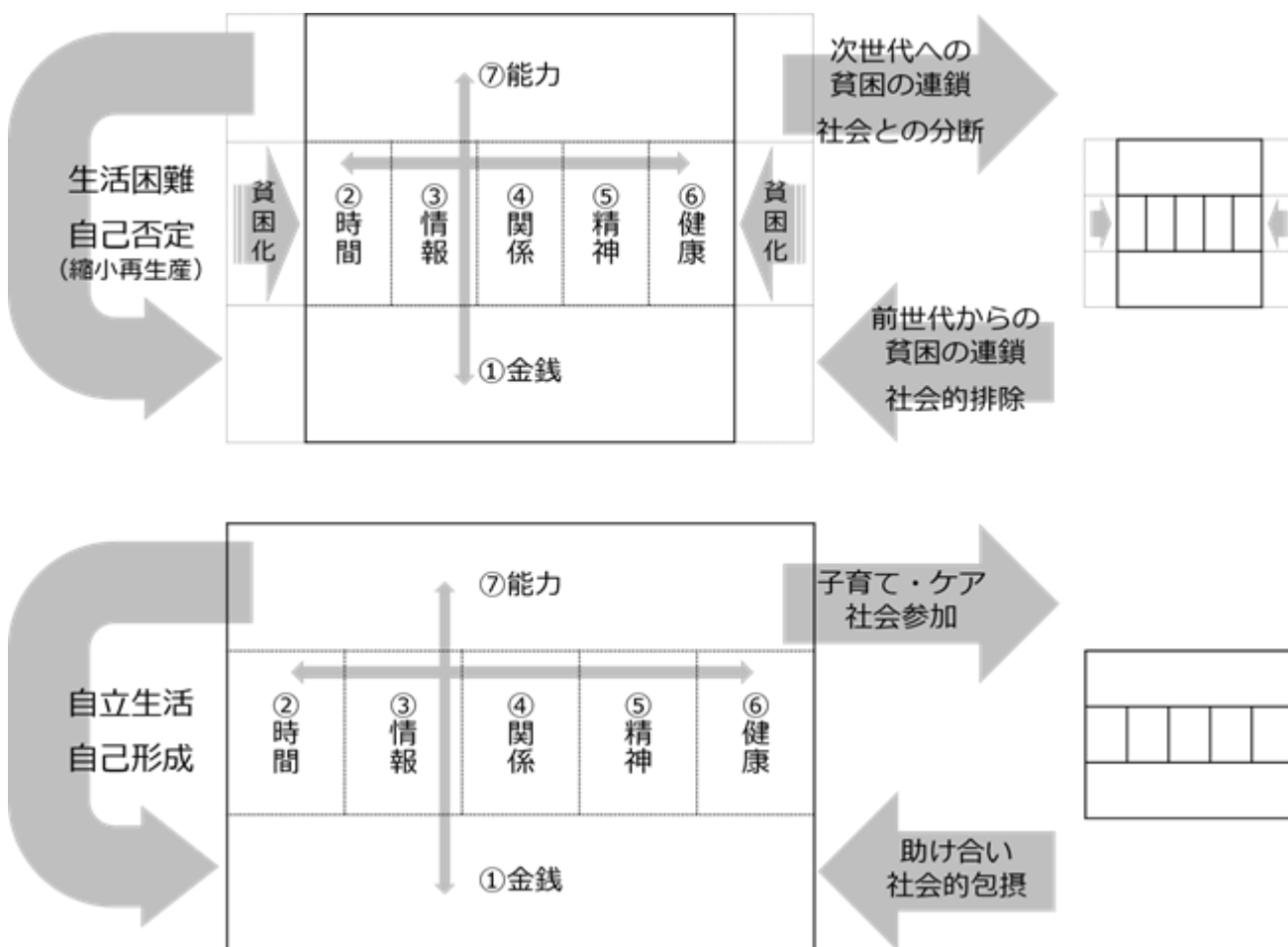


図 子どもの貧困システムと対策の方向性：悪循環（上）から好循環（下）へ

¹ 稚内市における子どもの貧困対策の特質については、本誌前号の拙稿「序言 子どもが育つ地域をつくる」および、拙稿「学び合い、拡張する「子育て運動」」『教育』866号（2018年3月号）、かもがわ出版参照。

現代的貧困と世代間連鎖—対策の方向性

本調査において、多くの調査協力者が異口同音に語った証言に次の2点がある。ひとつは、困難を抱えている子どもや保護者の多くは、祖父母世代から困難を抱えていたということである。もうひとつは、昔から貧困はあったが、現在の貧困は質が異なっているということである。

これらの証言は、稚内市においても貧困の連鎖は確かに存在しており、しかし現世代の貧困は前世代の貧困とは異なる質をもって引き継がれているということを示している。稚内市に限らず、子どもの貧困問題をめぐっては、特に貧困の連鎖をどう止めるのか、が重要な論点となっている。そこで、この点について上記の子どもの貧困理解をふまえて検討を加えておきたい。

第1に、①金銭の貧困の理解である。近年、貧困概念は一般的に「相対的貧困」として理解されるようになってきている。相対的貧困とは、簡単に言えば当該社会の所得の中央値の半分を下回っている者を貧困とする概念であり、したがって社会の経済的水準が変化すれば貧困の基準も変化することとなる。本調査においても聞かれた「現在は経済的には豊かななかでの貧困」という証言は、こうした理解に基づいている。

ただし、ここで注意しなければならないのは①金銭の貧困は所得(収入)の側面のみで理解するのではなく、当該社会における平均的なライフスタイル(支出)の側面と総合して理解する必要があるということである。例えば、携帯電話やスマートフォンは一見すると贅沢品に見えるかもしれないが、現代日本社会においてはほとんどの人が所持しているものである。そのため、今やそれらを所持していることを前提として社会が成り立っており、就職活動や情報を得るためにも必須のツールになっている。したがって、いかに金銭的に困窮した状況であっても、それらのために支出をせざるを得ないのである。こうした点をふまえなければ、現代社会における貧困、そして当

事者の「困り感」を見誤ることとなる。

第2に、諸要素の世代間比較である。現代社会はかつての時代に比べれば、たとえ「貧困状態にある」とされていても物質的には豊かであるといわれる。しかし、上記のように子どもの貧困を諸要素の連関によるシステムとして捉えると違った様相が見えてくる。

例えば昔は地域のつながりや親戚間のつながりが強く、困った時に助け合える関係が身近にあり、そのことが①金銭の貧困による困難を緩和していた。しかし、現代は昔に比べて④関係の貧困化が進んでおり、①金銭の貧困がより直接的に生活上の困難として現れるようになってきている。このような見方をすれば、一口に「貧困の連鎖」といっても、前世代の貧困と現世代の貧困には質的な差異が生じていることが分かる。したがって、その対策のあり方にも変化が求められるのであり、ましてや「昔に比べれば今の貧困は軽いものである」などとして軽視することはできない。むしろ、貧困そのもののあり方が複雑化している現代社会にあっては、その克服のあり方も複雑化し見通しを持ちにくくなっていると言える。

第3に、⑦能力の貧困の「貧困の連鎖」問題における位置である。先に述べたように、⑦能力の貧困は①金銭の貧困を起点とする諸要素の連関の帰結としての位置にあり、貧困の悪循環を媒介する契機である。それゆえ、次世代(子ども世代)が将来自立した生活をなすための能力を形成することは、自ら貧困の連鎖から抜け出すための直接的契機となる。その意味で、貧困の連鎖を止めるためには、そこから抜け出すための能力を高めるための子どもへの教育的支援(学力向上・学習支援など)はきわめて重要なものとなる。

しかし、ここで注意しなければならないことは、⑦能力の貧困はあくまで他の諸要素の帰結であるということである。つまり、原理的にみれば、いかに子どもの能力の向上を支援したとしても、他の諸要素の

貧困が克服されない限りその能力は奪われ続けるということになる。したがって、貧困の連鎖を断ち切ることを目指すのであれば、⑦能力の貧困に対するアプローチを入口としつつも、他の諸要素、特に①金銭の貧困へ届くアプローチを同時に行わなければならない。さらに言えば、子ども世代の貧困は親世代の貧困に直接に影響されている。それゆえ、次世代への貧困の連鎖を断ち切ることは、現世代の貧困の克服への取り組みなしには現実的でありえないのである。

以上の3点は、子どもの貧困問題に取り組む関係者にとっては今や常識的な基本事項と言えるだろう。しかし、ここであえて理論的に再確認したのは、この間の「稚内市子どもの貧困問題プロジェクト」に対し、市民からの批判としてたびたび「貧困への理解の不十分さ」「教育対策への偏重」が指摘されているためである(例えば、これまでの市民シンポジウムのアンケート等において)。さらには本調査においても、本プロジェクトの課題として、あらためて貧困問題そのものへの理解の深化・共有化が必要であること、特に貧困対策の基本である生活保護制度への理解を深めることの必要性が指摘されている。

本プロジェクトが真に地域に根差し、地域づくりとして子どもの貧困対策に取り組んでいく上では、こうした批判に応え、基本事項をくり返し確かめ合いながら、意識的な議論と実践を重ねることが求められよう。

おわりに

以上、本稿では関係者へのインタビューによるエピソード収集を経て、その再構成によってペルソナを構築することにより、稚内市における子どもの貧困の具体的現実を示した。その上で、稚内市における子どもの貧困を構成する本質的要素を抽出し、その存在形態を総体(システム)として把握し、そのモデル化を試みた。

ここで示した子どもの貧困システムのモデルが、

どの程度に稚内市に固有なものであるか、そしてどの程度に普遍性をもつものであるかは、さらなる精査が必要である。しかし、いずれにしても子どもの貧困が多数の要素によって構成されるシステムとして存在し、内的にも外的にも連関的・循環的に生成されている、きわめて複雑な形態として存在していることは確かであろう。

それゆえに子どもの貧困対策は困難を極めるのであるが、だからこそ稚内市における子どもの貧困問題プロジェクトがもつ方針(「幼保小中高大連携」「教育・福祉・医療連携」「地域づくりとしての子どもの貧困対策」)の正当性と普遍的価値もまた明らかとなる。

この取り組みを全道・全国に発信し、他地域と相互に学び合うことにより、地域に根差しながらも広く社会的な連帯のなかで子どもの貧困という困難な社会問題を克服していく。本調査がその小さな一助となることができれば幸甚である。

編集後記

若者の思いも力に

稚内市子どもの貧困対策プロジェクト研究紀要の第2号をお届けできることを嬉しく思います。子どもの貧困問題を通して問題の本質と同時に、稚内の運動の裾野の広がりを知っていただけるものと確信しています。稚内の「連携」を肌で感じることができると思っています。

先日、稚内北星学園大学でCOC事業【地(知)の拠点整備事業】の第8回地域活動報告会がありました。その報告の中の一つに、『稚内における子どもの貧困問題に関する調査です。稚内における子どもたちの困難状況や育ちのプロセス、また子ども・家庭への支援の総体を明らかにし、可視化することを目指しました』という報告がありました。

その中で、学生は、「貧困というと、お金の(経済的)貧困を考えてきたが、今調査で育ちの貧困、心の貧困があることを知った。」「子どもの貧困に関わって、ポスターや動画を作成したが、子どものストレートな気持ちを表現するのに苦労した。」「貧困と医療について勉強になった。子どもに向き合う医療支援の大切さを知った。稚内の病院、行政も含めて医療を考える体制を知った。」などなど、若者の子どもの貧困に対する考えの広がりや深まりを強く感じました。さらに、「調査そのもので大変勉強になった。聞き取り調査の質問の仕方によって、調査の深まりが違うことを知った。」という意見もあり、心強い限りでした。

今研究紀要は、稚内の子ども貧困のリアルな実態と、その連鎖を断ち切る「つながり」と「連携」が表れています。それぞれの立場で活用していただけることを期待しています。

【研究紀要チーム 曾我部 藤夫】

稚内から世界へ、感謝を込めて

ご承知のとおり、稚内市は地理的・社会的条件の厳しさのなかにあり、子どもの貧困問題をはじめ全国的な社会問題が先鋭的に現れる地域です。しかしながら、子育て運動をはじめ、近年の子どもの貧困対策を見ても、そうした社会問題に抗する実践は常に最先端を走っています。もちろん、その過程で紆余曲折はありまじょうが、それを自ら乗り越えていく力強さが稚内にはあり、それは地域文化となって脈々と現在に引き継がれています。

近年、私は国内外の学会やシンポジウムで稚内市の子育て運動や子どもの貧困対策について報告・発表する機会をいただいています。そのいずれの機会でも、参加者から非常に強い関心が寄せられます。子育て運動をはじめとする稚内市の諸実践の日本国内での評価は既に定着していますが、今や国際的にも発信・交流すべき段階に入っていると言えるでしょう。その発信源となるのが私のような研究者の、そして地元大学である稚内北星学園大学の大切な使命であると考えます。本誌もそのツールの1つとなれば幸いです。

私は2011年に初めての職場として稚内北星学園大学へ着任し、この間、地域の方々に大変お世話になりました。ながら学び、研究者として育てていただきました。しかし、現職での仕事は本誌の作成をもって最後に、今後は道外の大学へ移ることとなります。とはいえ、外にいるからこそできることもあると思います。これまでの感謝の気持ちと、これからが本当の恩返しであるという誓いを込めて、本誌を納めます。

最後に、公私にわたる生活の激変のなかで私の執筆・編集作業が遅々として進まず、発行予定を大幅に遅らせてしまったことを深くお詫び申し上げます。

【研究紀要チーム代表 若原 幸範】

稚内市子どもの貧困対策プロジェクト研究紀要
わっかないの子ども・若者 2016・2017

発行日 2018年11月20日
編集・発行 稚内市教育連携会議
稚内市子どもの貧困対策プロジェクト会議
稚内北星学園大学
事務局 稚内市教育委員会教育部学校教育課
〒097-8686 稚内市中央3丁目13番15号
TEL : 0162-22-6519 FAX : 0162-22-7913
Mail : gakkou@city.wakkanai.hokkaido.jp



わっかない